

を狼狽の地位に陥れ、又は少くとも之に屈下しないといふ意氣を示しなどする階段より進んでは自分と意見の合はぬ人に對し公然反抗し、時には暴力に訴ふるも辭せず、袋叩きとか、胸上げとか、襲撃とかの蠻行をも敢へてするやうになる。此等を仔細に研究すれば先の紳名樂書の心理などと共に面白い研究事項である。

一併し如上の行爲もさして深き根據理由によるのではなく、多くは所謂反抗本能として單に反抗せんがために反抗するのである。一寸様子が氣障だとか、自分に對する態度が氣に喰はぬとかいふ風な單純な事項を重大視し、若しくはこれを口實にして無謀の行爲に出づること少からぬ。日頃一個人として接すれば極めて溫良と見える青年でも、多數の同輩中になれば、反抗本能を發揮し、殆んど別人の如き過激な言動をなし、一驚を喫せしめる事がある。又青年者が團體的に權威に抗争するが如き場合を察するに、抗争は一手段、一口實たるに止り、彼等の動機は他に存するが如き事情も、少なからぬを知らねばならぬ。例へば眞意は怠業サボタージュにあるも、口實を某教師の不

徳無能又は學力不充分等に籍り、若しくは學校當事者の同情なく誠意なしなどと漠然たる理由を列舉し、群衆の威力を利して非を貫徹せんとするが如き類である。

青年は感情が強く精神の獨立の念の深い事は上述せる所であるが、ために自分の考へ込んだ方へは何處までもと極端に進んで行く。斯くて一方に偏した考を持つやうになる。所謂青年の偏頗性なるもの此れである。概言すれば青年期の注意作用の廣さは制限性に富むといふ特性を有する。従つて或方面の注意は不充分でボンヤリとなり、分配性に缺くる所を生じ、人との交際關係の如きもとかく圓滑でない。父兄の意見と衝突し、精神上の離別の起るのはまさに此の時期にある。斯くて言ひ合ひの結果家を飛び出し、具さに世の辛酸を嘗め、再び家に還れば、最早先の阿蒙でなく、遂に父兄の意見と折合ふが普通である。これ分離の間に色々世上の經驗を重ね、社會的訓練を経たために、偏頗性も多少調和し、分配性も相應擴大し、家出前に比ぶれば、精神上の内容が一新された程豊富となつたからである。古來

「可愛い子には旅をさせよ」との言は此の意味に於ては首肯すべき眞理を含んで居る。

九 熾烈なる愛情の表現時代

少年期の感情作用は劇烈であるが、一時的で變化が多い。然るに青年期は同様に劇烈ではあるが、比較的永續する。故に一度思ひ詰めた事は容易に變らない。愛するにも恨むにも根據があつて、雲煙霧散しないから、少年者を取扱ふ時と頗る異なる用意を以てせねば、飛んだ事件が出来する。夫の大正七年度に教育界を驚かしめた某縣立師範學校の放火事件なるもの原因は他なく、二年の落第生某といふ青年が、化學教師を恨み、含監當直の夜四回迄も放火し、遂に包み切れず、自白したのであつた。

感情對照の範圍について見るも、少年期迄は社會とか、政治とか、教育とか、宗教とか、道徳とかいふ類の事柄には風馬牛の態度を取つて居たものであるが、今や此等についても相當の理解を有し、注意をよび自己とは直接關係

のない事柄についても喜び怒り、憂ひ悲しみ激しい感情を起すのである。

「當期の感情中最も強烈なるは、何と言つても男女間の愛情で、他に對する愛情の如きも、此れが基となつて發生するものであるらしい。蓋しその見はれる時期も亦現はれ方も略々同一状態であるからである。愛情の當期に發達する所以は、思ふに最早自己を保護するだけの心身の働は出來上つたので、餘力が種族保存の方面に向ふからであらう。

青年期に於ては所謂無邪氣なる初戀が見はれる。而して此の期愛情の特色とする所は、八方當りであり、一時的であり、年齢などは必ずしも要件とならぬ觀がある。自己と同年輩の娘よりも遙かに年増の婦人を目的とするものもある。これ同年輩のものよりも能く己を知り且つ親切なるによる。處女も同様で亦年増の男子に懸想するものがある。嘗に異性間に初戀の行はれるばかりでなく、同性の者でも烈しく戀ふる。高等女學校の女生徒中には、同窓の仲間又は女先生に戀するものがあり、時には同性の情死などといふ極端な事件迄も引起すことがある。

之を戒むる色にありとは當期の若者に對する大聖孔子の警策である。一見平凡なるが如くで、しかも千古に通ずる眞理である。實に當期の愛情程濃厚なる色彩を帯びたるはない。譬ふれば、少年に菓子、俗人に金、學者に書物、女子の衣服と同様、青年には戀愛がある。恰も蠶の蛾の時代に相當するともいふべきか。蓋し蠶は蟲の間は食慾のみであるが、蛾となるや食慾なく、唯生殖慾のみである。少年時代には色慾なく、食慾盛んで蠶の蟲の時代である。然るに青年期は食慾の外に新に色慾といふ本能が発生し、異性に對して接近しようとして、茲に幾多人事上の波瀾が生起す。猶男女の戀愛については章を改めて詳述しようと思ふ。

感情生活が青年期に於て、廣さと深さを加ふるは、上述せる如くであるが、中に就きて愛他的同情、憐愍の情、義侠心などの見は、頗る強いものがある。即ち天地同朋て、愛他の念内に動いて勇敢なる犠牲となり、美はしい英雄魂となり、身を殺して仁をなす實例は、人世期中此の青年期に最も多い。友を救ひ親を救へる青年、主人を救へる忠僕、愛人に殉ずる節婦等、何れも純

潔の愛火の如くに燃え、人生の最勇者として尊き死に就き、斯くて幾多の美談を千載に留めて居る。

第七章 青年期における感覺の變化

一 官能主義の發露期

青年期には從來未だ嘗て見ることの出來ぬ幾多の新らしい感覺が發生して來るから、物珍らしくこれを使用すべく、熱中する時代である。即ちこれにこれ官能主義の發露期である。世往々にして官能主義と言へば、一概に之を擯斥せんとする傾きがある。夫の花袋荷風、葉舟、天外泡鳴諸氏によりて描寫せられたる作品中には、單に官能的の快樂の満足を以て人世の全部なるが如き風の人物が取扱はれて居らぬでもない。即ち現在の生活に即して其の日々を樂しんで行くのが彼等の日常で、全く物質や自然の奴隸となりし、現實主義、享樂主義の囚ふる所となつて居るから、斯様な一面ばかりを眺むれば官能主義を呪ふもの決して故なきではない。

併し更に深く考ふるに、官能其の物は決して悪いものではなく、其の罪は

これに耽溺するにある。蓋し我々の感覺は我々の生活を保護するばかりでなく、進んで新知識をえしめ、新世界に導いてくれる手引をなすものであるから、感覺が鋭敏で微妙であればある程、益々其の人を賢明にし、幸福にし、多趣味にし、高尚の精神を養ふに資する。官能の發達の著しい青年期に於て、彼等が無意識の間に、これが發揮に力めるのは固より當然のことといはねばならぬ。

斯く青年の世界は老年壯年の世界に比し、感覺は清新にして鋭敏深刻にして多方面であるから、その微妙の感覺の働きによつて享樂を叫び現實主義に向つて走るもの、其處に一種の向上あり、進展あるは否むべからざる所とはいへ、唯之に耽溺し官能主義、享樂主義を歎美するが如きは既にその弊害に陥つて居るものであるが故に、指導者は斯かる弊害の伴はぬ範圍内に於て、充分青年の官能を發揮せしむるだけの雅量を示すべきである。古今東西徒らに禁慾主義を以て向上世界に導く唯一の手段であるかの様に高唱するものがあるが、斯る考は青年の永遠の進歩を沮害こそすれ、寸毫も益

する所なきを知らねばならぬ。吾人は享樂主義を排せんとするものであるが、それと共により以上の程度に於てかゝる無意義なる禁慾主義を拒否せんと欲するものである。

青年期の精神生活にありては、知性中一として、感官を通過せざるものがないとは、スタンレー・ホール氏の至言である。實に當期は感官萬能の時代で、趣味といひ、戀愛といひ、凡てこれ感能的ならぬはなく、一切の求心性神經は新生命を傳へ、新印象を以て充たされるのである。これ人生に於て本期が極めて教育上有效なる時期たると共に、又極めて危険なる時期と稱せられる所以である。

二 青年の視覺

青年は新なる感覺の力を以て宇宙の大自然を發見し、新しき趣味を以て森羅萬象を眺めんとする。從來は無心に觀過したる道路の練瓦や河岸の棒杭や所在の石塊などの如き連續せる同一視印象をも、今や適當に彙類し

て觀察し、以て均齊釣合等の美を味はうとしたり、總ての事物を統括し、分類し、解剖したりして觀察しようとする傾向を生起するはまさに此の時にある。色彩に好惡を生ずることも著しく、殊に女兒にありては、その身邊左右にあるものは悉く自己の好む色に改めたりなどする。しかも好惡の變化の倏忽なる、當期の如きは亦稀である。

概言すれば、青年期にありては、視覺は強大の刺激を好み、色彩が濃厚で、光線の強烈なもの、若くは極めて鮮明な對比を喜び、穩和雅馴の色調を喜ぶが如きは、以後の時期にある。又色彩の濃淡光線の陰翳の強弱につきても、前期よりは一層精緻な區別をなしうるやうになる。しかし自己の好める色も時に忽焉として之を嫌ひ、反對に在來嫌へる色も俄に好むといふが如き激變を生ずることがある。

夫の音樂などに於けると同様、繪畫に對する趣味は多くこの期に見られ、熱中熾烈ために寢食を忘れるに至るのである。尤も冷眼視し若しくは無頓着の態度を取れる青年は一生繪畫に對する鑑賞の明なきに終るが常で

ある。以上は大體論に過ぎぬのであるが近時獨逸のケルセンシュタイネルやルツケンヌスやペレト氏等の實驗的に圖書を研究したるものゝ結果に徴すれば、描寫力の發達には第七段階あつて青春期はまさに其の最終段階に當つて居ることを語るのである。

情緒的繪畫の時期、

即ち四五歳迄の兒童に見ゆる錯畫若しくは簡單なる輪廓畫の階段を始めとして男子ならば十歳頃女子ならば十三歳頃に始まる第六の寫生段階を経終りに青春期に至り、繪畫發達の最終段階に達し、物の情趣を描き表はさうとする欲望が生じ、茲に情趣的繪畫が現はれるのである。更に細論すれば、此の描寫力が青年期に至り、一轉機をなすのは面白い現象である。パインスの觀察によれば、青春期に於ては創作能力増は加すれど、描寫能力は茲に行詰りの體となり、發達は停止する。所謂パインスの高原プラットフォームなるものこれである。蓋し此の時期の青年は自己の作品を實物と比較して缺點を自認するために勇氣を沮喪し、折角の楽しい幻影は消えて圖書に對する興味を失ふのである。これ一面彼れの鑑賞力評價力の向上を語るものである。

大概の人は一生涯此の状態を續けるのであるが、唯少數の圖畫的稟賦を有するものは製作に新たな興味を感じ、夫の五歳より十歳迄の兒童が自己の描ける作品の直接に示すものゝみを見ず、之を想像化して樂しむといふ風な黄金時代を再興する觀がある。ルツケンヌス氏によれば、青年期に此の創作力が再現した場合には、唯創作の興味換言すれば發表的の興味は、作品より生ずる快情よりも強く、動作の内に興味を感じ、好んであらゆるものを畫き、深刻なる満足を其の製作の過程其の物の中に發見するのである。此等の繪畫における創作力と評價力との相互關係の一般的法則は、或度合迄音樂の發達にも適用しえられる。

要するに青年期は視覺的印象の最深最強の時期である。故に大藝術家は此期に於て最も強く感じ深く銘したるものを最もよく知了し、後年技巧の熟達せる時に之を畫くものであるといふことである。さりとて大多數の青年は創作を爲さず、翫賞するだけであるが、斯様な人に對しては出來うる限り藝術に對する最良の觀念及情操を豊かに附與してやるがよい。何

となれば此の時期には藝術的な事が最多く記憶せられ又最も深い印象を與へるからである。彼等の手は畫くことをえうせずとも彼等の想像力はこれに代つて絢爛たる色彩と壯麗なる形態とを有する世界を畫くことが出来る。理想と希望と樂天主義と勇氣との種子を蒔くには人生此の期ほどの好機會はまたと他にないのである。

三 青年の味覺

味覺には甘酸苦鹹の四性質あつて、舌面により略分業的に此等を感じずるは實驗の示す所である。即ち舌の尖端は甘味を、後部の舌根に近い部分は苦味を、左右兩側は酸味を最も鋭敏に感知し、鹹味は到る處で鋭く感ぜられる。此の他滋味といひ、辛味などといふがあれど以上四種の混合せるものに、溫度覺、壓覺、嗅覺、筋覺などの加はつた一種の知覺である。

生時は母乳、砂糖水などのやうな甘いものを欲するが、成長するにつれて漸次鹹き物を取るやうになる。しかし何れかと言へば幼少の時期の間は

殆んど甘鹹二種に限られたるが如き觀のある比較的單純な味覺も、青年期には複雑になつて食物に對し新しき平衡を求めんとする。かつその食慾は變化し易く、時としては非常に冷きものを好み、時としては味の濃厚なもの喜び、食時の時も亦屢々不規則で、食量の如きも不定にして、殆ど轉變究りがない。頤骨が強くなつて、頤が突出し、顔面の形容も一變するばかり、咀嚼筋や顎骨やらが發達するため、一般に固形食物を要求する割合が増加する。なほまた青年期には酢物や或は麥酒のやうな酸苦の味を嗜み、食物の範圍が廣まると同時に、到底成人の口にしがたいもの迄も食ふ。夫のいかもの喰ひ「暗の夜汁」などといふ類の事は多く青年期に行はれて居るのであるが、それには好奇心も亦與つて大なる働きをなして居るは固よりである。スタンレー・ホール氏の統計によれば、當期の青年には石灰、鉛筆、護謨草、石鹼、蚯蚓、インク等の類を味へるものがあつて、其の數百八十種の多きに及んで居るといふ事である。

中に就き當期の特色としては酒、煙草のやうな刺激性の飲食物を好んで

攝取する習慣の萌すことである。四百九十八人の男女について飲酒を始めた年齢を調査せるものを見るに、二十歳が最も多く、十八歳、廿二歳、十五歳、三十歳等これに次いで居る。抑も酒は一時運動中樞を興奮せしめ、一時性の筋力増進を見るが、反應時短縮し、聯想に於ては論理的聯想が減じて音韻等の外的聯想が増加するといふ風な心的現象を現すのである。而も本人をして酒によりて却つて能力を増進したと信ずる謬想を懐かしめるは注意すべき事である。さなくも強烈な感覺を喜ぶ青年期の常として、酩酊によりて活力の増大したるを感じ、悦樂の情内に溢れ、小節を忘れ、自信を高め、友と共に交歡するに極めて重寶なるものとの考から、飲酒を喜び、滿引、痛酌、萬丈の光焰を擧げるに至らしめる。瑞西ベルン市の中學校長の測定によれば、氏は約十七歳の生徒二十人を二組とし、一組には酒精を興へ他の一組には之を禁止したのである。斯くて此等兩組の生徒に注意感受力、聯想記憶、思考などの精神作用を要する複雑な問題を課し、暗算で解かしめたに、此結果によれば、酒精黨は瞬間の能力昂進を顯はしたが、忽にして形勢一變し、

禁酒黨の勝利となつた。即ち酒精黨は一時間にして既に平均四、九パーセントの能力減少を示し、二時間にして一〇、九パーセントとなり、三時間には一二、五パーセントに達したといふ。

煙草も同様、此期に吸ひ始めて、習はしになつた者が多い。もと煙草の如きは本性好むといふものは稀で、青年期の一種の衝動や好奇心や模倣本能やが手傳つてこの癖をなすに至らしめるが常である。即ち自己は最早これ迄のやうな子供でなく、既に大人の域に入つたといふことを他に強く感知せしめようとの自家顯彰の考やら、同輩の喫煙者から酒も煙草も飲めぬ意氣地なしなど揶揄されたに對する負けじ魂やら、鼻より紫煙を吹かす人が如何にも意氣に見える虚榮心やら、自己の新なる味覺の發達を試みようとする好奇心やらが相交つて最初の喫煙をなさしめる。喫して見れば案外眩暈を感じたり嘔吐を起したりなどして苦痛を覺えるが續いて二度も三度も試みる間に何時か統覺中樞を麻痺して遂には習ひ性となるが、普通の人の取る徑路であるらしい。味覺、食慾に於て青年期の女子は妊娠期の

惡咀状態に似たるものがある。

要するに味覺の教育は道徳的生活と密接な關係があり、而して青年期は將來の食物に對する嗜好の分岐點であるから、一方刺激性の飲食物を抑制し代ふるに淡泊にして滋養分の多きものを以てし、他方猥りに食物を好惡して一種の不良の習慣に陥らしめぬやう充分警戒と注意とを要する。

四 青年の皮膚覺

皮膚は種々の感官中最も面積が廣大で感官の母たる稱がある。身體の保護器官たると同時に、或接觸物を直に感じて之を精神の器官たる腦髓に告げてくれる心の門戸である。吾人の有するあらゆる感官は皮膚の進化した特殊化した結果とも考察せられる。普通眼、耳、鼻、口、皮膚を稱して五官といふが皮膚は單に一の感覺ではなく、溫冷點から溫度を感じ、壓點から壓を感じ、痛點からは痛みを感じず。これ他の眼、耳等と異なる所である。毛端觸覺計、溫點検査器を用ふれば、皮膚に分布せる壓點、痛點、冷點、溫點等を明かに

検出すると出来る。果して然らば斯かる廣大にして淡然たる皮膚の中には幾つの感官を有して居るかといふに、研究未しく明確でない。將來此の分野に向つて着々研究の歩が進んだならば、或は其の結果九官十官を有することになるやも計り難い。實に、感官中の、ス、フ、キ、ン、ク、ス、と言ふべきは、皮膚であるから、心的現象の起源の問題に特殊の興味を感じずる人々には、皮膚覺ばかり趣味多く好望なる部門はなからう。壓覺の識別は兒童期よりも青年期と年齢の進むにつれて減少するが如くである。これ全く成長するに隨ひて皮膚の面積は増加すれど、壓を感じる壓點の數は老幼同數で不變なるがためであらうと言はれて居る。

痛點も亦年齢も共に減少する傾がある。實驗の結果、之を部分について言へば右顳顬部よりも左顳顬部性について言へば、女子よりも男子、知力について言へば劣等生よりも優等生は痛覺が鋭敏である。犯罪者や不良少年や醜業婦などには此の痛覺の極めて鈍いものが多いといふことである。溫度感覺は青年期の中頃から感受性が増大したために病症を起し又は身

體を軟弱ならしめる原因をなすことがある。妙齡の婦人が握手によりて咄嗟の間に一種の好惡を感じるも、皮膚覺の全部の共働作用にあるものであるらしい。

青年期に於ては、皮膚に一種の變化が起り、其の結果、在來、全く閉視して居た皮膚に青年の注意が集中してくるといふ事は頗る面白い現象と言はねばならぬ。蓋し青年期には身體の諸腺が急激に活動を始めるがため、汗又は脂肪等の排出盛んとなり、皮膚に一種の變化を起して麗はしさを加へて來るが、一方此等排泄物は分泌閉鎖せられてニキビなどといふ青年期に特種の皮膚病を起すのである。

此の他隠れたる局部に新らしい毛の發生するも亦青年期であつて、從來は、とかく外界にのみ目を向けてゐた青年は茲に始めて我が皮膚なるものに注意を集中し、茲に在來とは一種異なる我を發見するのである。かくて新發見の自己が餘りの珍らしさに敢へて苦痛を忍びつゝ、或はニキビを弄ひ、或は毛を撈り、或は堪へ難き苦痛を忍んで逆爪瘡痕の類を除去し、或は

皮膚に注意の集注

また故意に針で皮膚を刺し、或は自己の頭眉毛鼻等より毛髪を抜き去り、或は掌に蠟を垂らして快感を覺えるものがある。この原因について説をなすものは、盲目者が眼に一種の飢渴を感ずる如く、特殊の皮膚の感覺を要求するためであらうかといひ、或は皮膚が幾分無感覺となり、刺激の相當量を要求するがためであらうといひ、或は又戀人同志が握手擦撫等によつて感ずる風な一種の軟滑な感覺をえやうとの欲望の然らしむるものであらうといつて居るが定かではない。

當期は又一方に於て生殖器が發育して性慾の感覺新に勃興し、その勢強烈にして動もすれば全注意力が肉慾に集らんとするの時代であるが、上述せる如く皮膚に新現象新變化が現はれ、此の方面に注意を分割して、以て知らず識らず他を牽制し、甚しきに至らしめざる事は造化自然の妙用と言はなければならぬ。

五 青年の嗅覺

嗅覺も皮膚と同様多質多様で漠然たる感覺であるから、未だ完全に分類することが出来ぬ。焦る香、よき香などと名づけて如何にも分つやうに思つて居れど、此等は決して科學的の稱呼ではなく、單に嗅ひを起した現象、事物の名又は嗅覺に伴ふ感情を假用した迄のものである。以て極めて曖昧なる感覺であることが知られる。

嗅覺の任務とする所は第一食物を攝取せんとするに先ち、その食物が果して自己の嗜好に適して居るか否かを識別するにあり、第二はこれにより遠方なる雌雄又は敵の存在を感知するにある。

人類の嗅覺が何故に退化したかといふに、手足發達し直立歩行しうるにつれ頭部か地上を離れる數尺の高きにあるやうになつては、最早この働きを要すること殆んど稀になつたからである。故に鼻先の地上における四足動物は嗅覺の著しく發達せるものがある。又或種の昆蟲類には雌雄を遠方に見出すこと犬に數十倍するものがあるといふ。

青年期にありては上述せるが如く、諸腺が發達して腋汁、脂肪等が絶えず

分泌するので、同時に嗅覺の比較的鋭敏に働く時代である。殊に女子に於ては左様である。中にも花卉芳香は著しく注意する所となり、妙齡の女子は非常の誘惑を感じ、時には一種の罪惡を犯したと思ふ程、特殊の快情を誘發するものがあるといふ。少女は又毛髮呼吸、石鹼衣服などの香について、特別な興味を有し、これが原因となつて色々の好惡を生ずることがある。體臭、即ち人の身體の臭や呼吸の香は、此期に於て特に顯著なるものがあり、各人特有の臭氣を所有するやうになる。これ新陳代謝機能が旺盛で發汗の多いに起因するは上述せる如くである。かくて意識的無識的に他人に對する好惡を決定する有力の一要素を構成するやうになる。夫のジュリア、ブレイスといふ盲人が盲人養育院で洗濯された人々の着衣を一々誤らず、嗅ぎ分けて人々を驚倒せしめたのは此の時期である。又ヒステリー患者が臭氣を以て物又は人を辨別すること、猶常人の容貌姿態におけるが如き、或は惡臭が此種患者をして痙攣を惹き起さしめるばかりの強烈な力を有するが如きも亦此時期である。性についていへば、女子は男子よりも

一般に嗅覺が鋭敏である。又不良少年各種の犯罪者醜業婦などの中には普通人に比して著しく遲鈍なるものが多いのも事實である。

嗅覺と人生

嗅覺は人生と多大の關係を有して居る。先づ食物の味不味の如きは多く嗅覺に起因する。試みに鼻を閉じて食したならば殆んど何物も同一味の如き感がするであらう。又生殖器の感覺にも大なる關係がある。即ち當期に於て生殖器の發達著しき青年男女は或種の嗅をかぐときはそれに伴つて性慾が起つて來る。男女の若者が香水其の他種々の香料を使用し、塗布するは無意識の間に異性の注意を惹起せんとするがために外ならぬ。其他春機發動期に於て婦人の嗅覺の發達著しき事、青年男女がよく鼻腔より出血すること、月經時鼻腔内に充血を生じ鼻の呼吸を妨げ頭痛を起すこと、月經中止の際鼻の痙攣状態を生ずること等は何れも嗅覺と性慾との關係の密接なるを示すものである。次に心理的の傾向から食慾に一種の制御を加ふるも此時期に見はるゝ一傾向である。例へば衛生的といふ考から愉快に食し、自分にとりては不味なものも風俗習慣とあれば唯々之に

従ひ食するが如き類である。

六 青年の聽覺

變聲期

青年期には喉頭の骨格は前方に突き出で喉口は急に擴大し男子にては殆んど二倍女子にては五と七との割合となり、聲帯の甲状軟骨に結合してゐる結喉は急に隆起し、喉頭に少しく充血を起して來る。これがため聲は嗅れ、甲の聲は變じて乙の聲になる。この聲變りは普通三四日間であるが時には數週に亘り、長きは一二年間も續く。變聲後は男女とも聲音は強く音量は豊富になり、調子は甚だ低くなる。しかし女子は男子程兆候著しからず、或女子の如きは變聲の際何等のかがりがないものがある。

パウエルゼン氏が一千八百九十五年に、六歳から十五歳迄の學校生徒男女合計四千九百四十四人について調査したる所によれば、變聲は十三歳乃至十五歳の間に始り、十三歳の兒童の五十パーセントは既に變聲的徴候を示し、十四歳のものは七十パーセント、十五歳のものは八十パーセントである。

人聲の最低音は一秒約三百秒で、最高音は約一千百振動である。聲域即ち一個人の發聲しうる最高最低音の限界は六歳の兒童にありては、(一)から(ト)に至る四音程である。それから十歳頃迄は聲域は高い方に擴張され、毎年約一音を増して行く。十歳以後になれば、低い方にも發達を起し、十三四歳に至れば、聲域は二オクターヴ以上となる。尤も同一年齡間でも幾分の個人的差があり、且つ男子は最高最低兩者とも女子には及ばぬが常である。何れにせよ聲域は青年期に入るに従つて漸次擴大せられ、嘗ては發することの出來なかつたより以上以下の高低様々の音が發達を見る時代である。聲域發達して音聲に注意を拂ふ様になれば、單に人爲の聲樂器樂に止まらず、從來は意に介せなかつた自然の音響も深くその琴線にひびき、草木の囁やき、嵐の響動物の鳴聲或は潺湲たる小川の水聲にも耳を聳てるやうになり、其處に一種の興趣が湧き、音樂趣味が起つて来る。人の一代、中音の美醜品の上下はあれど、必ず青年期に於て、非常な勢で、音樂に、浮身を、やつし無暗に試用したくて、たまらぬ時代があるものである。所謂、喉自慢なる

もので、他所の見る目も可笑しいばかりである。或は犬の鳴聲或は猫の鳴聲或は鶏の泣聲を巧に真似し、或は義太夫にかぶれ琵琶歌に凝り、或は軍談講談に耽り、或は放歌高吟し、或は低唱微吟し、音樂は其の生活中に沁み渡れるが如き觀がある。思ふに、これ等は何れも青年期に於て、如何に彼等の情緒生活が其強度を加へ、一層廣大に、一層複雑に、一層精微に、且つ一層深刻になりゆきつゝあるかを語るものと見るべきである。

斯く音聲に注意を向けると共に、次では聲によつて好惡の情を起すことが頗る強烈となつて来る。元來生物界にありては、聲音と性慾とは非常に密接なる關係がある。昆蟲類の雄性が成熟期に於て種々の音聲を發する、蛙の雄が春期閑々たる鳴聲を發する、鳥の聲音を以て雌を誘引する、大抵戀愛の叫聲でないものはない。其他發情期及老年に伴ふ音聲の變化、去勢又は生殖力の障礙のために、聲音の變化などの事實を思ひ合すれば、聲音が雄雌間の誘惑として生じ來たといふ説のあるのも故なきではない。此等は論外とするも、音色の如何が性慾の情を惹起し、若しくは抑止する力を有す

るは確かである。殊に女子にありては音聲のみを聞いてまだ見ぬ戀にあこがれたり、美聲の持主器樂の巧者に心を奪はれたために可惜人生を誤つたりする事例が少なからぬ。とにかく動物界といはず、人間界といはず、音樂が戀愛に對し、偉大の力を藏し、魅力を發揮するは争ふべからざる事實と言はねばならぬ。

西洋の古い格言に、散文の親は詩で、詩の親は音樂で、音樂の親は律動で、律動の親は神であると言へるが如く、律動的運動と音樂とは密接不離の關係にある。若し此の律動的運動を巧に利用すれば、最少の價を拂つて最大の歡樂を得ることが出来る。大勢集つて重い物を引揚げたり、引摺つたりする際、仕事歌を歌ひ、手拍子面白く取れば、作業を容易にし、又社交的にする事にも知られる。青年期は律動的運動の春であるから、拍子を取つて進行したり、歌つたり、詩を讀んだりするだけでも注意力強くなり、言句の意義を深く感じ、又音律の美を強く感ずるのである。此の意味に於て藝術と遊戯と作業とは生物學上根抵の深い律動運動から起つたものであらうと言はれ

るのは尤もな次第である。

シアリス及びランカスターの調査によれば、音樂を最も好むは十五歳で以後二箇年間は萬事を棄ててこれに熱中するが、十七歳になれば、特殊の天稟を有する青年の外は著しく熱を失つて来る。従つて眞の音樂教育は十二三歳頃から十七歳迄の間に行ふが至當である。斯くて幼時から此の時期に至る迄は音の基本能力たる高低強弱、音色の識別の如き聽覺的の練習と發聲の練習に全力を傾注するが合理的の教育法と言はれて居る。歌唱は下劣な慾情を斥け憂慮・悲痛や疲勞やを醫やし、生理的には呼吸を助け肺臟を強くし消化を良好ならしむるに特效あるばかりではなく、進んで敬虔の情愛國の情並に人種的家庭的情及自然に對する愛情を涵養するが上に偉大の力を持つてゐるから、青年指導者は音樂を以て徒らに淫蕩柔懦な風を助長するもの位に考へ、狹量嫉視禁抑的な態度を取ることなく、寧ろ洗鍊したる歌詞・歌曲を與へ、諷詠の間、雅馴芳醇な感情を養成するやう大に音樂の偉大なる教育力を發揮し利用するに力めねばならぬ。

要結 青年期は新しい感覺の窓を通じて未だ嘗て經驗しなかつた廣い範圍の世界が豁然として眼前に展開される時代であるから餘りの物珍らしさに此の新なる世界により多く接觸して新なる武器を試用しかくて感覺上の快樂を味はうとするは自然の事である。これがたゞ鮮麗の色、芳烈の香刺戟性の味、複雑微妙の音を喜び、感覺の質に於ても量に於ても成るべく之を豊富にし、成るべく之を充實して快樂をより多くせん事に熱中し、動もすれば享樂主義、自然主義に墮し、易い傾向を有する。一言すれば官能萬能の時代を現出するのであるから善惡兩方面の意味に於て教育上最も警戒すべき重要期に立つものと言はねばならぬ。

第八章 青年期に於ける情緒の變化

一 青年期の中心事實

古風の教育者乃至短見者流動もすれば青年期に於ける心理的發達は全く知性の發達に外ならぬとの謬想を懐くに至る事がある。成る程知的の能力や傾向やは此の期に於て異常の變化を受けるは疑ひもなき事實であるが、併し此等の變化は情緒の變化に隨伴し附從する現象であることを記憶せなければならぬ。要言すれば青年期に於ける中心事實は情緒的變化にある。

抑も情緒には二回の高潮時があると思ふ。最初は四五歳の頃で、次は青年期中にある。青年期を過ぐれば男子にありても女子にありても情緒は普通減退する。尤も女子は母といふ特殊の地位から時に情緒の爆發を見る事がないでもない。概言すれば青年の情緒は成人よりは一層猛烈であ

り而して又一層動搖し變化するを特色とする。涙は笑と接近し、喜は悲みと隣り合へる姿である。理性の力の増加するにつれて情緒は年と共に減退するやうに思はれる。故に同一人につき冷靜な判断力と情緒生活の豊富とを二つながら求むるは頗る無理な注文と言はねばならぬ。文明生活なるものは漸次人の情緒を磨り減らす傾向を有して居る。

青年期に於ける情緒生活の爆發は、性慾の發達と密接なる關係を有し、其の範圍は廣汎に亘り、不可思議な程不安定の状態にある。利己は利他と變り、保守は偶像破壊と變り、自尊は謙遜と變つて來る。斯かる情緒の不安定の状態にして、夫の激しい身體上の變化と相伴はんか、時として、道德的危險の源泉たる虞がある。そうかと思へば、又青年期の特徴の、一に數へられる所の理想に對する憧憬の泉も、又此處から湧き出づるものである。以て當期情緒の不安定にして、如何に變化に富めるかを察知することが出来るであらう。

二 少青年情緒生活の比較

情緒の變化の状態の如何なるものであるかを明らかにせんとするには、先づ青年期の急激なる發達に先だてる少年期を回想するがよい。九歳から十二歳頃の兒童は甚しく安定ステーションナリの時期にあるものと言ふことが出来る。蓋し此の頃の兒童の身體的發達は頗る徐々たるものあり、身體の器官は相調和して外界に順應する機能を全うし、情緒にも動かされず、想像にも馳せず、著しく自動的自主的の態度が見える。故に本書の概論中にも記述したが如く、スタンレー・ホール氏は、斯様な現象は思ふに人類の遠き祖先の特徴として見るべき早熟の現像を個人に反映したるものである事、それに近似せる事實は現存する野蠻人間に認められる事を述べて居る。野蠻と文明との間に存する一般的の差違を個人の發達の場合に充當して見れば、まさしく少年期から青年期への變化を想起せしめるのである。何ぞや即ち情緒における差違これである。

併し、茲に注意すべきは、児童でも、野蠻人でも、又青年や文明人やと同様な情緒の基調を有せぬ事はないといふ事實である。唯此等情緒の間に、ける兩者の差違點は何れにあるかと言へば、畢竟するに情緒的要素の異なる組織と新なる方向とを取るといふ中に存するを知らねばならぬ。

児童は概言すれば利己的であり、自我中心的存在であると言ひうるが如く、青年の特質を最も一般的に且つ眞に近く叙述しようとするれば、差當り感情生活が児童の如く自己といふ内方に向はずして、外方に向ふ傾向あるとを指摘せねばならぬ。之は情操の異なる種類の發達や情緒的注意の異なる組織によりて伴はれて發生する現象である。従つて價値の新しい系統を生じやがて種々の新なる興味を形成するに至るのである。児童の感情なるものは自己に關係ある事物の直接的環境の上に向けられるものであるが、青年期の情操は、直接たると間接たるとは、た遠きと近きとを論ぜず、自己が順應を必要とする種々の事物の上に向けられるを兩者の著しい差違とする。さればとて上述せる所から、青年には自己感情が缺如せるものである。

ると早計に理解してはならぬ。唯児童のやうにしかく鋭敏に意識に上つて居らぬといふ迄の事で、寧ろ異なる種類の自己感情であるといふを當れりとするであらう。

以上は、少年期と青年期とに於ける感情生活の差違といふ大體論であるが更に、一步立ち入りて、細論すれば、何はさておき、あらゆるもの、初をなすは、青年は過去の事柄に對して、不満足の情を表示するといふことである。以前に喜べる遊戯や興味や事物や玩具やは今は子供らしいとか、子供向きとかの言葉の下に斥け去られる。尤も同様な心的状態は夫の少年が自己の前生に對する態度中にも認められぬではない。斯くて彼れは子供として待たるゝは頗る堪へ難しとする所で、兄さんと呼ばれ更に進んでは公然と煙草を吸つたり、自由に人と約束を交したりする風な大人扱を期圖する斯くて目立たぬ間に新らしい英雄、新らしい理想が忍び込んで來る。嘗ては飛行家や軍人やを唯一の面白き立派な仕事として想望して居たものが、醫師に志望換をしたり、嘗ては大膽なる海賊的の行爲を憧憬して居たもの

が、有徳の大人たらんと心掛けたりするやうになる。醫師といひ大人といひ前期にありては、如何にも見すばらしく、又つまらなく歯牙にもかけず、雲烟過雁視した所であつた。斯様に以前の興味や理想やに對して、彼等の感情生活の變化し推移する中に、吾人は將來の進歩の基礎たるべき現状打破乃至不満足の心的状態を遺憾なく看取することが出来る。

同様なる精神作用の積極的の方向は、新なる好奇心の覺醒を見ることである。今や青年は外界に多大の興味を投じ、他の人種他の大陸の事物について見聞しようとする。自分の日常見たり取扱つたりする事物は一切之を後にまわし、自己の計畫などには最早興味を捧げないから手を下さうとしない。彼れには寧ろ他人の希望恐怖發明發見悲哀等の生活状態について興り知らうとの好奇心が勃然として湧き出づる。斯くて彼れは自己の手の及ぶ範圍内にあるあらゆる書物を讀破しようとして熱中する。若し恰好な書物の手に入らない場合は、乾燥無味なる浩瀚の書冊をも尙且つ忍んで讀み耽らうとする。此種の好奇心は屢々男子四方の志となつて家出

をした上海外へ飛出したりするやうになる。一般的に言へば社會的支配のうるさい羈絆を離脱して自ら快とする世界に乾坤一擲の壯舉を試みようとするのである。

是によりてこれを見れば、兒童と青年との間における主要なる差違はこれを新なる情操の向けられる事物其の物の性質中に求むべきであるといはねばならぬ。新なる情操とは何であるか。理想であるともいへれば、又理想と密接なる關係を有する事物であるとも言へる。とにかく、感情生活における這般の深遠なる變化は想像の發現に新らしい刺衝を與へること、は、誰しも豫期する所である。これ想像なるものは、感情生活に對し、主要なる役目を行ふ心的作用であるが故である。夫の幼年期の早い時代に起つたものは今や青年期に又繰り返して見はれて來る。想像の世界はいつも活潑に青年の眼前に展開し、天馬行空的の空想は青年をして實際生活の事物をば何でも氣の抜けたるものと見做し、尋常の茶飯事とするに至らしめる。吾人は概説中に人生を解するに彈道の如き者であるといふ譬喩を

用ひたのであるが、これは進歩を意味するが如き事柄を言ひ顯はすには餘りに相應はしからぬやうである。蓋し進歩といふ事は他なく、夫の彈道におけるが如く、後部より推進せしむる力に依らずして、將來を包容せる所の作用によりて前から引きつられる謂である。

斯かる意味に於て種族の進歩といふ類の事も、畢竟理想郷とか乃至天國とかいへる境地に到達しうべきものと認めて居る理想的の條件に附與したる名稱であると考へるのである。然るに理想郷の語は單に實行すべからざる架空的の事物を見はす者とのみ考へられるのはたしかに僻論と言はねばならぬ。實に胸裡に畫いて居る理想郷なるものは人類を進歩せしむる眞の武器である。以て一國民又は一時代の思想と希望とを歸一するばかりでなく、より更に主要なるは普通人類の活動の旗印を供給するのである。よりよき境地を熱望する事は國民的存在に意義を與ふるもので、其の希望する事が或は幻想であるか否かはさして問題とするには當らぬ事である。斯の如くにして其れに關する國民の行動となり、其の行跡は

歴史上に痕跡を印する。若し理想郷にして其の細部分に至る迄悉く實現せられるとすれば、恐らく働き甲斐もない事であらう。

稱族に對して上述せる所が眞なるが如く、又個人の生活についても同様に眞理である。而して青年期の意義を考ふるに、其の主たる使命は理想を形成し、理想を企畫するといふ事實の中に認むべきものである。青年期に次げる人生期即ち壯年期にありては、青年期の設計に従ひて、建築物を構成せんとする努力をなすに外ならぬ。たしかに幻想は漸次壯年期に至れば、影を失ひ、恐らくはやがて消滅を見る事であらう。さなき迄にも其の色彩は朦朧となり、其の輪廓はますます不定を加ふるであらう。斯る状態をば普通實際の經驗によりて收得したる實智と稱するのであるが、此の實智こそ或意味に於て個人及社會生活における最大の敵たる場合があると言はねばならぬ。

青年の感情が外方への方向を取るといふ如上の立論を確かむべき單簡にして且つ比較的早く見はれる様式は、彼れの直接の環境の範圍外に存す

る世界に新なる興味を捧ぐるといふ事である。厭ふべき制限を加へる學校や竹馬時代よりの朋友や煩雜なる生活上の習慣やは青年に取りてはもはや何れも生氣の躍動せるものとは考へられぬ。兩親の權威でさへも殆んど堪へ難きものとせられ夫の幼兒期中ボンヤリながら夢みて居た世界の如何なるものであるかを知らうとする熱望は今や迫れる要求となりて蘇つて來る。

想像の復活と人類の過去に對する興味とは青年を驅つて歴史的の記録に結合せる史蹟記念物を見ようとする憧憬の情を喚起する。後年の生活に於て旅行などして圖らずも夢裡にあこがれの此等史蹟を探るの機に遭遇せんか往年夢想したるとは全く天地霄壤の差で其の意義は消え其の價値は減じ如何にも微に如何にも拙らなさ加減殆んど失望を禁ぜざらしめる場合もあるのである。此等によつて考ふるも學校教育にありては其の主要行事の一として事物に對する憧憬の念あつき青年期に修學旅行を豫定するは極めて有意義の舉と言はねばならぬ。旅行なるものは書物上の

知識や人渡りの經驗やと異り、一層青年の傾向と必要とに共鳴を感じしめるものである。加ふるに次ぎに來る讀書と經驗とに對する意味と興味とを與ふるに必要な眞の經驗の基礎を供給し極めて有利なるものがある。絶えず青年期に見はれて來る問題は將來如何なる事をなすべきかといふ事柄である。簡単な様ではあるが此の問題の解決は種々の條件があつて制限を加へて居る。即ち人によりては或社會の階級内に職業選擇の範圍を求めねばならぬが如き或は持合せの經歷の如何といふが如き或は世襲財産の多少といふが如き皆計算の中に這入つて來るからである。一方に於て此等の制約もあり他方に於て青年自身の樂觀的傾向もありかたがた此の職業選擇問題をさして複雑多様ならしめずには濟むやうである。斯くして何れにか決定せねばならぬ時期の到來を見るのであるが此の決定に際し通じて青年を推進する重大なる力は何ぞやと言はば所謂功名心として知られて居るものに外ならぬ。さて此の功名心なる語によつて蔽はれて居る幾多の經驗を捉へて檢索して見るに一方に於ては兒童期に於

ける準備的の経験と關係を有し、他方にありては英雄崇拜の種々の形と關係を有して居るが如くに見える。

前者即ち兒童期に於ける準備的の経験につきて見るに、兒童の職業に對する興味は主として社會上に於ける見え透いたる晴々しく花やかなる行動の上に存することが分る。即ち飛行機を巧に操縦したり、大仕掛の道具を使用したり、派手な活動をする風な種々の人々を喜ぶが常である。従つて兒童期に於ては社會的要素の如きは決して優越なる地位を占めては居らぬ。尤も故らに兒童の自發的の興味を催進する風な教育を施すとか、或は又人類の發達史中に見える風な發生的意義の職業に副へるいろ／＼の活動中に兒童を差向けて之を了得せしむるとかいふが如き場合は格別で、かかる際はたしかに社會的要素も含まれぬではない。如上の兒童期の準備的の経験はそれに對する永久的の興味、寄與と單なる半意識的の貢獻とによりて、とにかく青年期に於て行はるべき組織的企畫的の活動の材料を構成するのである。

少年後期や青年初期に於ける英雄崇拜といふもう一つの重要な要素は、主として彼等の劇的行爲に對する尊敬といふ事である。此の傾向の層大仕掛に見はるゝは大なる歴史的人物に對する劇的の尊敬の中にある。那翁や豊公やの生涯が如何に青年の高さ度合の想像力を唆るに有力なるかは言ふを待たぬ所であらう。

併し青年後期になれば、花々しき事業の成功などといふが如き事が彼等を動かす力は漸次減少し寧ろ彼等の情操は一層抽象的なる人類の性格といふが如きものの上に向けられる傾向が益々強くなつて來る。とはいへ、此の人類の性格なるものは單に抽象的のものとしてのみ考へられて居るとは限らず、寧ろ偉大なる模範的人物の人格を通して彼等に映じて來るを常とする。此の如くして青年に取りては此の世界は一大劇場に外ならず、此の上で各種の方面の役者が見はれ、青年を中心として活動し、舞臺向でなされる仕事の殆ど全部は青年者の支配力、活動力の如何を示すものに外ならぬと考へるのである。

青年期の一特色として受容の能力が發表の能力よりも優れて居るといふ事のあるは人の熟知する所である。さればとてこれは、或種類の發表が缺如して居るといふ意味ではない。寧ろ發表の様式が無器用であり巧緻といふよりは粗大であるといふことを語る。多くの研究家の示す所によれば、繪畫描寫上の興味は數年間中止の姿となつて再び復活するといふ事である。藝術的の衝動は恐らく青年期に至ると純な時期は他にあるまい。青年は外面的の動機に對し、又は單なる器械的の藝術的表出に對しては、尊敬を拂ふの念少なく、唯感情生活の強度を催進するに資する風な理想的境地の描寫記録をなさうとの欲望切なるものがある。青年期の障礙、無礙の作品はあらゆる藝術の本質、即ち意義と精神とを含んで居る。但し儀容舉動といふ風な外部の方面に至つては甚だ生硬粗雑であるを免れぬ。不幸にして藝術的方面に於ける教師は青年心理に於ける此の種の傾向を無視し、美術の形式的方面に力を致さんとするは誤れる處置と言はねばならぬ。此種の誤れる取扱の結果は普通熟練なる技術家を産出するに汲々として

創作的の衝動を阻害すること甚大である。尙批評的傾向を早く發達せしめる事は此の創作力を減退せしめる他の一面である。これは特に詩歌文學の部面に見はるゝ事で、詩歌の世界にありては繪畫の世界に於けるよりも、藝術の熟練は教育の結果に待つ事が少ないのである。

凡ての青年は本來の詩人ともいふべく、何時でも美文韻文をものして自己を表現しようとして試みるのであるが、中には傑作雄篇も少からぬのである。然るに大人はとかく好嘲的態度を以て之を迎へる。夫の中學校や専門學校の青年等がよく死語で中古文めきたる文章を作るは面白き現象と言はねばならぬが、これ又一笑に附し去らるゝが常であるから、彼等は故らに之を陰蔽したり破棄したりするので、高度の發展性を有する創作衝動は茲に挫折の形となる。されど詩作に對する興味はなほ存續する。さはれ此の興味たるや兒童期のその如く子守歌のやうなものでもなく、又青年期の直ぐ前なる少年期のその如く小品文や對句を駢べるといふ風なものでもなく、今は主として抒情詩の上に興味を集注する。

青年期の感情生活におけるもう一つの特徴は、自然が新に、主要なる意味を呈し來るといふことである。種族的發達並に個人的發達に於ても等しく注意を惹いて居るやうな情緒の微妙なる變化の如きは精密には未だ心理學的に説明を下す迄に進歩しては居らぬ。しかし此の變化をば心象の投影から情緒の投影への變化として記述することが最も適切であらうと思ふ。別言すれば先に客觀視せるものが主觀視せられるやうになるといふ意である。自然界は今や何とはなしにボンヤリながら不可思議にして驚歎に價するものになつて來る。嘗つて單に飛び込んで遊泳したり魚類の棲息する所とのみ思つたりした海洋は今や精神的の暗示に充ち満ちたものとなつて來る。即ち無限にして永久なる事を物語つて居る如くである。其他森も星も花も月も又斯様な意義に解せられるのである。

スタンレーホール氏は如上心象の投影から情緒への投影といへる青年期の自然に對する態度を精細に調査し巧に叙述して居る。曰く青年期に至れば自然に對する感情は甚だ深刻となつて到底幼時の如き比ではない。

若き處女の中には熱情的に星を愛し星と默契を感じるものもある。日の出と日没とは天界の變化中殊に注意を惹くこと強く、日の出は公明壯大若しくは向上的歡喜の熱情を起し、日没は未來の世界を暗示する。暮色蒼然として迫り來れば内部の精神は一層明瞭の度を加へて潜思默想を誘致し、人生又は絶對に對する感想は無限に沸き出づるのである。

次に雲界の光景程人の感情生活を具體的に表現する者はなく、其の變化の速かにして且多様なるを眺めては何人も我れを忘れて恍惚たる状態に至る。兒童も雲の光景を嘆美し又は恐怖すれど、青年は雲の美はしい形状より現世には窺ひ知るべからざる高潔なる或ものの存在を暗示せられ、これを敬慕して精神の向上に一步を進むることもある。海洋及波濤も内界の心的状態を最も具體的に表現せるさま、雲と相似たるものがある。蓋し平安靜寂深遠廣遠激怒狂亂等を一體に表現するは水の特性たるが故である。

花卉は可憐優美純潔謙遜溫良等の情操を最も美的に表現するものとして青年子女の心情を動かすこと極めて大である。兒童は生きたるもの心

あるものとする有情化の特性に基き花を愛撫すれど青年は花の姿色、閉萎に複雑なる象徴を鋭く感得する。斯くて百合の姿に優しき美の神を忍び、白色の梅花にえも言へぬ純潔を、赤色の牡丹に圓滿高貴なる生活又は濃厚なる愛情を感ずる。花の蕾の綻びそめしと見る間に満開燦爛の美を現はせど、遂に落花地に委して後を留めぬ様は人生の縮圖を美的に表現し青年をして轉た人生に對する深き思索と同情とに誘ふを禁ぜざらしめる。一葉一莖語らずといへども神秘的愛情その中に燃えるの想あらしめるは花であるから、青年期の子女が花を愛し花をかざし花中に顔を埋めて恍惚我れを忘れるのは如何にも共感の強く且つ深きを察するに足りる。殊に妙齡期の處女か花に對する感情の熾烈なるは豫想の外にある。

兒童期の初期に於ては、アンスロポロジック 神人同形説として知られて居る風な傾向が主となり自然に對する物體は超人間スーパーストイックの支配せる或物を藏するといふ風に考へられる。之は明らかに種族の發達における神話的の段階に相應するもので、此の段階に於ては、夫の多くの藝術や宗教やが根を下して居る所の神話

と傳説との本體が起つて居る。自然に對する青年期の感情は神秘的乃至形而上的の要素を含まずして寧ろ感情的態度であると言はねばならぬ。自然の風景などに感情を投影するといふ事は畫家や詩人やの完全なる企畫と去る事遠き考ではあるが、かゝる表示は此等の藝術が將來自然の感情の新領土に到着するがためには缺如してならぬ一要素である。

三 青年期の煩悶

尙青年期の一般的特質につき注意を要する事がある。思ふに新なる情操の形成せらるるのは一朝一夕の故ではない。實は相次いで起り來る成長の狀態を詳らかにするは至難とする所であり、従つて古い狀態より新らしい狀態への變化推移、更に適切に言へば、最も貴い愛他的態度と最も卑しむべき利己的態度との變化推移には、極めて長い年月を要するは敢へて驚くに足らぬことである。

夫の生活上のより高い立場に地歩を占めんとする、不斷の努力は、本期に多

い、精神上の煩悶の條件を造ることになる。實に青年期は物事の中途に於ける停止點に立つといふやうな微温的態度は全く興り知らざる所である。従つて後年の生活に於ては容易に認められる適當なる調和點乃至妥協點も彼等に取りては發見することが不可能で、乾坤一擲の行爲に出づる。青年はあり餘る強さの感情を包藏しては居るが、尙未だ之を發散すべき適當の溝渠が開かれて居ない。それに拘はらず、青年は此の感情生活をば高度に充さうとする各機會を捉むことを逸しない。之を宗教的戀愛的乃至藝術的の様式に訴へて慰藉をえんとするは、彼等に取りて普通見る所の状態である。

以上の結果此の時代は興奮と銷沈状態とが絶えず交互に見はれて來る。光輝に充てる樂觀主義は、黑暗々たる悲觀主義に早代りする。所謂暴風雨と低氣壓の時代の稱あるに背かないのである。しかも銷沈期になれば、日るも痛はしき様に打萎れて數日時には數週に亘つて悶々の様を見はすのである。青年期の憂悶は恰も霧の如く全精神の山河を蔽ひこれぞといふ

對象物は自分自身にも知らざれど、たゞ漠然たる痛ましき思を懷きて此の傾向は益々強められて來る。カーメン女史の調査によれば、印度人、土耳其人、支那人、墨耳士人等の青年には此種の現象を見はす事が稀であるといふ事である。

最後に吾人は所謂愛情といふ感情状態の變化及發達に言及しようと思ふのであるが、こは特に章を更めて詳述することにする。

第九章 青年と戀愛

一 生物界における性的淘汰

爪とか齒とか又角とかいふ類の防禦の武器は動物の交尾期に於ける兇暴性の増加と相並んで隨伴的の發達を遂げるのである。而して此等の武器は何れも女性の愛を求めんとして決死的の争闘行爲をなすに使用せられる。争闘の結果は如何にといふに、最も強きもの、最も兇暴なるものが配偶を得る事となり、爲めに勝利者の特質が後々迄遺傳せられる事になる。動物中殊に鳥類の競争は修飾とか鳴聲とかいふ形に於て見はれるものであるから、翔り方とか姿態とかの能力の優れたものは羽毛の美と相待ちて優勝の地位を占めるものである。

ダーウキンは此等の事實より動物に於ける形體美の發達は性的淘汰セレクトイフ、セレクションに待つものが多いことを主張して居る。尤も此れには反對の意見を抱く生

物學者も少くない。曰く、性的淘汰の行はるゝと見ゆる事實は畢竟自然淘汰の事實によりて之を説明することが出来るのである。鳥類の立派なる羽毛は認識をされんとするために必要なものである。而して女性に關係する限りに於て、美なる色彩は雌鳥を興奮し刺激する力を有つて居る。其の證據にはあまり羽毛の美の引き立たぬ或る種の鳥類にありては、其の交尾期に當り美しき小石とか硝子の小片とかを啄みて雌を誘ふが如きことをなすを見受けるではないかといふ。

併し吾人は寧ろダーウキンの説を以て真に近いものと信ずる。此れは女性が男性よりも高度に發達したる美的判斷を有するといふ意味ではなく、寧ろ彼等の交尾期における一特質として人類ならば美意識とも見るべきものに相當するものを發露するといふのである。それから、選擇が女性によりて行はれるといふは事實で、女性の愛は男性間における競争の勝利者の上に注がれる。而して此の選擇の結果は外貌に於て又舉動に於て、兩性の分化を齎らしめる事になる。人類にありては如上選擇の様式は大

人類に於ける
選擇の様
式と標準

に鳥類とは趣を異にするものがあり、其の結果美は女性の所有物たるが如き観を呈するに至つた。又選擇における要求としての美といふ標準も、人類の發達に取つては輕視せられて居る。斯くて人類間の相違は美といふよりも寧ろ其の行爲の如何といふ標準により發達を立せられたいといふ事が如何にも尤らしく思はれるのである。

二 青年期戀愛發達の徑路

思ふに戀愛とは言迄もなく異性間における愛情で人世にとり最も大切なものである。これがために反面に存する残忍性粗暴性などが緩和せられ、美はしき人類の本質を發揮せしめ、爲に極めて大なる力を有つて居る。戀愛が男女の性慾に基いてゐるは疑もない事實である。少年期迄は單に自家保存の本能が強烈であつたものが、青年期に入るや生殖器官が茲に成熟し、始めて種族保存の本能が目醒め性慾が生起する。さはれ、世人の考ふるが如く、戀愛即ち肉慾ではない。成程一種の肉慾には相違なからうが、全

然之を同一物と見ることは出来ぬ。野上文學博士は、恰も食慾と料理の如き關係ではないかと言つて居られるが、たしかに穿ちえて妙であると思ふ。曰く料理は勿論食慾から起つて來た事ではあるが併し單に食物を取り込めばよいといふのではなく、そこに美的その他の種々の要素が入つて來て頗る複雑な一種の藝術に近いものにされて居る。肉慾と戀愛との關係も亦此くの如き趣きがあると思はれる。他動物と雖も肉慾以外に人類に於ける戀愛に類するものがある。高等の鳥類及哺乳類の中にはまさしく情愛が認められ、一夫一婦の制を守るのがある。要するに青年男女の相戀ふるは緊張の度を加へたる友情の一種とも見るべく、直に肉慾その物と輕斷するが如きは思はざるの甚しきものである。

青年期間における戀愛の發達の徑路を明らかにするに先ち、兒童期間には果して兩性の愛情なるものが存在するか否かを取調べる事は意義のある問題である。しかし此等の分野は現今の知識を以てしては甚だ不正確で信頼するに足るものがない。或研究家によれば兒童間に愛の存するは

普通の事實で、後年の戀愛關係を豫示するものである。恰も人形を愛するといふ事は母としての本能が子供に表示したるものと考へられると同一般であるといふのである。併し此等の場合左様な判断を下すよりは寧ろ模倣作用とか其の他の作用とかによりて説明するが妥當ではなからうか。疑を存する次第である。

青年期の前半期中に見はれる戀愛は青年期中の如何なる時期に於けるよりも、生物學上最も興味深いものである。これは動物間における交尾期にも相當する觀があり、性慾發動に伴ふ動作が殊に目を引く。即ち此の期間の男子は外面極めて無頓着を装つても、内面にありては最も熱烈に自己の外貌に注意を拂ひ初める。生來始めて彼れは故意に自己の毛髪や齒並や履物や相貌の上に留意し、服装、服色、模様、に關しても在來の如く無頓着なることなく、帶の色、結び方、帽子の冠方、髪刈方など、今や何れも重用なる事柄になつて來る。他の同輩と連れ立つて居るか又は青年女子の面前などにありては、彼れは自己の勇氣と力量とを示さうとする機會を求めらる。

かくて好んで長大なる仲間打つて掛り、熟練と敢爲の行爲に出づるやうな危険を爲さうとする。

意中の人の面前にでも居れば、彼れは甚だ無器用にして其の顔面は痲痺する事さへある。斯かる場合彼れは唯極めて曖昧なる暗示によるの外、自己を愛人に表示しようとは力めぬ。而して遠方よりほのかに彼女を認めて密かに會心の笑を漏して居る。女子に於ても又同じく、彼女は見掛上極めて無頓着の態度を取り、自己の注意を惹かうとして焦つて居る男兒には目もくれぬといふ風にして大に戒心を加へて居る。しかし同時に彼女は凡ての事を見、凡ての事を理解して居るのである。とにかく表現には早熟的と比較的晩成との二種はあるが、青年男女が急に服装に留意したり、或は極端に粗暴の風に流れたり、或は坐作進退に變化を來すような事が起らば、多くは性慾の發動に伴ふ感情の影響であると見て、差支へがない。

尙青年初期における他の一面には所謂年長者に對する戀として知られるものがある。年齢といふ尺度に沿うて青年の愛情に變化を來すは假令

一般的ではないにせよ、普通の傾向といつて宜い。此の年長者を戀ふるといふ事實中には、同一年輩の青年男女間に行はれる戀愛の動機に加ふるに情人に對する敬尊やら自己に對する同情的恩惠的の取扱と結べる或種神秘的力やらが伴つて居るやうである。故に青年に恩惠的の勢力と指導とを與ふる機會の多い地位に立つ婦人などの中には思ひもかけず戀愛關係の成立を見る事があるから、年長婦人等は餘りに青年の愛情に媚ぶるが如き處置に出づるは甚だ謹しむべきである。

青年の前期に次いで來る中頃の時期に於ては生殖器發育し、肉慾起ると共に羞恥心も高まつて來るから、兩性はとかく相互に離隔せんとする傾向が見えるのは通常事ではないが、有勝ちな事である。斯くて男子は男子同士、女子は女子同士といふ様に、各自獨立の一團を作り、男女接する機會を避け、相反せる生活を營むのである。是に於て兩世界は全く遠く隔てられて、其の間交渉なく互に理解がなく、恰も霞を隔て之を透して眺める體であるから、男性から見れば女性は一層妖艶優美に見え、又女性からいへば男性は

一層崇高剛壯に見え、所謂見ぬ戀にあこがれる時代である。爲めに性に關する秘密を探らうとして種々の疑問を懷き、此種の記事ある書籍雜誌には敏感となる。小説類の如きも多くは文學趣味を養はんがために讀破するではなく、人生の波瀾殊に異性の心理を知らんがために耽讀されるのである。奸商の徒はかゝる青年心理の弱點につけ入り、時に不正手段をとりて自利を圖らうとして居る。

尤も此期における一面の見はれとして青年の眼は廣く宇宙の大局の上に又は自己の將來の上に注がれ、其の道徳的宗教的の煩悶は最高潮に達しかくて彼等は異性について考ふる餘地が極めて少ない迄に立ち至るものもないでない。僧院に閉ぢ籠りて人生の問題を思索し思想を精練するなどには至極恰好の時機である。女性の中にも此期に於て人と離索し、尼的生活に入るを望むものがある。併し斯かる時期に斯かる方向に一生の方向を定むるが如きは、偶々後年の悔を招く所以ともなり、大に考へ物である。蓋し、此種の見はれは畢竟發達の過程に於ける一相に外ならぬがた

である。

青年期男女の心理研究

二二二

如上の第二期が終りて第三期に入れば、青年の戀愛は、又もや新に頭を
げ、來りて最後の交尾期ともいふべき特質を發揮する。生物學、心理學に於
ては、青年期の終成人期の始、即ち別言すれば、生殖器の完成を告げたる本時
期を以て結婚の好期とするのである。若し諸種の事情や年長者やの入知
慧などがなかつたならば、たしかに如上の言は實現せられて最も自然に近
いものたるを證することであらう。何れにせよ、三十代になつてからの結
婚の如きは、假令如何なる經濟上の利益がこれによつて得られるとしても
恐らくは之によりて償ふことの出來ぬ不利を含むものといふべきであら
う。

三 戀愛成立の事情

兩性間に於ける戀愛の成立の事情を研究するに、一般的包括的の性質に
よるものではなくて、容貌とか舉動とか性格とかの特種の點に關係して居

兩性に於け
る美の標準

るものであるといふことが知られる。

例へば、男子が女子を選擇する標準中最も重要視せられて居るのは、疑も
なく、美といふ要素である。女子が男子を選擇する標準に關しては、夫の普
通流布して居る說、即ち外貌は、他の諸性質よりも軽く視せられて居るとい
ふ事は、正當と見るべきである。最もこれは青年期に比すれば、その以後の
年齢に於ては一層剝切に充當するのである。

然ば次に美といふ標準に於ても、外貌の如何なる特質が最も他に抽んで
て重んぜられて居るかと言ふに、**大多數**の人は、目許、目附に魅殺せられるや
うである。蓋し眼は表情に於て如何なるものよりも優れ、相貌中最も個人
的色彩に富むの致す所であらう。目に次で人を動かすは白くて正しい
齒並であるらしい。如上の條件に缺くる所があれば、愛情の成立を破壊す
るには充分の力をもつて居る。毛髪の色、長さ、結び方等も戀愛を構成する
に相當の役目をもつて居る。處女が無暗に髮癖やら、生へ際やらを氣にし
て他の嫌惡を買ふまいと、浮身をやつすのは、そのためである。鼻の形や高

さやも亦これによつて人の外貌を二つの定型に區分する標準たる主要の條件である。

性慾倒錯症

しかしこれは、單に、目、齒、鼻、髮のみに、は、限らず、その、他、凡ての、外、貌の、局、處に、ついても、亦、同、様なる、關、係を、有する。故に、切、言、す、れば、如、何、なる、些、末、な、部、でも、な、ほ、人、の、戀、慕を、受、ける、焦、點と、な、ら、ぬ、は、な、い、の、で、あ、る。例へば、他、に、多、の、缺、點の、存、す、る、こ、と、も、看、過、し、て、單、に、美、聲の、持、主と、い、ふ、だ、けに、多、く、の、年、女、子、の、愛、を、得、る、艶、福、者、も、世、上、其、の、例、に、乏、し、と、せ、ぬ、で、は、な、い、か。凡て上述せる所により、戀愛には各人各様特殊的であり、個人的である。其傾向の有するを常とするは諒得せられた事であらう。其も尋常の限度を超えれば、異性に對する異狀行爲即ち性慾倒錯症として知られる状態に移つて行く。中につきフェチシズムといふのは、異性に對する憧憬の極身體の一部たる頭髮を嗅ぎ手足衣服等に觸れ、又は婦女子の所持品たる鬪管指輪手巾紙片襟卷等を自分のものとするを樂しみ、其處に得も言へぬ快美を覺え更に進んでは頭髮を切り取りて負傷せしめ、見知らぬ美しき女の

戀愛構成に關する在來の謬見

此言
心身4倍

美しき衣服を汚し後より袖を引き横より髮を弄し、又は物品を奪ひ取り盜み取るに至るものがある。マゾヒズムといふは他性から苦痛又は不快の行爲を受ける際に快感美を生ずるの謂である。次にサディズムとは美目のよい婦人の顔面又は臀部等を傷け或は之を殺害して鮮血の流出を見又は叫喚の聲を聞き其の間に性的の満足と快感とを得んとするものである。上述したるが如く、異性の選擇は如何にも雜駁にして、極りなき觀は、あるが、しかし其の間、自ら之を支配する要素の認められぬでもない。在來の考によれば、反對の性質を有するものは、相互に愛着の念を起す事が深いとして居たものであるが、事實は之れを裏切つて居る。

如何なる人も他より手酷しい酷評罵詈を受けざる以上概して自己の外貌については可なり樂天的の考を所持するが常である。されば餘りに自己と隔のある不同は却つて反感拒斥の因たるべき赤の他人てふ感を包藏せしめる。これは人種上の差異の存するもの、間に認められる事實で

ある。外貌上について真なる事は亦知的道德的特質についても、乃至風俗習慣上のことについても同様である。夫の外國人間の結婚が多く失敗に終る實例頻々たるものあるに想到すれば、眞の統合融和を妨げる條件の具備するによること推して知るべきである。故に重ねて言はんと欲するは、餘りに反對の性質を有する者の間には、各種の方面より眺めて戀愛の成立を妨ぐべき可能性が多いと。

上述せる所を見れば、兩性間の戀愛關係なるものは、實に人生の各方面に對し、根本的の意義ある事實たるを示して餘りある事と思ふ。抑も青年間に見はれる凡ての特質は、直接に間接に皆此の産出する所に係るといふも過言ではあるまい。之を譬ふれば、大河の横溢するが如く、生活の各地域を流れて之を潤ほし、豊にするのであるが、時に、反對に、逆流となつて、生活の流を斷ち切り、無情にも乾燥荒蕪の瘠土を残すに至ることもあるのである。因みに性慾の變的發露たる同性の愛と自辱とについて一言する。同性の戀は殊に女性に多いのであるが、これは更めて處女期の心理を述べる場

同性の愛

合に譲り、茲には男子相互におけるものについて述べる。男子間における同性の愛は、妻帯を許されざる僧侶の如き、男女間の禁忌、長途の海上生活、寄宿舎、監獄等の如き、男女關係の缺乏等の場合、性慾が同性の上に注がれる一種の状態である。其の女子の同性の愛と相異なる點は、彼れにありては、神秘的にて所謂プラトニッククラブの要素も認めえらるゝが、此れにありては、殆んど斯かる意義なく、單に肉と肉との交即ち鶏冠が其の大部分を占めて居ることである。

自辱

自辱の惡習の最も多く行はれるは、男女共十二歳乃至十六、七歳迄の間にある。中には女子の方に多いといふものあれど、さしたる差違がないやうである。自辱の因りて行はれる所以を討究するに、大様内外二方面の範圍に出でぬ。内部的原因とは精神の早熟過勞、乃至身體の逸樂運動の過少を始めとし、肺結核、痔疾等を指す。外部的の原因の重なるものを舉ぐれば、春暖の季節、厚着、美食、及刺激性の食物、柔かき寢具、卑猥の小説、繪畫、演劇、僕婢等の交際によるものなどである。

夫の春機發動期の初期に當り男女共に精神作用の鈍つて來る大部分の原因は此の自辱の惡結果によると言はれて居る。とにかく神経系統に若干の障害を及ぼし眼病殊に近視眼等の疾病を起さしめるのは事實である。スタンレー・ホール氏は自辱は人類のあらゆる弱點中最も悲しむべき弱點であるといひ更に自辱は個人的罪惡中のあらゆる惡素を具へたる最も模式的のものであると言つて居る。蓋し自辱は單獨作業で異性と共同を要せず隨時隨處之を行ふことが出來抑制することがむづかしく他に隠れ他を憚り刹那的快樂に耽り以て青年純潔の徳を傷くること頗る大なるに因るのである。

四 性慾教育管見

元來男女關係乃至性慾の問題はデリケートな事とし成るべくこれに觸れるとを避け世人には口外するも憚りありと考へられて居たため教育界は久しく此の方面に顧念し着手する勇氣を缺いて居たが今や性慾教育の

本問題を處理する態度

必要は盛んに醫家の間に絶叫せられ近時益々其の聲を高めつゝある。故に此の問題を對岸の火災視する態度も批難すべきであるが矢張り教育上の暗礁として成るべく有邪無邪の態度を取り以て一時を糊塗せんとするが如きはより更に批難すべきものであらう。少くも教育者は此の重大緊切な問題に對して定見を有し青年男女の健全なる發達を企圖するが上に一段の工夫をこらすべきである。此の意味に於て余輩は戀愛の心理に論及したる序を以て性慾教育に關する卑見をも併せ述べ參考の一助にしたいと思ふ。但しかゝる教育問題に立ち入り詳細を盡すは本書當面の目的ではないから極めて要概を記述するに止める次第である。

先づ余輩は性慾教育を處理する態度につきて以下の三項を提唱せんと欲するものである。第一本問題は正面より説教示教する態度を避け寧ろ側面より注意を喚起し以て青年羞耻の念を破壊する所あらん事を希望するものである。蓋し羞耻の念にして破壊せられたならば青年期における有力なる道徳上の保障を失なふ所以で禍害測るべからざるものがあるか

らである。第二積極的に性に關する知識を授くるを本旨とせず、寧ろ消極的に生殖器の行使を誤るより生起する害惡を強烈に印象せしむべきである。上にも述べたる如く、青年男女は斯かる機微の問題に對しては極めて敏感で、且つ多大の好奇心と興味とを有つて居るから、彼等の健全を保障する主要點につき簡明にして力ある知識を興ふれば事足りる。事々しく生殖器の構造作用から詳述するが如き迂愚は斷じて避くべきである。片言彼等の心機に突き入る所があれば可なりである。第三家庭及學校進んで社會における青年男女の環境を整理し或は特殊の施設により、青年をして性慾發動の機會を少なからしめる事が大切である。

實施上の注意事項

以上の趣旨を徹底せんがためには、性に關する知識としては何の位の程度のもを豫想すべきであらうか、乃至如何なる注意と施設とを必要とするであらうか、此等に關し簡単に以下五項を擧げて余輩の考を明にする。

一、生殖器の神聖とこれが擁護の義務あるとを力説する。これが爲には生殖器が幼少年期に發達せずして知力意志力の發達盛なる青年期に至

り發育を遂ぐる造化の妙用を説き、これを擁護し青年純潔の徳を全うするは、自己のため、子孫のため、國家のための義務なる所以を了得せしめるにある。

二、植物及動物の生殖作用、生殖装置を説いて、人類のを類推せしめる。斯くて人類の生殖器の構造は固より交接作用などには一切觸れざるべきである。しかも當期男女の本問題につきて敏感なる、動植物の比論によりて充分要領を把握しえないやうなボンヤリは居ないのである。次に聯關して遺傳に關する幾多の實例を擧げ、兩性の性質傾向が後世子孫の心身上に善惡兩方面の勢威を振ふ所以を切論する。

三、生殖器濫用、惡用の害を明示する。此の事項の内容上の要目としては生殖器の正當なる行使は心身の完成期後即結婚なる事實によりて生ずる一夫一婦の制によるべきもので、以外の濫用、惡用を慎しむべきこと、早期又は過度に用ふるの極めて有害なること、自辱、同性姦、獸姦による不自然なる肉交、其他不正の性交より來る花柳病、即ち梅毒、下疳、淋病、其他の戰慄すべ

き疾病を惹起することにつき具體的に印象せしめる。

四、生殖器に關する青年日常の心得を説く。これには種々の事項があれど、餘り曲々しきは却つて注意を散漫ならしめる所以と思ふから、中に就き、三項即ち女子の四週日毎に循環する月經、男子の每週一回位の程度における夢精等は健態に生ずる身體上の變化であるが故に心配せぬこと、但し異常又は病的と思はるゝことがあらば羞づべき事など、考へて陰蔽せず、時期を逸せず、直に専門醫の診斷を請ふこと、高潔の心事を保ち自己の品位を全うする上からも、日常生殖器に關することは斷じて話頭に上さぬことを指示すべきである。

五、性慾に遠かきめ、諸策を講ずべきである。青年期に勃發する性慾本能は他本能に比して甚だ強烈で動もすれば常軌を逸して奔逸底止する所を知らぬ状態に立ち至るが、さりとて調節道を得れば相當緩和の效を奏しうるものである事は、夫の軍隊生活を營む青年等が、殆んど性慾を問題とせず、運動慾食慾等に注意の集注する様を見ても窺知する事が出来る。今

身體上精神上の兩面から、性慾の奔逸を防止する方策について一考して見ようと思ふ。先づ身體上に於ける消極的方面としては、飲酒騎乘、自轉車、温きに過ぐる蒲團類、火爐の如きは、性慾を挑發し誘起する條件となるから、成るべく、青年者をして此等に近かきめぬ用意が大切であらう。更に積極的には深き熟睡、殊に床に就くや否や直に眠に入る好慣習、眠食起居の規律ある生活、中にも體質に應ずる冷水浴、冷水磨擦、活潑勇壯なる戶外の遊戯歩行、疾走、滑走、登山等は、大に奨勵鼓舞すべきである。わけても兩脚の練習は他の部分の練習に比し効果が多いためであるが、同時に性慾を冷却せしむるに役立つ。之に反し一年中坐つて居る人は肉慾の騒ぎも強く、片意地なるが多し。

精神上に於ては卑俗劣惡なる低級の趣味を排して雅馴純正なる情操の涵養に力め、薄志弱行、因循姑息徒らに籠居して無爲思索に耽り若しくは引込思案の退嬰的氣分を一掃し、氣宇濶達、襟懷洒落、實行に致なる意育の鍛成を主とすべきである。

更に青年男女の環境を整理して教育的ならしめたならば期せずして其の效果の擧るべきは明らかなる所であるが、實際此種の事は言ふに易くして行ふに難き遺憾が伴ふ。例へば、不潔な繪畫、不健全な演劇、卑猥な活働寫眞小説類に代るに、健全なる讀物、娛樂、趣味の鼓吹を主とする機關の設立を以てするが如き、狭き室内に多人數が寢食を共にする事より生ずる道念を薄弱ならしめる家庭内の雜居を改善するが如き、社會人士殊に上流階級資産階級の人々が、自己の言行を謹み、好模範を示す迄の程度には至らずとも、少くとも良風美俗を壞り淫蕩奢侈の風を助長し以て無垢の青年男女の心理に拭ふべからざる挑發的、煽動的、示唆的の惡印象を止めぬやう克己自制するが如き、戀歌が四十五首もある風な百人一首を讀み上げて青春の血燃える男女が一室に會して嬉笑に春夜の短きを啣たしむる會合類に節制を加ふるが如き、誰れと彼れとは似つかはしい夫婦などと不用意の談話の口を上るを避くるが如き數へ來れば日も維れ足らぬ趣がある。

性慾教育の
根本義、

之を要するに性慾防止のため目を閉ち耳を塞ぎ、禁遏を事とする様な

消極的方面にのみ没頭して汲々策を講ずるは、迂愚の至りてかかるは却つて隙隙を鑽りて相通すといふが如き方面に青年を驅るに至るは、夫の秘藏娘が往々にして似もつかぬ事態を發生して人を驚倒せしむる幾多の事例にも察知する事が出来るであらう。故に余輩は性慾教育の方針の第一義として、孔子の所謂賢賢易色といふ趣旨に遵ひ、性慾に代はるべき他の強き慾望例へば知識慾、運動慾、功名心、文藝趣味等を與へて發散すべき道を開き、注意の轉向を計るが最良の方策である、と信ずるものである。わけても運動すれば生理的快感が起り、幸福欣喜の情が湧く。此の快情は性慾早熟の弊の最も恐るべき時に性慾を和げ、又適當な時期に適當な程度で、人の性情に永久的弾力性を與へ、克己心自由を好愛する精神を喚起する。

第十章 青年と宗教

一 概 説

宗教が青年
期に優位を
占むる所以

青年期に於ける思想と感情とが新方向を取るといふ事實を最も雄辯に語るものは青年の宗教に對する態度であると思ふ。蓋し宗教的情操は少くとも青年の性格に於て甚だ卓越の地位を占めて居るからである。前章に述べたるが如く、青年の情緒の外方に向はうとする傾向は遂に青年を驅りて人間生活を離れたる宇宙の極なる境地に至らしめる。思ふに人生の如何なる時期も、青年期、程事物の透徹せる本質に觸れようとして逼れる要求を感じるはなかるべく、又日常茶飯事として看過されさうな一寸した問題をも尙且つ取り上げて眞面目に思索に耽らうとする時期は他にまたないであらう。生死といふやうな人生非常の危機に際して宗教が特に大なる價值を發揮するものであることは言ふ迄もない。宗教が如何なる世

にも存續して生命を有する所以は、如上の危機の重大期に立つ人性自然の要求に適ふによるとも解せられる。蓋し宗教は人生に起伏する幾多の大問題に對し、これが解決を興へてくれるからである。斯くて宗教は或種の感情の發露に一條の通路を興へ、よりて以て他の感情を沈靜ならしむるに役立つものであるから、青年の宗教心に關する研究の如きも、頗る有意義にして且つ興味ある一問題といふべきである。

抑も宗教心の基礎ともなるべきは恐怖、悲哀、希願、歡喜、愛慕等の如き最も普遍的な情緒及衝動である。幼時は萬事自己を中心として氣強く思へるも知識慾の發達につれ、眼界廣潤となり、從來嘗て知らなかつた宇宙の大を發見し、寥々たる感が起つて來る。かくて恐怖の念、危惧の情及人生の不完全より來る各種の希願は人をして超人的なるものに依頼し、其の加護を祈り恩恵を願はうとする宗教心に導き易いのである。超人的なるものの性質には種々の發達の階段があつて一様でない。幼稚なる間は天地草木、岩石も亦神として崇敬せられるが、知識の進歩と共に漸次人格的となり、最後

には全然精神的となつて来る。宗教心の發展に對し主要の地位を占めるものは、言ふ迄もなく崇高なる道德と知識の擴充とである。斯くの如くにして宗教心の幼稚の階段にありては、外面的で個人個人の主觀的念願を満足せしめるやうな世界觀を生ぜしめるのであるが、自我意識の發達に伴ひ、外面的なる宗教心は内面的の道德的の宗教感情のために壓倒せられ益々微弱となつて来るのである。

青年の宗教的經驗は宗教の二大系統に相應する二大方向の表示をなし居るといふ事が出来る。人類に於ける宗教心の最初の見はれは思想が極めて軽く考へられ、感情が主位を占めて居る態度であると思ふ。之れに次いで来るは批評的懷疑の時期で、個人生活に於ける理性の行使が見はれると期を同じうして起るものである。宗教史を通覽すれば此の二者即ち思想と感情とが相互に一盛一衰の曲折を畫いて居る事は、恰も政治史に於て源平二氏が更る／＼に將たるに類似するものがある。十八世紀は理性主義の全盛期で、一見信仰の根柢を破壊し盡した如くであつたが、感情重視

青年の宗教
的經驗に於
ける二大方
向

の反動はこれに次ぐ敬虔主義、ロマンチズムの時代を招致したのである。同様に現代は懷疑時代として考察せられぬでもない。所謂科學と宗教との争は外見上前者の勝利に歸したる觀あるが故に、此の種の見地に立つ人は將來は無宗教の時代に到達すると考へるのであるが、しかし反動の前兆は近く脚下に迫つて居るのが認められる。夫の世界各處に行はれて居る諸種の禮拜の儀式は人性の最奥部に根ざす宗教心の發露を表示する何より慥かな證左ではないか。故に若し宗教上の教理にして満足を見出すことの出來ぬ場合に遭逢せんか、人性は宗教以外に於て例へば詩歌音樂等の世界に於て情緒發動の通路を求め、此處に愉悅と慰安とを取らうとするのである。さはれ詩歌といひ藝術といひ音樂といひ何れも信仰といふ人性に必要な系統をなさぬがために、彼等の要求を充す能はざるは勿論である。宗教家中には熱狂的の情緒の發動の形式の一方の極端より、冷き論理的の教理の穿鑿を事とする他方の極端、即ち前記の二大方向の兩極端に走るものが少なくない。正當なる青年の進歩も亦斯かる變化を通じて遂に

自家の性格に適應せる宗教の形式に落ち付くのを常とするやうである。

二 兒童期と青年期との信仰の相違

青年期宗教の第一の特徴として注意すべきは兒童期のそれとは全く相反して居るといふ事である。今此の兩者の間に存する差違をスラフター氏の言葉を借りて稍々大袈裟に言ひ顯はすならば、新舊の聖書の間に存する差違に類するといふべきであらう。兒童に對しては舊約全書の物語の方が強くしてしかも特異の印象を與へるのである。これ舊約全書は極めて戲曲的に出來て目覺ましく、兒童をして國王や戦士やの行動に果てしなき想像力を馳せしむるからである。就中兒童にも適用せられさうな褒賞又は懲罰が個人的の權威者によりて行はれる統治の組織を有して居るのが、兒童心理に相應はしいと見える。エツピングハウスも言つて居る如く、兒童は元來信仰もなく不信仰もなく、最初は非常に輕卒に信ずる傾向がある。月が空から落ちると言へば空を仰いで待つて居る程説話を信ずるも

のであると言へるは、よく兒童期の信仰を言ひ見はして居る。

現在世界に於ける三大宗教は人生に於ける生活期の各種の状態に適合して居るやうに思はれるのは頗る興味深い事實である。例へば老人心理の特徴はよく佛教に反映し來りて茲に靜寂無爲の哲學あらゆる活動の否定といふ状態を示現して居る。他方又兒童期に最も適應せるは回教で、こは舊約全書のヘブライ正統の後裔である。此の如き一寸した提言も宗教教育といふ難問題の解決に對し幾分の裨補する所があらうと思ふ。蓋し如上の見地に立ちて既成宗教を達觀すれば教理中に含まれる附録的の些事や偏見やはこれを排除して最も教育上價値ある材料を公正に採擇しうるからである。宗教心の啓沃に關し大なる障害をなすものは他なく、嘗て收得したるものは生涯を通じ固定して容易に變化せぬものであるとする根據なき偏見である。他の心理作用と同様、兒童期における信仰は絶えず發達期間に於て變化推移し、不變なるものではないことを知らねばならぬ。夫の兒童向きでない新約全書の如きは兒童期に對し單に眞の戲曲的にし

て不要なる出来事等のみが、注意し把持せられるはよく知る所の事實である。基督の或る事蹟の如きは疑もなく兒童の宗教心の啓培に對し價値あるものではあるが、しかし寧ろ後れて見はれたる諸種の物語などの中には却りてより以上に兒童に適合するものもないではない。夫の有益なる聖者の一齣も青年期前にありては單に外部的方面にのみ着眼し理解せられるのであるが、それも餘りに親しみ過ぐれば陳腐平凡と考へ一顧も與へぬやうになる。焉んぞ知らん。かゝる一齣は青年期に於て新に發達したる統覺能力よりすれば全然新意味を以て玩味せられる貴むべき價値を有するものである。以て兒童期と青年期とにおける宗教心の間に大なる隔りのあることを察するに足らるであらう。

三 青年期に於ける信仰の回轉

青年期における宗教上の主要なる經驗は何であるかと言へば所謂信仰の回轉として知られる所のものである。尤もこれは兒童期に於けると同

一、宗教を信奉するにもせよ、彼れと此れとは全く信奉の内容を異にし、從つて宗教的經驗の革命とも見らるべきものである。此の信仰回轉の動機は大様二に分つて考察することが出来る。其の一は個人の外部にあつて信仰回轉の動機を與へ、又は大なる偶然の出来事によつて直接間接に影響を與へて居る動機である。何れにせよ個人の精神生活に感化變動を與へて居るものは外部の變動が主なる原因となつて居る。従つて此等の外部的條件の如何によつて印象の強弱なり、經驗の時期なりが分れて来る。其の二は純主觀的性質のものである。而して個人の内發的經驗に於ても生理的と心理的との二者の別がある。前者は青年期に於ける身體の發育状態に伴つて見はれて来るものであるから、古今東西を通じ全く人類一生の身體發育の時期に從つて何人もその影響から免れることの出来ぬ經驗といつて差支へない。概言すれば青年期における回心即ち信念回轉の動機は殆んど此の生理的原因に基くといつても過言ではない。後者即ち心理的原因によるものは個人の素質的差違に基くことが大である。従つて知識

の擴大により、理的満足をえんとする動機から回心するもあり、情緒の開發に伴ひ信念の涵養せられるにつれ、熱誠なる信念活躍の餘に出づるもある。更に、経験を反復する事から思惟するのみでなく、實行を伴ひ意志作用を修練する事によりて力ある信念をえんとするによるものもある。要するに回心の経験は個人の心意發達の必然的過程に基き、理的知的作用によるもの、情緒的動機によるもの、意志的決定によるもの等の種々あれど、其中最も多いのは情緒的動機である。これは言ふ迄もなく、宗教的経験の性質として、理知の満足といふよりも、情緒的慰安感動をえんとする傾向の優位を占むるは當然のことと言ふべきである。左に掲ぐる西澤頼應氏の調査に依る統計はこれを語つて居る。

| 學校の種類 | 解答の分類 | | 環境の感化 | | 個人的経験 | | 解答者割合 | 無記入者割合 |
|-------------|--------|------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
| | 依額七ル枚數 | 解答者數 | 環境の感化 | 個人的經驗 | 思想的動機 | 情緒的動機 | | |
| 帝國大學及高等學校 | 1000 | 1000 | 350 | 350 | 150 | 150 | 100 | 100 |
| 高等師範學校及師範學校 | 1000 | 1000 | 300 | 300 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| 各種專門學校 | 700 | 700 | 200 | 200 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| 宗教專門學校 | 1000 | 1000 | 400 | 400 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| 女子專門學校及女學校 | 1000 | 1000 | 300 | 300 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| 合計 | 5900 | 5900 | 1750 | 1750 | 550 | 550 | 500 | 500 |

回心の年齢

然らば入信もしくは信念回轉の年齢は固より個人の素質と誘因とによつて一様には律しがたきも、大體何歳頃に多いであらうか。此等に關する石神徳門氏の調査によれば、紀元第七世紀から第十九世紀の間に現はれた日本及支那の名僧及び尼僧八百十三人の出家の年齢は三歳乃至六十六歳の六十三年間に亘つて分布し、疎密の度一様ではないが、自ら四期に區分せられるやうである。即ち第一期は七歳から二十歳に至り、第二期は二十一歳から三十歳、第三期は四十歳を中心として其前後に跨り、第四期は四十四歳から六十六歳に及んで居るといふ。しかし、人員の密度の最も多いのは七歳乃至二十歳の第一期で、殊に十二、十三歳が最高に位して居る。これに

よりて考察すれば出家は正しく青春期の現象で、後年のものは概ね其の餘波と見なすことが出来る。

同じく石神氏が十八世紀から二十世紀の間における七百三十九人の男女につき調査したる所によれば、一般男女の入信期も大體其の傾向に於ては上述の出家入道同様であるといふ。即ち入信の最も多い年齢は十五歳乃至十七歳で出家の最も多い年齢に後れること三年である。更に氏が質問法により現代青年の宗教心を調査したる結果に見るも、現代の青年の眞に宗教の興味を覺え始める年齢は先きの一般男女入信の時期と一致し其の最も多いのは十六歳前後である。最澄が十九歳で日枝の高嶺に竊居し、空海が十九歳を以て大學を去り南海の幽林に冥想せるはよく此の間の消息を語るもので、先に述べ來れる古今東西の青年の入信若しくは回心の宗教的經驗に通ずる一般現象の時期を示すものと言ふべきである。

四 信仰に對する懷疑の時代

懷疑を生起する要因

宗教上の信念回轉の經驗に次いで見はれて來るものは何んであるかと云へば懷疑の時代である。これには種々の経緯があつて頗る複雑を極めて居る。第一青年は自己の道德上の煩悶乃至疑惑の難問題が入信又は回心によりて一舉解決を見茲に新生命の開展があることと豫期して居たのである。然るに事實はこれを裏切り、新生活は單に思想の上の遊戯たるに止り、實際の仕事の上には別にさしたる効果のないことも分つて來る。尙此等と相並んで年長者や老人やに對する反感不信も此の懷疑の氣勢を助けるのである。蓋し成人が何か道德上の事項に關し青年と談話を交る時は、到底實行不可能と思はれる風な圓滿無缺の完全なる生活について云爲するが常であるから青年をして轉た怪訝の念に堪へざらしめる。加ふるに放埒な父兄ですら我が子弟に對する態度は全く別人の如く、自己の青年時代には恰も小聖人のやうな生活をなしたるさまに言ひ聞かせるものである。固より此等成人の企圖する所は自身と雖も至難なることを知れど、唯青年に理想の糧を與へんと動機に出づるは明らかである。然るに未

だ偽善に慣れぬ素朴な青年の心情から言へば個人の行爲と個人の思想とが全然相反する方向に走れる場合を見出し此の眼前の人生の矛盾に對し益々奇怪の眼をみはるは當然と言はねばならぬ。且又青年の崇敬する宗教家教育家にして尙日常の實際生活に際しては青年に日頃説き聞かせて居る理想と相容れぬ行動をなすことあるを看取する。斯かる結果は如何であらうか。今迄模範實例として崇敬せる多くの人々に對し不信の念を懷き、懷疑の霧は深く精神裏を鎖す事になるのである。

懷疑時代に於て最も主要なる要素となるものは言ふ迄もなく理性である。これが今や青年期に入りて理智的批評的の形を取つて見はれて來る。今迄の幼少年は何事につけても受容的の態度であつた。彼れの知的の營養分は外部より種々の器官を通して這入つて來るのであるが、此等は自己在來の經驗と一致さへすれば、何等の疑問なく、さながら受け容れたのである。而して一旦受容せられたものは牢乎として根を下し中心の權威を有する次第であるから、先輩や長者やの人格的價值はむしろ思想の價值より

新なる理智
の閃めき

も重視せられるのであつた。斯かる受容時代に於て最も微細な點に至るまでさながらに取り入れられたものは何であるかと言へば、宗教に關する教へである。故に幼少年期のかゝる時代に於て若し信奉する教理の特種の一小部分に觸れでもしたならば、それこそ全體の系統はために破壊せられるものとして考へられ、大なる恐慌を生ずるのである。所謂後生大事として固く抱持して動かぬ態度であつた。

此の如く幼少年期に於て固定し確定せるものに對し、弓を放つといふ新なる態度は、畢竟個性の主張に基く、一相として考察せられる。しかも此の傾向は科學の勃興に伴ふ現代の主知的思想によりて、一層光輝を添へて來る。斯くて青年者は何等の證據のないものを信奉するは一種の不徳であるといふ風の考を懷くやうになる。されば信仰なるものも證據といふ體かな基礎の上に立てる理性に對し責任を帯ばねば承知出來ぬといふ態度に變り權威の上に立てる何物をも攻撃すべき懷疑主義の發現に途を開くことになる。疑惑が知的の發達と密接なる關係を有して居るは明らかで

あるから、第一に佛書や聖書やに記載せられて居る不可思議の物語、奇蹟などを懐かず思ふ。此等に次いで起るは靈感とか、精神の不滅とか、復活とかに關する疑惑である。

斯くて一方にありては自然のユニフォーミテイ、オズキチテア一様といふ上に基礎を置ける科學的、實證的の信條があり、他方にありては久しい年代に亘り多數の人類の信仰と後援とを背景にする宗教的の系統があり、兩々相下らず對立するのである。

此の兩系統間に存する罅隙は年長者などにはさ迄意に介するに足らずと考へられるのであるが、青年者には然らず、是非とも順應を要求すべき最も眞面目な最も眞剣な問題として眼前に提供せられて來る。

宗教史に反復せられて隆替あるが如く、個人生活に於ても、理性と感情との二者が常に優位を占めんとして波瀾重疊するは上述せる所であるが、併し青年期における最大難關最大危機は知的の方面ではなくて寧ろ情緒的の方面である。蓋し青年期に最も切實に感ずるは、全生活の大なる流れに對して歸趣を示すべく働く所の價值といふ系統の要求である。言ふ迄も

理性と感情との衝突

なく、此の種感情系統の組織は、信仰といふ要素と、非常に緊密なる關係を有するのであるから、信仰の破壊と同時に覆滅して見る影もないやうになつて仕舞ふ。若し懷疑といふ事が單に論理上、思索上の問題といふ程度のものならば、一些事であるが、青年にありては、然らず、此の種の煩悶は、自己の生死に關する重大問題と感ずる。青年者は、又生存の眞義及價值は、理性の破壊作用によりて崩壊を許さぬ系統上に存するとも感ずるのであるが、さりとて一旦捉へて愛着せる信仰が無くなりしかも、之れに代るべきものを認めざる時には、遂に暗鬱と失望との境に追ひやられるの餘儀なきに至る。斯くて全世界は、恰も紙片で造れる家の如く、自己の周圍に向つて落下するが如くに感ずる。不安と疑惑の魔手は、破壊作用をこの程度に止めずして、一層極端なる境に迄彼れを齎さずんば止まうとしない。即ち疑惑者たる自己の存在の意義を疑ふ迄に、病的となり、ために自殺行爲に出づること、も少なからぬ所である。蓋し彼れよりすれば、世界は全く暗黒にして、虚偽に充ち、たるものと感ずるがゆゑである。

五 人生に於ける宗教的經驗の推移

以上は幼少年期と青期との間における信仰の相違、青年期の信念回轉の經驗及それについて生起する懷疑時代について大要を敘述したのであるが、此等は此處に止まらずして尙以後の生活に亘り、大波小波の起伏を示して居る。今左に西澤氏がクランク式の調査法により現代學生の宗教的經驗を委細に研究せられたるものに就き、要概を摘録し、以て、人生における宗教的經驗の推移の狀況並に青年期の占むる地歩如何を窺はうと思ふ。氏は宗教經驗者の多數について考察したる結果、出生後意識の發達程度に従つて時期を七つに分けて居る。

第一期、出生以後四歳迄の宗教經驗である。此の時期の經驗は意識の發達幼稚なるの致す所として、全く環境の感化に従つて動作して居るに過ぎぬ。即ち家庭の習慣社會の習俗の強制的感化であつて、無自覺的に諸種の形式儀禮を模倣して居る。

西澤氏の研
究に係る七
期

第二期、六歳を中心とする前後の年齢に於ける經驗である。此の時期から意識の發達稍々活潑となり、内心の欲求に基く宗教的信念の萌芽が認められる。併しながら主としては、やはり前期同様環境の感化特に説話に基く感化が著しい。即ち家庭に於ける年長者の説話は固より家庭以外の説話にも感動され易い。従つて説話によりて宗教的情操を涵養するにはふさはしい時期である。後日假令説話に基く信仰は變動を生ずる期あるにしても、茲に養はれたる宗教的情操は他の形を以て發育して來る。宗教的情操は長さ間の薰化によりて體驗せられるが常で、何等の豫備的修養なくして突發的には生起するものではない。故に若し此の時代に斯かる機縁が興へられなかつたならば、異日外部的動因によつて宗教的情操の刺激せられた時、純眞の宗教經驗をなす可能性が少ないのである。又當期は想像作用の盛に活躍する時代であるから、神話的色彩が多く認められる。

第三期、十歳十二歳を中心とする前後の年齢における宗教經驗である。從來は餘り注意を拂はなかつた外界の事象が宗教的信念を開展させる重

要な機縁となつて来る。従つて稍々自發的に經驗の機會を求めようとする内心の欲動に相應して、境遇の變化とか近親の死とか身體の虛弱とかいふ外部的動因がある時眞純な宗教經驗となる事がある。要するに當期は意識の發達著しく従つて自發的動機に基く經驗が増して来る。

第四期、女十五六歳、男十七八歳を中心とする前後の年齢に於ける經驗である。此の時期は身體の發育が旺盛を極むると共に個人の生活に於ても境遇の變化が起り信念の動搖が起つて来る。所謂青年期の回心なるものはこれである。これは生理的衝動に基いて生じて来るが如くである。従つて其の宗教經驗は全く突發的動機に基く自發的の宗教經驗で、外部的事象は單に信念の回轉を促す機縁となるのみである。其の信念の動搖は理性の満足でなく、情緒の慰安によりて一時的の安定をうる。しかし此の信念の安定は個人の生涯を通じて變らない獲信ではないから、更なる回轉を促されることが多い。情緒の慰安による安定だから他力的信仰の萌芽は此の期に培はれることが多く、基督教徒となるもの、眞宗の信條により

安心をえて居るものは多く此の時期にあるといふ。

第五期、二十歳二十二歳を中心とする前後の年齢に於ける經驗である。本期にありては精神的には突發的の不安を感じ、恐怖の念に襲はれ懷疑に陥る事が多い。しかし稍思索的經驗が増して來て自力的信仰の決定せられる曙光を認めることが出来るが、反面疑惑は疑惑を生じ、煩悶は煩悶を起して遂に死に誘ふこともある。よし信念の一時的安定をえても、他日外部の刺戟によつて又信念の回轉を來す傾向がある。

第六期、三十歳を中心とする前後の年齢に於ける經驗である。當期にありては特種の人を除き、多くは人生問題生活問題が中心思想をなして來る。従つて其の生活が順調なれば別に信念の急激なる動搖も生じないが、さらぬ場合には外部的動因より回心をなすことが多い。しかし其の際の經驗は前期の如く強烈なるものではなく、寧ろ質實なる信念の開展である。第七期、四十歳を中心とする前後における經驗である。前に情緒的慰安又は理性的解決によりて安定をえたる信念も、更に外部より絶えず刺戟

を與へられ、經驗の内容は豊富となり思想上にも一層鞏固な確信をうるやうになる。即ち以前の小獲信が大獲信となり、前悟より後悟と次第に信仰の徹底を認むるのである。

此の如き七期の中常態にありては、如上の各期が漸次に經驗せられるのであるが、個人の素質境遇の異なるにつれ、或時期は強調せられ、或時期は省略せられる事もある。

これによりて見るも、人生にありては、回心の時期は再三再四到來し、相次いで變轉し、大波小波を起伏して、信念の開展を經驗することが分るのである。

終りに臨み一言すべき事がある。それは青年期に於ける宗教の價値の頗る大なるものなるは固より言を待たぬ所であるが、其の眞の機能は果して何れにあるかといふ事である。曰く、外見上未知の世界に向つて漕ぎ出さんとするに際し、荒涼と沮喪との氣分より青年者を救ふに足るだけの大きな生活上の地圖を提供するにある。而して此の地圖の規模たるや、人間

青年期における宗教の機能

理性の力で發見しうるあらゆるものを包容して猶餘りあるだけの濶大なるものたるを要する。斯くして此の地圖の最高の用途は青年の性格の發展に缺くことの出來ぬ高尚なる情操の發動を助成するといふ點にある。青年期をすぐれば、宗教なるものは此の種現在の目的に對する價値は頗る減少して來る。青年期宗教教育の必要は全く此處にあるを知らねばならぬ。

第十一章 青年の團體組織性

一 青年の社交性

人類にはギツヂングスの所謂同類意識なるものがあつて、同類相牽き相親しまうとする。即ち自己の仲間の社會に入るを喜び、此の社會のために或程度の同情を感じ、而して種々の勤めを爲すを好み、共同的の目的を追求せんとする。斯くて他の無生物や動植物とは自ら特異の地位に立つものとして同類を待ち、これに順應する行動を取る。尤も兒童も最初の間は同類の範圍が頗る曖昧模糊たるもので、愛犬や小貓やも矢張り自己の同類と考へて居るのであるが、漸次發達するに連れて同類の範圍が明瞭の度を加へて来る。斯様に無生物と動植物との間に境界線を劃し、人類をば特に摘出して親しむべきもの愛すべきものとして應接する態度も、廣き意味の團體組織的傾向乃至黨同的傾向の萌芽とも言ひ得るであらう。

同じく同類とは言ふものの其の中でも何時しか親疎の關係が生じて複雑多様となつて来る。此等の詳細な調査は余輩は嘗て雜誌學校教育に於て社會意識發達の起源を論じて兒童の社交性に及ぶてふ拙稿中に論述したる所であるが、概言すれば、兒童期を通じて自己の親しき友達を選ぶ要件としては、兩親の貧富とか、身分階級の上下とか、對手の品行方正、學術優秀とかいふ類の事がさして主要の役目を行ふものではなく、寧ろ特色としては機敏熟練運動上手、快活等總て自己の活動的原始的にして簡易なる生活を營むが上に都合の好き友達を欲求するものである。青年期に至れば、社交性は更に増大し、能く氣質境遇等に應じて羞耻、衒耀、もしくは矯飾の表出をなすこと甚しく、外圍の人々の善意を得、其の惡意を受けまいとする念が極めて強烈である。青年者が名譽、光榮乃至代表者等の地位を銳意渴望するはこれがためである。されば青年期位賞讃が人を酔はしめ、諂諛が人を誤る時期は亦他にない所であらう。兒童及青年における社交性の表現の著しきは上述せるごとくであるが、茲に同じ社交性に基く團結といふ中にも

大人社會に見るが如き體制を具へ、規約に束縛に、稍々連結の鞏固なる俱樂部風組合風の朋黨を組織するとあるは、兒童及青年を觀察する人の往々けにして遭遇する所の事實である。斯かる朋黨的傾向の始期、兒童各期に於る特色、斯種團體の目的規約如何、男女間の相違地方的の特異點等に互りて精細に調査を遂げたならば、單に興味深き好箇の研究題目たるに止まらず、亦教育上有益なる視點たるを失はぬが寡聞我國に於て斯様な研究に對し、特殊の試みの爲されたるを聞かぬ。故に以下ヘンリー・シエルドン氏の試みたる研究の概要を掲げ、斯種研究の教育的意義に關し、卑見を附け加へて見よう。

二 青年者の組織する團體の種類

發達期における結社結黨的傾向に關し、廣汎詳細なる研究はヘンリー・シエルドン氏によりて、米國兒童の團體組織を喜ぶ活動なる題目下に試みられて居る。氏の目的とする所は何れ程の兒童が各種の團體組織に關係し

シエルドン氏の試みる調査の目的と方法

而して如何なる種類の團體の建設に、彼等は興味を有するか、又斯かる團體連盟か公共心の發達に如何なる意義を持つかを知らうとするにあつた。かくて氏の調査は、兒童が大人の補助作用なしに、彼等自身によりて建設せられたるものでなく、はなぬといふ條件の下に、兒童の組織し加盟せる俱樂部組合様の連盟に關して、筆答をなさしめたのである。此の際大人が彼等に助言し、或は彼等に其の事を説明し、彼等に或る思想を與へ、或は彼等に何等かの方法で示唆することを全然避けしめる手段を取つた。問題は總ての學級に於て同一の時間に提供せられた。これ兒童相互の談話暗示等の影響を防止せんとするにある。

答案の集められたるは米國の五つの州、即ちマンチエスター、シユベール、ウエストスプリングフィールド、ストットントン及びサンタローザからであつた。米國の東西端なる新英蘭と太平洋岸、田舎と大都會生活といふ類の兩極端はこれを避けて居る。被験兒童及青年の總數は二千九百〇六人、内瑣細な點について答案の中に缺陷のあるもの三百九十八人、其の缺陷の主なるも

のは兒童の年齢の記入を忘失せるものであつた。此の種の不完全なる答
案は研究の目的に副はぬのであるから除外せられて居る。

残りの二千五百〇八人の筆答中八百十人即ち正當解答者の三十二パー
セントの兒童青年は機會だにあらば其の大多數は或る團體會盟に加入し
たいといふ希望あることを告白して居るとはいへ未だ何等の經驗なきこ
とを報告して居る。斯様に何等の經驗を有たぬといふ兒童數の最も多い
年齢は此の研究にありては最も若き兒童に存するを示すのである。上述
せるが如く問題の要旨とする所は單に兒童自身の考によりて建設せられ
たる團體に該當するのであつたに拘はらず此の制限は頗る注意の外に委
せられた趣が見える。即ち六百三十四人の兒童は明らかに大人の影響助
成の痕の認めえられる會合連盟に就いて報告して居る。此の種の中でも
其の九十九パーセント迄は宗教的及人道的の組織に關係のあるものであつ
た。斯く種々の要求に副はぬ缺點あるものを除き本來の意義における兒
童及青年の組成に係る團體は残りの千百六十六人である。氏の調査によ

よれば此等兒童及青年により組織せられる團體は凡そ次の七つに分類す
ることが出来るといふ

秘密の團體、シエルドン氏は此の項目の下に他の性質内容は姑らく度
外に置き單に秘密といふ性質を具へて居る風な團體を包括したのである。
元來兒童には早くから物事を隠し秘密に附しようとする本能がある。こ
れは隠蔽せるものを他に發見せられざるを興がる無邪氣の希望から起る
らしく、ブライエルの書物などには種々の實例を示して居る。我國の兒童
が物を背後にかくしナイ、といつて見つけられまいとすることも矢張
隠蔽の本能である。扱てこの秘密團體に屬する多數者は單に遊戯を目的
として組織せられることを示して居るが必ずしも全部然りといふ譯では
なく中には惡事を根絶せんための連盟、漁獵を目的とする會合、人形の衣物
製作の俱樂部といふ類なものがあつて、此等は何れも秘密的の性質を具へ
て居る。兒童中此種團體を組織するものは恐らく多數に上るであらうと
の豫想はこれに反し極めて少數なるは意外とする所である。後の統計表

に見るが如く、本研究の包容する十年間に於て、此の種の連盟は何れの年齢にも通じて存する事と、女性が著しくこれに關係せるとの二事はその特色として注目に價する。

掠奪捕獲を目的とする團體、捕獲欲浮浪性家を離れる本能等が此の中に含まれて居る。掠奪隊、漁獵俱樂部、各異の地方學校又は町内の各部に根據地を置く争鬪的團體、小屋城砦様のものを建設せんとする同盟等は其の主なるものである。此の掠奪捕獲の上に立てる連盟は若き兒童に多く、殆んど彼等の定型的の體制と言つてもよい。十二歳頃に至れば兒童の斯かる興味は更に一般鞏固なる體制を具ふる競技俱樂部に移り行くが常である。とにかく此の種連盟の形式は特に墮落に陥りやすきが故に、教育上警戒を怠つてはならぬ。夫の何々組と稱する不良少年の行爲が時々新聞紙上に見はるるものにつき、調査すれば思半ばに過ぐるであらう。米國邊にては斯様な掠奪團體が著名なる大學の學生間にも存し、彼等は往々精巧なる設備を有する巢窟を構へ、掠奪せる飲食物を此處に齎らして宴樂の資

に充つるといふことである。又往々新來の下級學生を苦しめ若くは其の財物を掠奪するを目的とするものがあるといふ。尙掠奪捕獲を目的とする團體の殆んど總ては上記せる秘密的性質を具へたるものの中に入るの言ふまでもない。

社交的團體、これは社會的衝動の直接の産物であつて、自己の愉快を増加しようとする兒童及青年期の心理的狀態の一相を表はして居る。多くの斯團建設者は建設唯一の目的として、仲間の共同親和娛樂の保障を得んとするにあるを告げる。女兒に於て此の種の體制の發達は特に著しいものがある。かるた俱樂部、圍碁、將碁仲間の如きはこれに屬する。女兒の數は五に對する一の比を示して居る。所屬人員の數は被驗者の十パーセントに當り、本研究の包容する兒童の年齢を通じて見はれて居ることが知られる。

働勞的團體、これは各個人の直接の利益を齎らすことを要素として居る。續々見はれ來るものには裁縫俱樂部、購買練習同盟、事物蒐集俱樂部様

の如きがある。他の各種團體の如何なるものよりも女子に多く、男子に對する比は百八十七對五十九で發達期中に漸次消失して行く。此の團體中工業的性質のものは勤勞といふ以外次に述べる入道的の副目的を有することが往々にしてある。例へば女子の裁縫俱樂部の如きは目的とする所裁縫にあれど時には其の製作品を以て貧者に恤まうとする副目的を有する類である。

道義的團體、此れには二つの様式が見はれて居る。即ち一は主目的とする所薄倅なる同胞を救はんとするものと、他の一は相互の不徳を警戒し合はんとするもの例へば野卑俚俗の言罵詈訕笑喫煙其の他の惡癖矯正を期成するもの等の如きである。併し此の種の團體は極めて小數で、女兒に二十二人、男子に十一人を數ふる程であつた。それも又大人の影響せる痕跡が絶無といふわけには行かぬから、果して本來の意義に於ける兒童青年自身の發意によるものとして取り扱ふには未だしき所があるやうである。

藝術的團體 文學美術音樂的の發表を促進せんがための體制で、我國で

いへば、詩歌の會、謠曲の會等の如きものである。別記統計表に示すが如く、發達期中青年期に屬するもの多く、十三歳頃迄は甚だ顯著ならざる役目を行ふに過ぎぬ。上記の二團體に於けるが如く、矢張り女兒は優位を占め、其の比は二對一である。

競技的團體、一般に行はれる各種の競技を取りこめたる團體で、フットボール、バスケットボール、ベースボール、テニス等ボール遊びのあらゆる種類が優位を占めて居る。これは總てのものの中で最も兒童青年を引きつける力強く、且つ最も長きに亘つて行はれるもので、又男子の極めて優越の地位を占める連盟である。所屬男女子の割合から言へば、五對一である。統計表を一覽すれば、此の種の組合は最後の學年に至る迄絶えず増加して愛好せられるものであることを示して居る。兒童の叙述せる所を見るも、此の種の組合にして一旦建設せられんか以前に記述せる團體の如何なるものよりも有興味にして最も永續するものなること、及此の組合はこれに屬する兒童青年の生活に對し重大なる意義の存することを想察せしむ

るものがある。故に此の種の團體の處理に關して今後一層眞面目に考へられんか、團體に對する協同心、服従心、義務心涵養に關し、絶好の機會を提供するものと言つて善い。其の弊所に着眼し、徒らに手を拱いて罵詈の言を放つを止め、今後は積極約の態度を以てこれに臨み、社會的、公共的教育の價値ある形式に其の地位を高め、指導練成宜しきをえしむるは、最も自然にして且つ合理的なる教育法であらう。

以上の調査
に對する考
察

シエルドン氏の研究に成る發達期の團體の主なるものは上記の如くであるが、それに關し二三附言したいことがある。

其の一は發達期における此種團體組織を喜ぶ傾向は總ての國の兒童青年に共通のものか、或は單に米國にのみ存するものかといふ問題である。夫のタルドやポールドウソンの主張するが如く、模倣は社會的作用における最も主要なる要素であるといふ見地に基づき、或る論者の如きはこれ畢竟亞米利加の共和制度の所産に外ならぬと考へるものがある。併し必ずしも米國特有のものにあらずと思はるゝは後段に至り述ぶるが如くである。

其の二は、團體組織性に於ける男女性別の顯著なる差違である。女子は宗教的人道的の社會より頗る影響せられ、男子よりも一層強い愛他的の傾向を示して居る。又連盟團結の動機として女子は社交を増進せんがために、自己自身の直接の影響を多からしめんがために、他のものを助けんがために、といふ類が多い。男子は寧ろ野蠻人に類し、獵せんがために、漁らんがために、争はんがために、相互身體上の優越を競はんがために、連盟する。又社交を催進するといふ様な團體を除いては男女兒が一團體中に落ちあふことは甚だ稀である。

其の三は秘密といふ様なことが、兒童期の團體組織の上になして、主要の役目を行つては居らぬといふことで、これ吾人の意外とする所である。

| 年 | 項 | | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 總數 |
|----|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|----|------|
| | 男 | 女 | | | | | | | | | | | |
| 8 | 53 | 50 | 53 | 78 | 119 | 167 | 199 | 205 | 150 | 104 | 30 | 16 | 1121 |
| 9 | 50 | 67 | 53 | 127 | 189 | 208 | 224 | 119 | 96 | 44 | 13 | 13 | 1197 |
| 10 | 35 | 53 | 55 | 133 | 187 | 173 | 120 | 90 | 72 | 38 | 11 | 11 | 918 |
| 11 | 28 | 44 | 118 | 155 | 104 | 188 | 80 | 34 | 11 | 11 | 11 | 11 | 912 |

| 團體非所屬者數 | 一團體以上所屬者數 | | 秘密團體所屬者數 | 慈善團體所屬者數 | 社交的團體所屬者數 | 勤勞的團體所屬者數 | 人道的團體所屬者數 | 藝術的團體所屬者數 | 競技的團體所屬者數 | 兒童の爲め大人の設立せる團體に所屬者數 | | 總計 |
|---------|-----------|----|----------|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|---------------------|-----|-----|
| | 男 | 女 | | | | | | | | 男 | 女 | |
| 22 | 1 | 1 | 3 | 4 | 0 | 5 | 0 | 0 | 0 | 1 | 7 | 294 |
| 25 | 2 | 1 | 6 | 5 | 0 | 10 | 5 | 0 | 0 | 1 | 17 | 298 |
| 26 | 2 | 1 | 5 | 6 | 0 | 10 | 2 | 0 | 0 | 1 | 20 | 309 |
| 31 | 5 | 13 | 10 | 5 | 8 | 20 | 8 | 0 | 4 | 52 | 406 | |
| 35 | 5 | 11 | 7 | 4 | 0 | 31 | 17 | 0 | 10 | 61 | 406 | |
| 49 | 5 | 11 | 7 | 4 | 0 | 31 | 17 | 0 | 10 | 61 | 406 | |
| 54 | 10 | 11 | 18 | 3 | 7 | 22 | 7 | 8 | 8 | 57 | 468 | |
| 54 | 10 | 11 | 18 | 3 | 7 | 22 | 7 | 8 | 8 | 57 | 468 | |
| 49 | 6 | 11 | 12 | 2 | 1 | 22 | 15 | 5 | 4 | 73 | 469 | |
| 25 | 3 | 6 | 7 | 3 | 1 | 11 | 16 | 4 | 2 | 40 | 200 | |
| 17 | 0 | 5 | 3 | 3 | 3 | 7 | 11 | 2 | 5 | 32 | 200 | |
| 14 | 4 | 5 | 4 | 1 | 1 | 7 | 11 | 1 | 7 | 10 | 177 | |
| 3 | 3 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 1 | 0 | 3 | 20 | |
| 294 | 7 | 3 | 67 | 21 | 25 | 105 | 98 | 1 | 6 | 68 | 507 | |
| 298 | 3 | 1 | 65 | 21 | 25 | 105 | 98 | 1 | 6 | 68 | 507 | |
| 309 | 2 | 3 | 67 | 21 | 25 | 105 | 98 | 1 | 6 | 68 | 507 | |
| 406 | 3 | 3 | 67 | 21 | 25 | 105 | 98 | 1 | 6 | 68 | 507 | |
| 406 | 3 | 3 | 67 | 21 | 25 | 105 | 98 | 1 | 6 | 68 | 507 | |
| 468 | 5 | 5 | 67 | 21 | 25 | 105 | 98 | 1 | 6 | 68 | 507 | |
| 468 | 5 | 5 | 67 | 21 | 25 | 105 | 98 | 1 | 6 | 68 | 507 | |
| 469 | 4 | 4 | 67 | 21 | 25 | 105 | 98 | 1 | 6 | 68 | 507 | |
| 200 | 2 | 2 | 32 | 10 | 7 | 17 | 17 | 3 | 9 | 17 | 200 | |
| 200 | 2 | 2 | 32 | 10 | 7 | 17 | 17 | 3 | 9 | 17 | 200 | |
| 200 | 2 | 2 | 32 | 10 | 7 | 17 | 17 | 3 | 9 | 17 | 200 | |
| 200 | 2 | 2 | 32 | 10 | 7 | 17 | 17 | 3 | 9 | 17 | 200 | |
| 200 | 2 | 2 | 32 | 10 | 7 | 17 | 17 | 3 | 9 | 17 | 200 | |

米國青年學生の組織する各種會合

更に米國における青年期の學生々活にのみついで言へば、殆んどあらゆる種類の形式あらゆる種類の目的を有する俱樂部、團體、集會等を含み、飲食狩獵、各種の戸内及野外の競技、種々の異りたる政治上の目的、種々の社會改良に關する會合、各種の哲學、文藝、研究部、滑稽俱樂部、強き飲料を飲用する俱樂部、博奕、射漁、演劇、惡戲俱樂部、飲酒會、論文會、食物定量改良會、爭鬭俱樂部、奇

我國少青年に對する觀察

裝會、劣等生會、小盜會、慈善、宗教、傳道、旅行、其の他、科學及人道に關する各種の會合、若しくは、單に立派な會名と役員とを有するのみで、毫も實際上的會合を爲さぬ無數の機關があるといふ事である。總て此等は、以て青年學生が單に會合てふ事に對し、甚しきは單に社會的の結合を空想するのみでも、尙強烈なる快情を感ずるものなることを、證するに足りる。

以上は主として米國における調査に據つたものであるが、上述せるが如く、共和國といふ同國特種の國情から兒童及青年期間に此の種團體組織性の見はれを顯著ならしむるといふ理由もあらう。故に前表の數字を以て直ちに我國の兒童の上にも擬して彼此れと云爲することの出來ぬは言ふ迄もない。さりながら余輩の在來の經驗によれば、假令團體組織性の強度や内容上に種々の差違ありとは言へ、其の萌芽は既に尋常四年頃の兒童にも認むることが出來、漸次其の種類も増加し内容も多様となり、組織の體制も明瞭を加へて來るが如くである。尋常五年生頃から高等科の兒童位になれば、ボンヤリせる觀察者の眼にも、猶且時につれて、忽然其の片影を見は

し、來りて驚異の思をなさしめる事が少なからぬ。とはいへ、斯様な連盟加入者相互の間には、不成文ながらも一種の規約申合様の慣習律があつて、暗黙の間各團員を或る程度迄拘束し、概して團員以外のものには與り知らしめまいと力むるから、時には同輩の兒童でも、それと氣附かぬ事すらある。況んや内面を洞察するの明なき教師などには、全然斯かる痕跡ある事すら知る事なしに、幾春秋を經過するが普通である。吾人の知る範圍に於ては、高等科兒童に見はるる團體組織中最も多きを占むるは、競技に屬するもので、藝術的連盟、道義的の連盟等これに次ぎ、秘密の組合も亦決して少なしとはせぬ。これ等は地方により、又境遇事情によりて必ずしも同一ではあるまいと思ふから、今後更に豫定せる條件下に斯の方面の實際の調査に歩を進めたい考である。

更に我國の青年學生の状態を通覽するに、専門學校以上のものにおいて、は、自發的に各種の團體を組成し、彼等は其の一員として或る地位を占め、上には自己の優者あり、下には自己の劣者ありと感知する。然るに中學程度

中等學校以上の青年に見はる團體組織性

の生徒にありては、自發的團體を組成するもあれど多くは成人たる教師の監督若しくは計畫の下に成れる既成の合理的の團體に加入するが普通である。通常學校には、校友會乃至學友會なる組織があつて、或は體力の練習を目的とするもの、或は辯舌の練習を目的とするもの、或は技能の習熟を目的とするもの、或は文學會、國家的、公共的の會合、科學的の會合、研究を目的とする會合等の設けあるは、青年本具の團體組織的傾向に適合し、且つこれを助長せしむる所以で、甚だ有意義の施設と言はねばならぬ。蓋し青年の争鬪を好む傾向は、討論會等に於て發散の途を講じ、群衆中傑出の地位を占め、且つ勢力を振ふを好む傾向は、各種の競技に漏洩の途を開き、人生の百般の狀態に對し鋭敏な同情と巧妙な模擬とに趣味を有する傾向は、學藝會に於て發達せしめるが故である。斯くて優良の學風にありては、斯の種團體組織的傾向の諸條件に應ずる施設があるから、以て普通の教室における授業などに見ることの出來ぬ活教育が行はれる。これに反して、如上の條件の一つをも具備せぬか、又は具備して居ても、材料が劣惡なる場合にありては

教育上何等意義なきものに了る。

又學級會、學年會の如きも、體力競技や、文學的、社交的の諸設備などと同様、粗暴なる本能を轉回せしめ、社交性に無害にして健全なる爆發口を與ふるものとして、教育上賢明なる措置と言はねばならぬ。思ふに學級諸會は各々從屬關係をなし、相互に親愛する結果同情の念を養ひ、又各自の性格を判斷し、絶えず個人の評價を訂正し、人生に關する知識を養ふが上に至大の效果がある。所謂同級生の語があらゆる隔壁を撤して終生の親友たるを示唆するが如き感あらしむるは何人も經驗する所の如くである。

三 教育的考察

團體組織性の所産たる各種の俱樂部、會合の利弊如何については教育上深く考察する所がなければならぬ。これ等に關するスタンレー・ホール氏の意見は大に余輩の傾聴に價するものである。其の言ふ所によれば、此の種の會合にありては人情に深く根ざせる自由放任の欲求が多少實現せら

團體組織性
の長所

れるもので、殊に青年期に於ては甚だ盛んなるものがある。言はゞ此の種の團體會合は無邪氣なる亂暴、飲食放縱等の野性をして比較的社會に害毒を及ぼすこと少なきやうに發散せしむる一種の安全弁の如きものとも見らるべく、斯くて洩出を終りたる後は反動として柔順と服従とを自然に且つ容易ならしむるの利がある。此種の機關にありては自然的親和の本能により會員を選択しこれを訓練し、且つ餘りに他と隔てる心を有するは之を淘汰し去らうとするもので、従つて團體の組織、制度、規則、討議、選擇、入會其の他の儀式、新入生の故參者に對する特殊の關係等を生じ、新入者をして従前の自主的、孤立的の自我を脱却して一層大なる社會的存在に入らしめて團體的の訓練を受けしめる。

若し又十代後期の少年によりて自發的に組織せられたる團體にして何等か内部的の事業を有すとせば、そは直接に宗教又は公益に關するものではなくて、多くは演劇、又は音樂に關するものか、これに次ぐは討論又は演説を練磨し、團體的名譽を顯揚する方法を講ずるが常である。此等の團體に

於て彼等は自ら一の會員として他に對して所屬團體を代表するものなるを自覺しつゝ會員相互間に強烈なる友情を交換する時には其の學生を利すること遙かに學校の修身教授などの企て及ぶべからざるものがある。殊に青年期に至れば個性發展の時代であるから如何なる組織の團體も唯一のみでは未だ以て青年の個性を多様に發展せしむることが不可能である。従つて青年は出來うる限り多數の團體俱樂部と關係を有するが常である。團體の一員として他と共にあり他と共に思ひ感じ行ふことを快樂とするはたしかに極端なる早熟と極端なる停滯とを免れて正當に發達の階級を経過せしむるが上に有效である。此の如く消極的には野性的本能洩出の安全辨として意義あると共に積極的には兒童の個性の發達を多方面にし、責務感を生じ、個人的の孤立状態を脱却せしむる等の利點を列擧することが出来る。

併し又團體組織的傾向の惡しき側面を眺むれば、とかく非平等的排他的黨同閥異的で徒らに同類間の親愛を厚うするのみに汲々として異類の人

團體組織性
の短所

士に對する理解一般に對する同情を缺如し、動もすれば人生をして枯淡にして希望なきに至らしめる虞れがある。殊に天下の共通の財貨とも見るべき真理の如きも自己の所屬團體にのみ私し、他をして與り知らしめず、以て團體間の私利私慾を謀るに資せんとする陋見に陥ることが少なからぬ。かくて所謂黨人根性を馴致して自家の醜を知らず、一部面に囚はれて全局大體を見るの明と誠度とを缺くに至るは通弊である。又青年期にありては餘りに高尚偉大の目的を有する團體組織に同情を集注する所から、却つて自己身邊の日常卑近の實務を等閑にする嫌がある。即ち特に大にして遠きものに對しては熱情を注ぐも、日常卑近の社會的本務に對しては、却つて不注意となることがある。

其の他偏に團體の氣風規律、及利害等を過重して、個人の自由、判斷力及良心を麻痺せしむることあるも、亦警戒を加ふべき視點である。更にとかく秘密を主とする傾向ある團體にありては、各學生間相互の一致和合を害し延びて一般學生の愛校の念を破壊し、平和を紊す禍源となることもあるか

ら訓練上此の種の團體の性質内容に於て細心の注意を拂うてなければ、蟻の一穴より不測の慘禍を招く事態を出来せぬともかぎらない。要言すれば部分的、一面的の思想感情を偏重して大同の識度を缺き、卑近の實行を怠り、個人の自由性の發露を阻害し、平和を攪亂するが如きは其の反面として注意すべき諸點である。

因みに兒童青年の通有性とも見るべき團體組織的傾向に相反する孤獨性に言及して本章を終らうと思ふ。孤獨を樂しむ性癖を有する著名の人士五百人につき、スモール氏の調査したる所によれば、青年期に孤獨性を得るに至りたる事が少なからぬといふ。此の年齢に於て社交を嫌惡する理由としては、或は賞讃を博せんとして出来ず、或は虛榮心を傷づけられ、或は自己の力を過大に信じ、或は又或る高尚なる理想を懷き、かくて社會に於ては個人の絶對的自由の到底望むべからざることを次第に覺悟するに因る等は、其の主なるものであるらしい。斯かる孤立的境遇も、性格の成熟には、内面的に深さを加ふる機會を與ふるものとして、多少必要なしとはせぬが、

孤獨を樂しむ性癖

併し餘り多く、孤獨に耽る時は、性格を萎縮せしめ、社交性の癱痺を來す虞がある。故に兒童青年教養の任に當るものは、常に休息と勤勞との平衡をうるに留意し、純雅なる同情と適當なる交友とは、彼等の精神生活を健全にし、社會的關係を正常ならしむる必要條件であることに思を致すべきである。

第十二章 青年の罪過

一 人性に宿る犯罪的傾向

罪惡は精神上の疾病ともいふべきものである。健態と病態との境界線が分明でないが如く、又普通の精神状態と變態の心理との間に明瞭の線を劃しがたいが如く、矢張り普通人と犯罪者との分界線は判然たるをえぬ。蓋し或意味から言へば人性には通じて犯罪的の傾向があるとも言ひうる。例せば品性高潔にして修養を積める人ですら、知人等の破格の榮進を見ては内心何となく安からぬものがあり、又前途好望名聲大に揚らんとする親友の死を聞いては、大に悲痛を感じると同時に一種言ひ知れぬ淺ましい快感を覺えるのは、人性に宿る野獸性の然らしむる所であらう。

犯罪學に於ける第一人者たるロンブローゾによれば、通常の小兒は、往々残酷、虚言、情及、窃盜等の諸段階を通過するものであるが、若し此等良心と醜怪なる不具者の體相を生ずると一般事であるといつて居る。又ラブルエール氏の如きは小兒の有らゆる缺陷を指摘して、

小兒と罪惡の起源とは常に併行するものである。即ち小兒は倨傲であり、怒り易く、嫉妬心深く、遊惰であり、虚言を好み、放縱である。是等は皆犯罪を構成するに重要なものではあるまいか。然らば彼等程犯罪的傾向を有するものはあるまい。

と。世人動もすれば罪惡を以て青年期以上の事として居るが、必しも左様ではない。たしかに青年期は心身の發育平均状態を失し、意志の禁止作用弱く、誘惑に陥らうとする傾向あるは否み難い事實である。さりながら幼兒期、少年期の所爲を見るに、上述せるが如く、罪惡を以て目すべきものが少くない。或意味から言へば、彼等は罪惡の塊とも見るべく、言ふ事爲す事皆罪過に満ちて居るに拘はらず、之を無邪氣であり、天真爛漫であるとして看

諒恕すべき
青年者の罪
過

過し氣附かぬのである。若し大人として小兒の如く欲する時に取り與ふべき時に與へず爲すべき事を爲さなかつたならば果して如何。或は不道徳とし、或は卑吝とし、或は窃盜として世人の指彈を受けるは必定である。即ち彼れの儘に生ひ立つたならば天晴れの**大罪人**、**大惡人**である。然るに同一行爲をも一方に對しては頑是なしと恕し、他方に對しては罪惡として拒斥する。幼少時には自己の欲する所の殆んど全部が容るゝ所となつて放縱自由な天地に濶歩して居たものを青年期になれば俄に別乾坤に入りたるが如く事物に自他の別いかめしく社會に諸種の禮法秩序喧ましくなる。別言すれば從來専ら自我中心であつた少時の生活は此頃からして次第に他人の爲に義務を行はねばならぬ生活に移り自我を抑壓するの餘儀なきに至る。是に於てか幼時の習慣から餘りに自己に遠かりつゝある世の冷やかな態度と一變せるが如き嚴しき社會の制裁に堪へず殆んど無意識の間に罪を犯すものはない。これ彼等の心事より見れば無理ならぬ事て一概に大人の尺度を以て貶黜すべきではなく寧ろ大に諒恕

し省察すべき點である。

併し概言すれば品行は十一歳頃最も良く、十二三歳と成長するにつれて漸く惡傾向が見はれ、十四十五歳に至りて最も惡しく、爾後少しづつ改善せられて、十七十八歳になれば漸次良好の度を加へるといふ。米國の感化院で男兒一萬四千八百四十六人、女兒八千八百一十一人といふ多數者につき收容當時の年齒を調査したるものを見るに、犯罪の最も多き年齢は男兒にありては十四五歳、女兒にありては十六歳である。されば十二三歳頃から十四五歳の處は指導上最も周到なる注意と充分なる警戒とを要する時期である。

さりながら、十七八歳と雖も不幸にして前期に培養せられた惡傾向、惡習慣が依然繼續せられる場合多く、殊に遺傳境遇等の助力さへ之に加はりて益々邪惡の道に深入りせしめる形跡のあるは返す／＼も恐るべき事である。即ち此時代には喫煙、飲酒を始め、放蕩、三昧、鬪爭、浪費等から進んで窃盜、殺人、放火等の大罪をも敢へてするやうになる。

ホルム氏が現代に於ける犯罪的の傾向について述べて居る中に「文明國における犯罪統計は二箇の悲しむべく、且つ意義深い事實を示して居る。其の一は十二歳から十四歳迄の年齢に於てあらゆる種類の犯罪が殖え、しかも増加が數年間繼續する事と、其の二は青年犯罪者の數が到る處に増加し且つ犯罪が益々早熟となる傾向あることこれである」と言つて居る。之を我國の現状につきて對照せんに、司法省發行の監獄統計年報により、少年囚と未成年囚と成年囚との數を見るに

| 年次 | 十八歳未満 | 二十歳未満 | 二十歳以上 | 合計 | 總人員ニ對スル百分比 | |
|-------|-------|-------|--------|--------|------------|-------|
| | | | | | 十八歳未満 | 二十歳未満 |
| 大正三年末 | 一、五八五 | 二、〇〇四 | 四四、八三六 | 四八、四二五 | 三、三 | 四、一 |
| 大正四年末 | 一、六五二 | 二、〇〇七 | 四四、〇五四 | 四七、七一三 | 三五 | 四、二 |
| 大正五年末 | 一、六九六 | 二、二〇〇 | 四二、五七二 | 四六、四七二 | 三、六 | 四、七 |

即ち最近三箇年の趨勢は成年囚の減少するに拘はらず、青年囚及未成年囚が僅少なながらも増加の傾向あるは否定すべからざる事實で、ホルム氏の

立言を裏書するの觀あるは、誠に悲しむべく、悼むべき現象と言はねばならぬ。

二 青年犯罪者の種類と原因

今我國に於ける成年の男子受刑者十箇年平均の罪名を見るに、窃盜が最大多數で賭博及富籤、詐僞及恐喝、横領之に次ぎ、文書印象偽造、贓物殺人、放火、強盜の順位であるが、青年の犯罪は多少之と趣を異にし、百分比例窃盜が八十、横領放火各五、詐僞恐喝四、強盜三、文書偽造一、といふ割合で、成年の第二位に立つ賭博は少なく、之に反して放火、横領、強盜が比較的多いのは注目すべき事實である。此等の罪名を仔細に考察すれば、青年期における諸器官の發達に伴つて起る疾病に似たるものがあり、諸種の本能の盛んに勃發するがために制し切れず、これが外部に見はれることを語つて居る。即ち窃盜、横領等は浮浪性、懶惰、虛榮、娛樂、遊蕩等の惡傾向が新に勢力をうることを示し、詐僞、恐喝、文書偽造、放火等は青年期における體力、知力、感情生活等の激變

に負ふ所が多いのである。今左に小田原分監の統計書により大正三年から大正六年に至る新入監者の罪名を窺へば左の如くである。

| 罪名 | 年 | | | | | | | | | | 計 |
|--------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|-----|---|
| | 三以下 | 同六月 | 同一年 | 同二年 | 同三年 | 同五年 | 同十年 | 同十五年 | 同十五年 | 以上 | |
| 窃盗 | 九 | 七三 | 二四八 | 一八〇 | 三四 | 八一 | 七 | 一 | 一 | 五四五 | |
| 強盗 | 二 | 七 | 四 | 一 | 三 | 八 | 七 | 一 | 一 | 二三 | |
| 詐欺及恐喝 | 二 | 七 | 一〇 | 一 | 二 | 一 | 一 | 一 | 一 | 三〇 | |
| 横領 | 一 | 八 | 二〇 | 五 | 二 | 一 | 一 | 一 | 一 | 三五 | |
| 文書偽造 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 七 | |
| 強姦 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | |
| 傷害 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | |
| 殺人 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | |
| 公務執行妨害 | 一 | 二 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 三 | |
| 放火 | 一 | 二 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 三 | |
| 其他 | 一 | 二 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 四 | |
| 其發物取 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | |
| 合計 | 一三 | 九三 | 二八八 | 一九九 | 五三 | 二〇 | 一五 | 一 | 一 | 六八二 | |

内部的原因

青年をして上述せるが如き犯罪に導く諸原因は果して何れにあるか。其の罪は社會にあるか、教育にあるか、生みの親にあるか、將た本人自身にあるか、先天的か、後天的か、仔細に吟味し來れば、色々の要素が相錯綜して犯罪を構成するに至らしめた事が分る。今此等を綜括して犯罪の原因を内部的原因と外部的原因とに二大別し、外部的原因は更に之を先天的事情と後天的事情との二者に小別し、以下各項につき敘説しよう。

内部的原因とは、青年をして犯罪的行為に出でしめた優勢動機を指すもので、就中主なるものを擧ぐれば、懶惰、浮浪、浪費、喰虚、榮懷、鄉病、激情、性慾、射倖心、虚言、意志薄弱等がある。今試みに上表における青年犯罪中、最も多きを占める窃盗と放火との二罪に就き、これが心理的要素を考察すれば、明白である。即ち窃盗は蒐集本能、虚榮心、懶惰、飲食の慾、性慾、衝動、遊戯本能、虚言、内氣等に基くものであり、放火は懷郷病、復讐、好奇心、性慾、衝動、破壊衝動、好火癖等に基くものである。故に以下斯の種犯罪を構成せしむる主要なる心理的要素を摘出して解説を加へて置く。

懶惰、氣力眠るが如く、些の注意の緊張せざるもの事に當つて遅緩なるもの等の種々あれど、要するに身體上の勞働を避けるものと、腦を使用して思考することを厭ふものとの二者がある。有名な社會學者ラツチエンホーエル氏は「人類は元來勤勞忌避性を有す」と喝破して居る。其の言如何にも矯激に失する如くであるが、實はたしかに人性一面の眞理を語つて居る。夫の社會的に優越な地位を獲得せんとして努力奮闘するのと安逸遊惰無爲にして一生を送らうとする性情とは一見甚だ相反矛盾するが如くに似て、しかも其の間一點の靈犀相通するものがある。蓋し優越なる地位をえんとする反面には大に遊惰性を満足せしめようとする間隙を有して居るからである。犯罪の生れる原因中の原因とも見るべきはこの懶惰で多數の犯罪者は此の不健全な性情の産物であるといつて過言でない。懶惰は總ての犯罪の父なりとの言はこれを語つて餘りがある。

しかも遊惰性の最も發露して勢威を逞しうする時期は、まさに青年期にあるを知らば指導者はよく、警戒を加ふべきである。今迄は何の考も

なく遊びたきが儘に遊んで居たのが、今は自己の自由意志で結果が斯くあらんと豫想しながら、殊更ら横着して學校を缺席し義務を免れ、事に托して負擔を避け、蔭に於ては得たりとして遊惰性を満足せしめて居る。誘惑これに乗じて益々光燐を添へ、遂に一生を誤るに至らしめる。

浪費、普通の青年は金錢の慾未だ萌さず、従つて直接需用の衣食住の外は殆んど何等顧慮する所なく所得の全部を舉げて之を浪費し前途などには毫も思を致すことなく、かくて父母の扶養は固より祖父母の事などは全く眼中にないものがある。金錢に關して淡泊なる事は一面青年の潔白を表示するものではあるが、さりとて此期に於て放縱不謹慎浪費の惡習慣を養はんか、他日貧困者として他人の救濟下に生活するをえざるに至るべく、之を他の犯罪に比すれば氣力と活力とに於ては劣るも罪惡の性質は一層固定的で惡むべき傾向を有するものと言はねばならぬ。

浮浪性、此の本能は青年期に至りて必ず多少は見はれるものである。夫の田舎育ちの青年等は都會の表面の如何にも美はしく文化の花やかさ

のみが目につき、其の裏面の競争の激しい事やら、暗黒面の恐るべきことやらを思はず、唯都會に出さへすれば思ふがまゝ、金は取るに任せるといふ風に空中樓閣を夢み、かくて平穩の田舎生活に慊らず、飄然盲目的に家出をする事がある。さうでなくとも青年者には戶外は極めて面白きものと感ぜられ、或は自然の森林原野を渴望し、或は一層粗樸な生活に於ける絶對自由の状態を描き、かくて一定の居所を定めず、何處となく彷徨し、格外な理由もなきに狹隘な家庭裡にあるを嫌ひ、自由の天地に逍遙しようとする。夫の男子、四方の志といふ語などは、かゝる心理状態を見はしたものである。浮浪本能に關し、造詣深きクライン氏によれば、一切の舊き印象を棄てて戶外を好み、戶外に出でんとする欲望、旅行及乗馬を好ましく思はしめる運動觀念の強大特に廣き世界に出て他人と力を角し、自己が世界に於て如何なる地位を占むるかを確かめ、且つ此世にて何處かに潜伏しあるべき自己の好運を探さんこと、これ移住の季節に籠中の鳥が外に出でんことを思はしめる風な浮浪本能の強大の動機である」と言つて居る。斯く家庭を離れ一定

の職業なく、一定の後見者なく、社會に浪浪生活をなすものは何時かは犯罪行爲に陥り易い危険性を有し、事實此種の浮浪兒から多くの犯罪者を出して居る。其の他養育者なきもの、家庭の虐待を受けたもの、一時の叱責によるもの、誘拐によりしもの等の浮浪者もないではない。

娯樂、數多くの娯樂中で最も青年の心を強くひきつけて不知不識の間犯罪の深みに陥らしめるものは活動寫真といふ觀覽物と、買喰といふ特種の飲食慾であらう。

活動寫真に出入する習性を、えたる青年は、其の映畫の換る度に、觀覽しなければやまぬやうになる。これ變化を好み、單調を嫌ふ青年には無上の刺激で、彼等の好奇心に投じ易く、又官能發揮の時代には鮮活な映畫、強烈な光線色彩、活辯の能辯には自由の感と相待ちて、彼等の甘心を買ふに適し、加ふるに映畫の内容は巧みに青年の人氣を唆る風な、戀愛譚、冒險談等を以て充されるからである。而して斯る場所には青春の男女が席を同じうせざる迄にも肩々相摩し、時には手裡相觸れ、脂粉の氣鼻をつき、夜更くるにつ

れ性慾をそそる機会が多いのである。又斯かる場所へ度重つて出入する間に飲食店の趣味即ち鮎おでん一品料理等の立喰等の悪癖がついてくるから、自然小使錢の濫費となり遂に窮して横領、詐偽、窃盜等の不正手段を取るやうになる。加之夜間興行物における悪影響は、劣悪な映畫演技、活辯乃至觀衆の野卑無責任な言動から挑發と暗示とを受け、頭腦の平調を破り興奮混亂の状態に陥らしめる。これ觀覽物が罪狀動機の首位を占める所以であらう。

買喰癖、これは自分の家で食ふとか、兩親の手から與へられたものを食ふとかでは満足出來ず、同一物でも家を離れた外部に於て買ひ喰ふ所に無限の快味を感ずるのである。蓋し分量は少くとも品質は悪しくとも、坊間で買つて食はねば物足らない感を起すのが此の習癖の特徴である。これが誘因となつて、金錢を浪費する習性を生じ、進んでは蕎麥屋へ入り、天麩羅屋を覗き、飲酒店の味を覚え、追々墮落の淵に沈む徑路を取るが普通であらう。

虚榮、空しきを有るが如く、貧しきを富めるが如く、醜なるを美なるが如く、弱きを強きが如くに粧はんとするは、何人にも免れ難き人情の弱點である。特に青年期は化粧心の強い時代であるから、心身共に自己を修飾し、より以上に見せかけ、他をして如何にも自己の心事行動が立派であることを賞讃せしめ、とかく鬼面人を感さうとの野心滿々たるものがある。斯くて僅少の手當日當に衣食する職工雇人の如き者も、正月の晴衣を調へんがため、帽子を買はんがため、懐中時計を下げんがため、分外の金錢を消費し、窮する所、主人や朋友の物品を横領して一時の急を脱れ、遂に犯罪行為に陥るのである。

更に耻づべき事を耻と思はず、耻づべからざる事を耻とする事實が青年者に多いといふのも亦虚榮心の發露と見るべきものであらう。例へば、飲酒喫烟したり花柳の巷に出入したりする友人から、貴様は意氣地がないなどと云はるれば、友人の手前に對し耻かしく、自分として男が立たぬなどに入らぬ所に力瘤を入れ、不良行為をする類である。所謂「知らいでも耻には

ならぬ河豚の味の真味が分らぬからである。

懐郷病、懐かしい郷里の空を望みては旅窓の下、矢も楯も溜らず、一種の沈鬱状態に陥り、特種な心身の兆候を呈して来る。年長者にもあるが最も青年に多い。病源は土地、季節、距離、生活状態、社會關係などの變化から起るもので、此の結果、主家に放火して歸らんとするが如き行爲に出づるものもなからぬ。次表の放火を見れば懐郷病に起因するもの多きことが知られる。

虚言、懶惰と相待つて人を罪惡に誘ふ一大惡徳はこの虚言である。虚言には想像性、黨同性、激情性、自我性、義勇性等の種々あつて必しも同様でないが、青年に多いのは自我性、激情性、義勇性の虚偽である。人を欺くに足る辯力も生じ、知能も相應發達して来るから、好んで此等の新なる武器を濫用し、習性となり、邪徑に履み入つて歸るを忘れるに至るのである。猶虚言の詳細については拙著「兒童の精神生活と教育」第七章を參照せられたい。左に小田原分監の調査に係る青年者犯罪の主要なる原因と犯罪との關

係表を掲げて置く。就いて見れば上述せる所を最も雄辯に語るものであることを首肯せざるをえぬであらう。

| 犯 | 由 | 窃盜 | 強盜 | 詐欺及恐喝 | 横領 | 文書有價證券偽造 | 猥褻 | 傷害 | 殺人 | 公務執行妨害 | 放火 | 其他 | 爆発物取締罰則 | 計 |
|---------------|----|----|----|-------|----|----------|----|----|----|--------|----|----|---------|----|
| 無職失職又は収入不足 | 一〇 | 四 | 一 | 八 | 四 | | | | | | 一 | | | 一八 |
| 保護者の給與不足 | 五 | | | | | | | | | | | | | 六 |
| 學資金に供す | 四 | | | | | | | | | | | | | 五 |
| 旅費に供す | 四 | | | | | | | | | | | | | 五 |
| 一家の貧困を救済せんとす | 一 | | | | | | | | | | | | | 三 |
| 株式賣買の資金に供す | 一 | | | | | | | | | | | | | 二 |
| 賭博の資金に供す | 二 | | | | | | | | | | | | | 三 |
| 衣類の新調費に供す | 七 | | | | | | | | | | | | | 八 |
| 商業の資本に供す | 一 | | | | | | | | | | | | | 二 |
| 自轉車の乗用費に供す | 三 | | | | | | | | | | | | | 三 |
| 物品蒐集癖 | 二 | | | | | | | | | | | | | 二 |
| 玩具購求の費用に充てんため | 一 | | | | | | | | | | | | | 一 |
| 射倖 | 一 | | | | | | | | | | | | | 一 |

第十二章 青年の罪過 二 青年犯罪者の種類と原因

| 間食活動寫眞觀覽の費用に供す | 飲食の費用に供す | 遊蕩費に供す | 怠惰にして常習性を帯ぶ | 悪友の誘惑 | 新聞記事の模倣 | 活動寫眞映畫の模倣 | 主人の金銭を遺失したるを補充せんため | 年長者の教唆 | 母及自己の危害を防衛せんため | 群衆心理に驅られ | 密漁中逮捕を免れんがため | 望郷の念に驅られ | 又は主人より暇を取らんがため | 火災の混雑を喜び | 窃盗をなさん | め犯罪を蔽はんがため |
|----------------|----------|--------|-------------|-------|---------|-----------|--------------------|--------|----------------|----------|--------------|----------|----------------|----------|--------|------------|
| 一六〇 | 九 | 九五 | 七九 | 二五 | | | | | | | | | | | | |
| 一 | 一 | 二 | 一 | 三 | 五 | | | | | | | | | | | |
| 三 | 七 | 四 | 二 | 三 | 二 | | | | | | | | | | | |
| 九 | 一〇 | 一 | 四 | 一 | | | | | | | | | | | | |
| 三 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 二 | 二 | 四 | 七 | | | 一 | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 二 | 二 | 四 | 八 | 一 | 二 | 一 | 一 | 一 | 一 | 六 | 二 | 三 | 二 | 三 | 八 | 九 |
| 一八二 | 一 | 二 | 二 | 二 | | | | | | | | | | | | |

先天的事情

| 合 計 | 叱責を憤り | 虐待されたるを憤り | 解雇せられたるを憤り | 毆打せられたるを憤り | 恨 怨 | | 給金を支拂はざるを憤り | 冒険探險小説及び活動寫眞の映畫より得たる模倣 | 不詳(犯罪否認) |
|------|-------|-----------|------------|------------|---------------|---------|-------------|------------------------|----------|
| | | | | | 窃盜の嫌疑を受けたるを憤り | 受けたるを憤り | | | |
| 五四五 | | | | | | | | | |
| 二三 | | | | | | | | | |
| 三〇 | | | | | | | | | |
| 三五 | | | | | | | | | |
| 七 | | | | | | | | | |
| 一 | | | | | | | | | |
| 一 | | | | | | | | | |
| 一 | | | | | | | | | |
| 三 | | | | | | | | | |
| 三一 | | | | | | | | | |
| 四 | | | | | | | | | |
| 一六八二 | | | | | | | | | |
| 二 | 二 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 四 |

以上は犯罪の直接原因たる優勢動機について解説したのであるが、更に外部的原因に説き及ばうと思ふ。外部的原因は之を先天的事情と後天的事情との二つに分けて考察するが便利である。茲にいふ先天的事情とは出生以前に存する事情に迄溯るもので、誰にも必ずあるとは限らないが、其の主なるものに左の三者がある。

病的遺傳、血統上の病的遺傳で、両親が神経質であるとか母が激怒し易いとか、残忍酷薄とか、脳膜炎とか、白痴低能とかの人々の子孫には犯罪者が多い。獨逸の監獄署長ジバルト氏が四千人の囚徒につき精細な研究を遂げたる結果によれば、矢張り三分の一は此の病的遺傳があつたといふ事である。我小田原分監における大正四年より六年に至る三箇年の青年入監者五百二十八人中百九十三人即ち約三割六分強は精神状態に缺陷のあるもので、ジバルト氏の調査と期せずして符合を合したる事も亦一奇と言はねばならぬ。

両親の飲酒、両親の飲酒が精神病者にも、不良少青年にも、著しい関係のある事は諸學者の等しく認むる所で、事新らしく言ふ必要もあるまい。殊に大酒した頃に出來た子供は一層此の事實を語る場合が多い。伊太利のマローロ氏によれば犯罪者の四十一パーセントは飲酒家であつたといふ。父母の年齢、マローロ氏によれば、父の年齢二十五歳以下で生れた兒童には精神病者及竊盜者多いが、色情に關する者が少ない。父の年齢二十六

歳から四十歳に至る間に擧げたる兒童には色情に關する犯罪が多い。四十一歳以上の兒童には犯罪者非常に多く、就中著しきは殺人犯、脅迫罪である。又父母の年齢の差違の如きも、滿更ら犯罪に關係のないものでもないらしい。父が老年で母若き時は父の死後母の手一つに育てられるといふ可能性が多く、従つて不良少青年となる機會がより多く與へられるといふ類である。此等は固より何處迄信頼すべきものか大に疑はしきものであり、又彼此民族性やら國情風習を異にするものでもあるが、何かの參考にはならうと思はれる。

後天的事情

次に後天的事情即ち生後の環境教育の悪しき結果犯罪に陥るものについて考ふるに、左記の數者を擧げることが出来る。

家庭、公生より私生に犯罪の少青年の多いことは東京家庭學校の生徒の約百分の六十迄が下女か妾腹の子である事實にも知られる。又父母共に健在であるか、父母の一方がないとか、父母共にあらざるか、繼母か、繼父か、又父母何れも健在でも家庭に風波が絶えぬとか、複雑な事情が潜むとかは

何れも子女の犯罪と至大の關係を有すること勿論である。小田原分監の統計に見るも、犯罪青年には、両親の不揃なものが約四分の四を占めて居るのである。とにかく、青年期の正當なる自重の念又は自己の權威體面を保持しようとする念を減退せしめるやうな惡家庭、惡境遇であつたならば、罪惡を豫防する最も主要なる勢力を驅逐する所以で、不良少青年の此等の家庭から輩出するのは當然歸結する所に歸結したといふ迄のものであると言はねばならぬ。

教育の有無、教育の普及の結果、犯罪は減少すべき筈であるが、事實は必ずしもさうでない様である。夫の英京倫敦では貧民學校の設立以來、犯罪者の數の増加したるは隠れもない事實である。即ち此處では小盜、醉漢、摸等は減じたれど、文書偽造、詐偽、大盜等性質の重大で念の入つた新犯罪が増加したといふ。之を我統計年鑑に徴するも、普通教育あるものの受刑者は年々増加し、普通教育を受けざるものの受刑者は連年減じて居る。即ち明治四十二年には普通教育あるものの男は百分の十六、五パーセント、女は

三二九パーセントであつたものが、大正五年には男子は五十五、三五パーセント、即ち過半数、女子は二十三、四一パーセントに激増して居る。日進月歩の勢で教育の普及する結果、斯る現象を招來するのは當然で怪しむに足らぬ所ではあるが、教育者當事者は又深く省察すべき問題である。思ふに、これ教育其のもの、罪ではなくて、要は教育の徹底を缺く、致す所であらう。單に斷片的の知識をのみ授けて、能事足りりとするやうな教育では到底人を根柢から動かすことの出来ぬといふ活教訓ではあるまいか。とはいへ、教育の程度、少きもの程、犯罪を防止する力が微弱であることは統計上争ふべからざる事實であるとも附言して置く。

貧富、犯罪者は常識の考へる如く、明かに貧者に多い。小田原分監に於ける六百八十二名について調査したるを見るに、有資産者七名、稍有資産者二十三名、無資産者三百五十三名、赤貧二百九十九名であつたといふ。これを見ても如何に生活難といふ切實な問題が容赦もなくヒシ／＼と少青年者の生活に迫り來つて其の無垢の性情を傷けつゝあるかと察せられる。

罪、青年の體格が虚弱で、營養不良といふ特質を有するのは遺傳にもよるが、亦此の間の消息を傳ふるものと解せられる。此等を見るにつけても、青年の保護といふ事は焦眉を告げる社會上の一大問題として、職者の攻究深慮に價するは勿論である。

住所、都會は田舎よりも誘惑の機會多く、従つて犯罪に陥る可能性の大きなは言ふ迄もない。蓋し都會地は隣保の制裁力も乏しく、犯罪の發見もし難く、人を陥れんとする惡漢思ひも設けぬ陷阱が多いからである。犯罪青年の大部分が都市に發生するのは此のためである。其の他亂雜汚穢にして殆んど無警察に近き狹巷に住するが如き、多人數が狭き一間に起居し寢食を共にするが如きは、何れも人の性情を健全に發達せしむる所以ではない。即ちかゝる惡境遇にありては、何よりも先づ青年期の羞耻の念を破壊し去るのである。此の羞耻の念にして、春機發動期に於て、正常の發達を妨げられたならば、非惡に對する最も有力なる保障を失ふものと言ふべきである。

交友、二兩方で連れが悪いとちやぢ言ひ實に然りて、自分の子供は良けれど、とは子馬鹿の兩親の唱ふる常套語であるが、同氣相求むる習ひ交友の如何は己の子供の善惡を寫す鏡であると思へば間違はない。或意味に於て意志の制止作用乏しく、感染力強き青年期にありては、交友の良否が將來の運命を左右するに足る決定的の力を有するものと言つても必ずしも不當の言ではない。見よ、犯罪青年者には一として良友若しくは益友と稱すべきものなく、却つて常に惡友の魔手誘惑にかゝつて知らず識らず罪惡の深みに陥れる事實の告白を。

夫の世に謂ふ不良少年は、不良行爲をなし、又は不良行爲をなすの虞れある者に該當し、従つて犯罪の前程であつて、道德的抵抗力の薄弱なる状態をいふ。さりとして不良少年期心身の状態は正常の少青年と質的に全然異なつて居るといふ譯ではなく、其差は單に量的關係にありと言はねばならぬ。詳言すれば、モリソン氏の言へるが如く、不良少青年の精神状態の異常なる點は、知識感情意志の孰れか其の一に於て不完全なるものである。著しき

は此三者を併有し、意志薄弱、感情鈍麻に加ふるに知力の發達の甚だ未だしきもある。尙彼等の中には知能極めて優秀なるものあれど、感情の點に於て著しく缺如せるが頗る多い。例へば、恐怖心、羞耻心、名譽感情が著しく缺損し、高慢自負等の自己感情強く、強情執拗にして嫉妬猜忌、害心、惡意の強烈なものが多いのである。不良少青年は之れを法律的地見地より左記の二種に區別する事が出来る。

一、犯罪ノ虞レアル者若クハ既ニ罪ヲ犯シテ裁判所ニ於テ年齢ノ爲ニ無罪の宣告ヲ受ケタル者、

二、親權ノ執行者ヨリ入院ヲ出願スル者及親權執行ノ結果トシテ民法ノ規則上懲戒場ニ入ル、ノ決定ヲ受ケタル者、

以上現行感化法に見はれたる第一種は不良行爲に關係ある少青年で、第二種は親權の執行に屬する少青年である。畢竟するに前者は多く家庭なく、若し有りとすも、家庭不始末で四圍の境遇普通の生活を營むに適しない間に人と爲れる少青年であり、彼等は完全なる家庭に成長しながら、家風

に染まず父母の教に従はず、終に親權者をして感化院に入院を出願せしむるに至る少青年である。尙不良少青年の心理的特性に基いて類別すれば、普通窃盜型、懶惰型、浮浪型、放火型、及び残忍憤怒復讐恣意、放縱、強情執拗、害心、惡意等の諸特性より來る亂暴型の五型とする。しかも是れ屢々説述したるが如く、正常の少青年に見はれる心理的狀態の或は誇大せられ、或は鈍麻し、缺損せられて茲に至りしもので、其の差違は量的關係の程度の上に存することゝを牢記せねばならぬ。

次に大正五年末の統計により女性の受刑者を見るに、男子の四萬六千四百七十二人に對し、女子は一千八百八十四人で、二十幾分の一に當るに過ぎぬ。又女子犯罪の多い年齢は二十歳以上三十歳未満の間にある。犯罪の種類も、男性とは稍々趣を異にし、墮胎、殺兒、罪、盜品、受領罪、放火罪の四者が多く、浮浪罪、強盜、毆打罪、文書印章の偽造等の最も少ないのは女性に相應はしい事を語つて居る。犯罪に誘く直接原因としては、虛榮心、意志薄弱、激情、ヒステリー等、で月經時には特に多い。さりながら男性に比すれば、上述せる

が如く二十幾分の一に過ぎぬ。モリソン氏は犯罪の女子に少き理由として、(一)女子は子女を教養する所より男子に比し一層道徳心に富むこと、(二)女子は腕力乏しく體力乏しきこと、(三)犯罪の教唆者煽動者幫助者となるも、敢行の當事者たらぬより之を免れること、(四)社會的の事情上犯罪をなす機會が乏しいこと、(五)女子の性質の臆病なること等を擧げて居る。全部承認しがたい處はあるが、流石に肯綮に當つて居る。

三 青年男女の自殺

最後に青年の自殺について一言する。自殺は老壯青少年何れの時期に多いかと言ふに、五十年以上の老年に多いことを示して居るが最近青年者の自殺の増加する傾向あるは諸學者の共に認むる所で一般に春機發動期と多大の關係があるものと言はれる。我國の統計に於ても十六歳乃至二十歳のは男女とも最も急速なる増加を示して居る。今でこそ社會の健全なるか否かを檢するに足る鋭敏な指針は自殺の統計にありと迄見ら

れて居るが、昔時は之を以て人間特有の權利であるかの如くに思ひ、毫も怪しまなかつたものである。一般に自殺が罪惡であると認められるやうになつたのは實に近代の事である。而して此の犯罪位食物職業氣候年齢性別等に關係の深いものは少ない。

佛蘭西のコール氏は狂者と自殺とは文明の進歩と共に増加すとの結論に達して居るが、これ儘に多くの學者の一致する議論で、文明の反面には斯様な犠牲者を生みつゝあるは悲しむべく悼むべき事實である。然らば青年者自殺の原因は何れにあるかと言ふに、精神錯亂といふが如き病理的のものを除き、余輩は左記の四者を以て其の主なるものと思ふ。

人生上の煩悶、病苦によるか、學業成績が不良であるとか、親族間の不和によるか、人前で耻辱を受けたとか、主家の使に出で金錢を遺失したとか、生計の困難薄命によるか、損失や負債やのためとか、身體の不具をなげくとか、前非を悔いて懺悔の情に堪へぬとか、煩悶の程度に大小輕重の別こそあれ、何れも同性質のものである。

報復的、親や主人から怒らせられ辱かしめられ、一層の事面當てに死んで、思ひ知らせてやれと短慮一徹に死出を急ぐものである。

哲學的、青年期は概して知識經驗の不充分なるが上に空想妄想の盛んなる時代であるから、人生の意義如何、何の爲めに生れ死して何處に行くかなど、一身には到底脊負ひきれぬ程の大問題を引き受けて哲學上の瞑想宗教上の思索に耽り、微力解決の覺束なきを見るや、直に人生を以て不可解なりと獨斷し、煩悶に煩悶を重ねた結果厭世觀を抱き華嚴の瀧に飛び込むが如き舉に出づるのである。

戀愛的、所謂青春の血燃ゆるが如く、動もすれば意馬心猿を狂はす體に漏れず、遮二無二盲目的に慕進するのであるが、其の反動として意中の人を掌中から失ふとか他のために妨害を受けたとかすれば一途に思ひ詰め絶望の極は御定りの如く、自殺となるのである。其の他痴情嫉妬によるもの、離縁を悲しむもの、婚姻を忌むもの、私通妊娠を憂ふるもの等は皆この戀愛關係から起つて居る。

性別から言へば自殺は矢張り男子に多く、諸外國の統計などは三四倍の比になつて居る。我國の大正五年末の統計によれば、自殺者總數は一萬一千七百九十七人で内男子七千二百三十九人、女子四千五百五十八人であるから男子は六割強に當つて居る。斯く女性に自殺者の少なき理由としては、(一)女子は生存競争に於て男子の如くに苦勞せぬ事、(二)自殺を斷行するの勇氣を缺くこと、(三)物事の諦めの善き事、(四)子女家庭に對する義務の考強いこと等を擧げて居るものがある。

然るに余輩は我國における青年期自殺の統計が諸外國におけるものと異なつた點を發見したのである。即ち我國連年の統計は十六歳以上二十歳未満の女子即ち青春期の處女の自殺數は同年輩の青年男子よりも多い現象を示して居ること、是れである。以外の年齢に於ては何れの場合に於ても女子より男子に自殺者が多い。今其の因由を尋ねて見るに、痴情又は嫉妬によるもの、親族の不和によるもの、將來の事を苦慮するもの、私通妊娠を憂ふるもの、離縁を悲しむ等は特に當期女子の自殺を多からしめる要因

をなして居ることが分る。

男子は、縊死し、女子は水に溺れるとは自殺手段における両性の差違を語るものであるが、概言すれば、此の言の通りである。縊死、入水、鐵道、往生毒藥服用等は我國における普通の自殺法で、西洋にありては、短銃によるものが多い。併し近時我國青年間には、死容を壯にせんがためか、華嚴瀑淺間、阿蘇の噴火口などに投ずるものが出来て、新らしい自殺法を加ふるやうになつた。

之を季節の上から眺むれば、或人は太陽の遠近と共に増減するといふ。我國の統計によれば、自殺の最も多いは七月で、五月、八月等之に次ぎ、十二月最も少く、十一月、二月等之に次ぐ有様であるから、大體其の言の通りであると言はねばならぬ。夫の犯罪者の最も少ない夏期が自殺の最も多い月になつて居るなども亦一奇である。

第十三章 處女期の心理

處女期の心理的特質を述べるが爲めには、先づ男女兩性間の身體的精神的の差違を明らかにする必要がある。蓋し世人動もすれば、男性の研究を第一義として、女性の研究を附帶的に取扱はうとする傾向もないではないから、特に此の場合兩性の比較的記述を試み、然る後本題目に入らうと思ふ。

一 男女の身體的差違

概言すれば、身體的方面に於て、女子は男子に比すれば、早熟で、發達が早く、停止するから、身體が甚だ子供に近似して居る事を特徴とせねばならぬ。男子は脚部が長大で、胸廓發達し、其の幅も廣いが、腹部は比較的小さい。斯かる關係上、男子の身體の重心は上部に位置を占め、動搖的であるから、自ら運動をなすに適して居る。女子は之に反し、股部と上脚部とが大であるから、身體の重心は男子より下にあつて、坐りが良く、運動緩漫であるが、靜坐事

を執るに、適して居る。併し變化といふ點から眺むれば、寧ろ男子の優れるものあるは亦此の身體的差違に因るものである。

身體の釣合を見るに、女子は身長に割に頭が長く、頸短く、胸部長くて足と手とが短い。殊に四肢の下半部に於て左様である。これ子供の成長が早く止まつたことを表示するもので、身體各部の比例が子供に近い所以である。實に「子供型」の稱あるに背かぬ。

以上は概説であるが、以下細部に入りて身體の構造乃至機能上の差違を明かにしよう。

身長と體重

身長と體重、男子は出生時に於て既に多少女子に勝れて居るのであるが、成長するにつれ、身長も體重も益々男子の方が大なる發達を遂げて来る。尤も十二三歳から十四五歳の間、女子が一時優れて男子を凌ぐ時期あるは上述せる如くであるが、以後男子は猶成長を續くるに反し、女子は早く成長が止まつて仕舞ふ。

血液と脂肪

身體の營養を司り精力の根源たる血液を見るに、赤血球、白血球共に男性

腦量

に比ぶれば、少なくて比重が低い。男子にありては一立方ミリメートルの血液中赤血球が凡そ五百萬内外であるに、女子のは四百五十萬内外であるといふ。これ女子の血液の稀薄であるといふ事に外ならぬから、營養薄く従つて貧血、頭痛、眩暈等を起し易い理である。但し脂肪は青年期の頃著しく多くなり、女性美を發揮せしめる要素となるのである。

精神作用の府たる腦の絶對量は男子の方が大である。併し關係的重量は女子の方が重い。されば男女の精神作用の優劣について其の根據を腦に求めんとするには解剖學は之を證明するだけに進歩して居らぬ。唯雌の體重の割合に腦の重いと云ふ事と血液の薄いと云ふ事とから、女子の腦は男子に比して營養薄く、従つて疲勞し易いといふ事は出来るであらう。女子の骨盤は大きくて、左右に廣く開き、兩脚は男子より一層斜になつて居るから、走るにも飛ぶにも勝手が悪い。骨盤の大なるは生殖器を包容する關係による事勿論であるが、男子の身體上最も大切なる相違は何と言つても此の生殖器官にある。これが心身上男子を男子らしく、女子を女子ら

性的差違

いく、す、る、に、興、つ、て、力、が、あ、る、も、の、で、あ、る。動物につけて見るに、少時雄鶏の
 卵丸を取り去れば、鶏冠の發達悪しく、蹴爪も生へぬといふ様な事がある。
 人も小兒の中に去勢すると、小兒又は女兒の様な細い高い聲に止るとか、鬚
 髯が生へて来ぬとかいふ事實があり、女子も卵巣を除けば聲が低くて男子
 の様になるといふ。此の外身體的に充分男子女子の特色を見はさない事
 が起つて来る。故に男女の特質の發展は生殖器官もつと劃切に言へば、生
 殖腺に於けるホルモンといふ分泌物によることが大である。要するに生
 殖器官の存在は男女の第二次の特質を顯著ならしむるに大に力あるもの
 である。而して身體的、性的特質が又男女の精神的特質を生ずるに至るも
 のなるは言ふ迄もない。

身體的諸機
 能の相違

次に身體的諸機能の相違について考ふるに、先づ女子の手及指に於ける
 附加筋の發達は男子より優れて居るとは一般に信ぜられて居る所である
 が、針仕事を除き、其の他の手技例へば、タイプライターの使用、郵便物の手先
 の取扱などにおいて必ずしも、左様でないやうである。夫の交叉教育と

いふは一方の手が作業に熟練すれば、他方の手は放任して置いても自然に
 之に伴うて發達するといふ現象に與へた名稱である。出來の善い兒童は
 一方の手は益々熟練するに拘はらず、他方はこれに伴はず爲めに兩者の差
 が大となるに反し、知能の劣れる兒童は左右の手が殆んど同じ程度に發達
 する。就中青年期は左右の手の差違が最も著しく見はれる時期であるが、
 女子は此の兩手熟練の差に於て男子程著しからぬは事實である。

新陳代謝の機能は男子に比して劣つて居るから、従つて排泄物の如きも
 割合に少ない。

各種の故障に對する抵抗力は女子が強く、殊に疾病に對する抵抗力に於
 て然りである。手術後の死亡數、乃至自殺者數などの女子に少ないのは此
 の事を語るものとも言へる。

女子は發達期に於て身長、體重とも一時男子を凌ぐ時期あるは上記せる
 所であるが、其の時ですら、女子は肺量も、胸圍も、筋力も、共に遙かに男子に劣
 つて居る。爲めに男子の様に活力、持續力を要する力強い仕事が出来ぬ。

肺量の少ないといふのは、畢竟女子は男子より少量の酸素を消費して生活し得るといふ事に外ならぬので、従つて窒息率の女子に少い所以である。

ガルトン氏が握力計を以て調査したる所によれば任意に選べる男子百人女子百人中から強者を順次に百人程得んとするには、先づ男子より最劣弱者七人を除きて九十三人を取り、次に女子より強者七人を抜きて之を補へば足ると言つて居る。以て其の差違の極めて著しい事が分る。此れ女子の筋力の弱く活力の乏しいに基くもので、早く疲労の見はれるも此れが爲めである。モツソフ氏のエルゴグラフといふ器械を用ひて測定したる所によれば、女子は體力の持続に於て男子に劣り、早く疲労する旨を發表して居る。

女子は運動の早さ、正確さ、強さ等に於て、何れも男子に及ばない。これ練習境遇の相違よりも來るのであらうが、又女子の筋肉中には比較的水分が多いにも因るのであらう。野蠻人にありては此の差が、文明人の男女子の間程著しくはないが併し如何なる動物にありても、一般に雄は雌よりも強

い。故に此の差違は自然に基くものと考へられる。

出生の總數は男子の方が多いのであるが、出生時に死する者の數は亦男子に多い。此れ男子は女子よりも大抵頭が大きくて難産の可能性に富むからである。生後も此の頭の維持といふ事が男子にありては女子よりも餘程難かしいものと見える。唯妙齡期の死亡率は女子に多い。蓋し妊娠、初産などといふ女子特有の大役を有するがためであらう。以後の生活期に於て女子は概して男子よりも強い。とにかく女子は生涯の兩極端、嬰兒期と老年期とに於て著しく死に對する抵抗力が強く、長壽者も著しく女性に多いのは事實である。

終りに男女體質の差違を生物學的に考察すれば、夫の性の研究に於て、斯界の權威と言はれる英國のゲッツ及タムソン氏が性の進化中に唱導するが如く、男子は消費的、活動的であり、女子は靜止的、貯蓄的であると言ふ事が出来る。細言すれば雌は自己活動の爲めに身體のエネルギーを消費しないで、子を生産する爲めに之を貯蓄して置く。従つて其の生活は活動的で

なく、静止的である。之に反して雄は生産のための負擔が少ないから、其のエネルギーは自己一代の活動に充て、消費し盡す傾向がある。従つて其の活動は旺盛で華やかで、恰も煙火のバツと開いてバツと散つて仕舞ふに類するものがある。即ち雌の主義は貯蓄であり、収入であり、構成であり、利得であるが、雄の主義は消費であり、支出であり、破綻であり、損失である。猶之を雌雄の生殖細胞について見るも、卵子の營養に富み静止的なるに反し、精子は營養少なく従つてより小さく、餓えて活動的である。大袈裟に表せば、兩者の差違は動物と植物との差に類するものとも言へる。従つて活動性に富めるものは亦變化性に富める道理で、天才、白痴、低能等の變態心理變質者を始め、鬼唇、六本指等の畸形異常に至る迄皆男性に多い所以はこれがためである。

二 男女の精神的差違

先づ知的生活から始めて順次情意生活に説き及ばうと思ふ。

知的生活の差違

各種感覺

皮膚[○]覺は男子に比して或は鋭しといひ、ジストロイ[○]或は鈍しといひ、ロンブロン[○]「相反したる實驗者の報告があるから、一定したる説がないといふ方が安全である。併しタムソン女史の調査によれば女子の方が鋭しといふのが正しいやうにも思はれる。夫の皮膚覺の特殊の變態である襟の感

は特に妙齡の女子に著しく發生するは人の知る所である。
痛覺計[○]による實驗、入墨病氣看護、傷口恢復の遲速等による普通の觀察の示す所によれば、女子は男子よりも痛覺[○]を感ずる事が鈍いといふことになつて居る。此れ生理的に斯かる可能性があると共に、或は女子といふ特殊の地位から來る社會的慣習の力も痛覺を多く忍ばしむるやうに出來て居るにも因るであらう。
溫度[○]感覺については委しい事は分らぬが、男子の方が稍々温冷の感覺鋭敏であるらしい。これ女子は脂肪に富み、よく體温を保持するが爲めである。

嗅覺[○]は米國のニコルス伊太利のオットレシギなどによれば、男子の方女子

よりも、鋭い事を示して居る。タムソン女史も亦精密なる實驗によりて此の報告を是認して居る。しかし嗅覺の極端なる所有者は寧ろ婦人にあるらしい事は夫のヒステリー患者などに於て見る所である。

味覺の鋭鈍についても定説はないが、ニコルス等が米國の學生につき種々の溶液を作り、苦、甘、酸、鹹、アルカリ等の味を用ひ實驗したる所によれば、鹹味は別として其他は何れも女子の方が鋭い事を示して居る。これも女子は食物の調理などに當るといふ社會的慣習の力による事が多からう。

聽覺についても亦男女の差違に關し定説がない。唯低い音を聽取する力は男子が優れ、音の識別力は女子が鋭敏であると言はれる。

視覺、概言すれば、光覺に於ては男子優り、色覺に於ては女子が優つて居る。色盲はたしかに男子よりも少ない。とにかく人種や階級によつても違ふが、概して色盲、聾、白痴などの下層社會の男子に多いのは事實であるやうである。色聽といふのも一種の變態心理で或音を聞けば直に或色が、アリ／＼と心に現はれる作用である。例へばオルガンを聞けば赤笛を聞

けば黄琴を聞けば青といふ風に色を思ひ浮べるのであるが、これはわけて女子に多い。

其の他、氣象に對する感覺ともいふべきものがある。これは有機感覺、皮膚感覺などの錯綜して生ずる一種の感覺と思はれるのであるが、頗る女子は鋭感である。春夏の交さては夏秋の交における季節の變り目、或は日々の氣象上の變化の如きは餘程心身に影響し、發狂者、自殺者を多く發生するは統計の示す所である。學校兒童なども湿度、氣壓、晴雨等の如何によりて日々の訓練狀態、學業成績の上に種々の變化を來すは教育者の日常熟知する如くである。女性は斯る氣象の變化に際し、或は頭重じ、或は身體上に一種の壓迫を感じ、或は氣分勝れぬといふが如き兆候著しきものがあり、一二日前から萌して變化を豫知せしめる。わけて神經質の婦人は此の鋭感性強く、恰も天氣のパロメーターたる觀がある。

女子の精神的特徴の一としては早いと言ふことを挙げねばならぬ。言語でも早口である。心中の觀念の活動が早いから、之を發表する言語も自

然に早くなるのである。判断も推理も亦早い。之を觀念の進行についていへば、元來同一人でも感情の状態如何によつて觀念進行の速度に差違あるを免れぬ。即ち精神の興奮せる時と沈靜せる時、喜怒哀樂の情内に動ける時と然らざる時とは趣が違ふ。之を女子に見るに、概して男子よりは觀念進行の状態が早い。換言すれば、觀念が心中に見はれる事も早く、又消失する事も早く、轉換が極めて速やかである。女子の早口なのはこれに依るもので、夫の井戸端會議に花が咲き、女風呂が霽然として、話題の無盡藏なるは怪しむに足らぬ。大正七年の夏、米騒動の勃發も夫の富山縣下の女房連の井戸端會議に端を發したるは、世人の記憶に新なる所である。筋力に於て男子に一籌を輸する女子は、筋肉の働き方即ち喉頭舌の運動等に際し、早さを以て其の缺を補ふものと見れば、其處に無限の妙味がある。統計によれば、吃音者も男子に多く、女子は其の四五分の一に當る割合となつて居る。

女子の注意の早く疲れ、早く恢復する様は小兒に似たるものがある。又

注意の方向は多少男子と異り、日常生活や近在的、人事的の事項やに向いて居るやうである。

千八百九十一年ジャストロー氏がウ・スコニン大學に於て、男女の大学生二十五人につき、一百の語を出来る丈け早く記憶から呼び起して記さしめ、實驗したる所によれば、男子は動物、固有、名詞、動詞、器具、形容詞、植物、抽象名詞、氣象學、天文學上の言語、地理の風景に關するもの多く、女子は織物に關するもの、室内の器具、食物、建築及其の材料、礦物、文具、美術、娛樂等のものが多かつたのである。以て、男女子の注意の方向の異なる所、亦記憶事項の差違の存する所を窺ふべきである。要するに、女子記憶の特色は、身邊にあるもの、出來上れるもの、裝飾的のもの、個體的、具體的、事物の上にある、男子の記憶は、遠方のもの、構成的のもの、役に立つもの、一般的のもの、抽象的の事物の上にあると結論して居る。

又機械的記憶は、特に女子に長ぜる所で、物を嚙呑にして、試験などに應ずる傾きがある。即ち能く把住はして居るが、よく理解されては居ない。故

にメーピウス氏の如きは女子は年が老いても比較的記憶力が強いから、理解力は減じてても、記憶力で老耄を瞞着することが出来ることさへ言つて居る。斯く女子は記憶に於て長所を有し、且つ觀念の進行も早い所から、外國語の習得に長じ、會話に巧みである。蓋し言語の記憶は大部分機械的であるに由る。併し抽象的の意義の深い言語の研究などとなれば、やはり男子に劣つて來る。

想像の材料は過去の經驗記憶に求めなければならぬから、女子の想像が主として具體的・近在的・感覺的・人事的・感情的のものの上に存するは固より、男子に比しては貧弱である。又其の種類は、寧ろ再生的・受動的で、構成的・能動的なるは少ない。これ獨創的の發明・發見・工夫・創作に不得手なる所以である。且つ材料の結付方も割合に單純で、一本調子なるが多い。處女期のは子供と同じく、受動的の想像力に富み、小説的夢想者たる觀があるから、此の期の想像指導は教育上重要な意味をもつて來るのである。想像の産物ともいふべき藝術について、女性の特質を考察して見よう。

想像作用と藝術

先づ繪畫について言へば、一般に男子の方が優れて居る。偶々閨門の畫家も絶無ではないが、名流は古今共に先づ無いといふが適當である。此れ女子は繪畫の生命たる畫題を産み出す構成的の想像に短なるがために外ならぬ。繪畫に於けるものよりも彫刻界に於ては更に女流の能力が劣弱である事を示して居る。古來女子にして斯界に名を馳せられたるは聞かぬ所である。建築も男子に劣ること、更に彫刻に過ぎたるものがある。

之を作曲家について見るに、古來女人には大作なく、唯小歌曲・短曲位があるに止つて居る。奏樂家は或度迄器械的の練達と言ふべく、女子中相應巧みなるものを出して居る。併し曲の眞意を了得し其の微妙なる感情を音に寓する技倆は何としても男子が一段上手であるらしい。聲樂即ち歌唱は男子に譲らず、上手で且つ早く上達する。大概二十歳以前に其の能が頂點に達するやうである。次に文學方面を見るに、小説は比較的女子の地歩を占むる部面であるが、しかし此處にも大局の觀察に拙く、部分的の細かい觀察に巧みなる特異性を示して居る。演劇に至りてはたしかにほとく

男子の壘を摩するに足ると言ふことが出来る。これ扮する人物に順應する事が早く、其の人物の感情を直に自分のものとなし得るの致す所であらう。要するに藝術的活動は女流よりも男性が一層廣くして高い地歩を占めて居るといふ事になる。

夢は男子よりも女子に多いといふ。年齢からいへば二十歳より二十五歳迄が最も多く結婚女よりも未婚女に多い。女子は感情強く、想像の働き方も盛んであるから、夢も従つて感性的で鮮活である。幻覺は子供に類し、男子よりも容易に生起する傾向がある。男子にても天才、又は精神異常者教育なきものは有るものよりも生じ易い。女子は一般に被暗示性に富んで居るから、催眠術には極めて罹り易い可能性を有して居る。

女子は上述せるが如く、具體的感性的直觀的身體的近在的なる經驗が多いから、思考も多く此の種の材料に局限せられ男子は抽象的理論的遠在的なるが多い。思考の方法に至つては男女によりて途を異にするの理なく、論理上男子の以て正とする思考作用は、また女子に於ても正なると勿論で、

敢へて二あるべき謂れがない。

概念を構成するには分解作用と綜合作用とがある。前者は細かく要素に分ちて事物の性質を明らかにせんとする作用で、後者は分別せられたる要素を結合し或物に作り上げんとする作用である。女子の觀念の進行は頗る早いのであるから、分解作用も綜合作用も亦早い。加ふるに感情が強いと來て居るから、兎角疎漏で不完全勝ちたるは其の所である。事物の本質的屬性シヤルツ、プロパティ、アッセンズ、エッセンスと偶然的屬性シヤルツ、コンディショナル、アッセンズとを混同する事の弊は女子に特に多いのは此れがためである。

女子の判断は具體的直觀的で、一般的概括的でないのを、其の特色とする。これ數學や哲學の如き方面に不向きなる所以である。觀念の進行の早いといふ女性の特質は或事物に或性質を結びつける作用をしてまた早からしめる。即ち肯定的否定的の判断が早い。これ蓋し主辭に結びつける賓辭を長く彼れ此れと思考し吟味するは、心の努力緊張を要するが故に、一種の苦痛で、心的活動の早い女子の堪へずとする所なるによる。されば、幾多

數ある賓辭の中から、直に主辭に配すべきものを發見すること容易である。斯く判断は主觀的で早くしかも正鵠をうることがあるから、フールヒュー氏の如きは、女子の知的本能又は天性の慧眼などといふ文字を使用して此の女子の能力を見はして居る位である。併し驚くべき早き且つ正しい判断でもこれが理由を挙げぬ場合が多く、何れかと言へば、此の早い判断は誤謬を誘致する原因となる。又好き嫌ひといふ女子の主觀的の評價は判断の選擇に影響して好嫌と眞偽とを混同するの弊に導き易い。處女期にありては特に然りである。例へば、好めるものを眞嫌ひなものを偽とする類である。猶女子は古來論理的の良心に乏しいと言はれる。これは間違へることを言ひ又は行つても、苦痛と感ずる事は少ないといふ意味である。爲めに眞偽に對して比較的冷淡な態度を取るのである。要するに女子の判断の特徴は直覺的であるといふに盡きる。

女子の考へ方は寧ろ續釋的である。即ち在來の傳説思想、信仰、風習等を信賴することが強く、大前提は既に出來上つたものをもつて居り、これを標

準として個々のものを判断しようとする傾向が強い。しかも此の大前提は、鵜呑みにしたるが多く、仔細に吟味し、考察したるものではない。「悪い事をすれば、神罰を蒙る」といふ風な論證不足の虚偽を犯すもの比々皆然る觀あるはこれがためである。歸納法なるものは個々の場合に當り彼此れを比較して共通點を見出さんとするものだから、女子としては頗る堪へず、手取り早く處理したいので、比較概括などをする餘裕がない。これ分解に拙で物事を圓めるに巧みなる女性の續釋法に依據すること多い所以である。ロツチエ氏曰く「女子は一般を理解する力はあるが分解する力は少ない。女子の知及意志は事物の完了を望むものであり、従つて女子は全體を愛するが分解するのは嫌ひである。總て物事を圓める事を好む」と言つたのは此の意味に於て正當である。

女性が男性よりも一層感情的であるといふ事は、たしかに其の一特質をなして居る。ために女子は外部的の刺激のために容易に本據を乗り取られる。信仰も變り易く、外物に動かされて不安定の状態にある。能くモジ

モジして赤面する如きも女子に多いのは、これを證するものである。又顔面も男子よりは一層表情的で、何かすると直ぐ口を歪め皺をよせなどする楚々たる風姿とか嬌羞とか愛嬌とか言はれるのも、亦これがためである。しかし悪く言へば外面如菩薩内心夜叉などの語の源泉また此處にある。一寸した毛蟲類とか蛇とかを見れば直にキヤツ／＼と喫驚するといふ類は女子に多い。試験のための自殺なども女子に多いのは昔感動性の強さを語るものである。佛のマリオンの「女性の心理」中に曰く「社會の秩序の亂るゝに當り、女子は一番過激一層大膽一層鎮撫し難い。又一番火に油を注ぐ狂熱がある」といつて居る。斯く女子の感動的である理由を擧げて見れば、

第一女子は身體上に保守的の傾向があるが、矢張り精神上に於ても知識の進取的發展的であるに對し、退嬰的保守的の感情が優位を占めることになる。

第二女子の血液が稀薄で貧血性であるに加へて神経系統組織の薄弱及

女性の感動的なる所以

疲勞性の多大といふ特質から、少しの刺激に對しても興奮し感動され易い。男子も病氣になり弱れば、女子の様に感動性が強くなる。

第三女子の特有の月經も亦これに與つて力がある。蓋し月經期間は多量の出血があり、自然に貧血状態に陥り、感動性を惹起せしめるのである。

第四女子の内臓機關の特質も亦其の因をなして居るといふべきである。プラトールによれば勇氣は胸にあり、慾情は腹から起るといつて居る。男子は勇氣あり筋力も盛んであるが、これ主として胸部の心臟と肺臓との強大に因るものである。女子の感情的なるは、腹部の臓器が大きく腹部の膨脹するのに因るではあるまいか、要するに胸部の臓器は男子が大で、腹部のは女子大なるやうである。

第五女性の境遇と遺傳とは男子と異なるものあり、知能を充分發達せしめなかつたため、自然感情的の方向に走つたものとも考へられる。

概言すれば、情操は男子により多く發達し、女子は情緒的の階級に立つと見るが寧ろ當つて居る。

先づ知的情操について言へば、此の情緒の主要動機たる三者は果して女子に如何であらうか。(一)驚異の情はたしかに女子に著しい。些細の事にも驚愕するのであるが併しこれとても主として感覺的直觀的の部面に止まり、高等なる科學的なる驚異心には乏しいやうである。(二)好奇心は事物により女子は寧ろ男子よりも多いと見られぬでもない。さりながら其れとても日常生活人事上の事位で科學的の方面には及ぶことが少ない。(三)知的活動其の物に伴ふ情操は薄弱である。寧ろ眞實に對する興味尊敬心が頗る缺如して居るが如くである。

次に審美的情操に於ても女性は低級である。自他の容貌美裝裝身具等を審美的方向から眺めはするが、其れ以上には及ばない。美の鑑賞の如きも實質的や形式的に止り、觀念的には達して居ないから、淺薄皮相である。且つ審美心も主として優美快美悲哀美位のもので崇高壯美といふ類のものがない。

女性の義務心は一般に薄弱と言ふべきであらう。僅に節操位に止り、其

の他は義務と感じて死を以て争ふといふが如きは少ない。女性道德の特色としては仁愛の徳親切慈悲忍耐貞操等に於て優れるを見るが、積極的の勇氣正義感眞實を好愛する念等は少ない。又行爲以後に於ける良心の聲の見はれを察するに、男子は賞讃を感ずること多く、女子は譴責を感ずることが多いと言はれる。

宗教的情操は女子に旺盛である。故に、ホルムの如きは政治の男子に於けるが如く、宗教は女子の生活に於て顯著なる地位を占めて居ると言つて居る程である。これ感情強く、想像盛んに、思考推理の力乏しく、頼他心のはげしいに因ることであらう。宗教的發心の動機を尋ねれば、利他的なるが多い。猶概言すれば男子の眼光は世界的であるが、女子のは地方的一方は合理的であるが、女子は迷信的である。

自我感情には身體的自我と精神的自我とがある。幼兒の我は身體的自我が我れの全部をなして居る。後漸次內的の方面に注意が向ひ、精神的自我が生じて来る。女子は感動性強く、外界の影響を身體に感ずることが多

いから、男子よりも早く身體我の意識を生じ、成人しても猶身體我の方が強い。無教育の女子の我れは精神的の點なく、我の顔、我の帯、我の衣服等が主たるもので、此の方が我れの全部として重視せられて居る觀がある。自我感情より來るものに、自尊、謙遜、貶情、傲慢、卑屈等がある。

女子は感動性が強いから同情心に富んで居る。併し女子の同情心は具體的個人的であるから、甲とか乙とかいふ特殊の方面には強いが、團體とか國家とか、人類とかを愛するの念は薄い。男子は之に反し理論的哲學的抽象的である。次に女子の同情は變動し易く、萬事を忘れて愛著して居ても俄に冷却し、時には却つて敵視するに至ることさへある。即ち浮沈常なく、平均して持續することが困難である。理性の發達不充分的致す所から盲目的の見はれが多い。リボーは同情を分つて生理的・心理的・知識的の三段となして居るが、女性の同情は何れかといへば生理的階段に立つて居る。貫ひ泣きをしたりする類の事が多いのにも知られる。ヤンバウルは他人の苦痛に同情を表するは易いが、他人の喜を眞に喜ぶは天使であると言つ

て居る。反情は女子の方強く、嫉妬、羨望の多いのはこれを表示して餘りがある。

欲望の範圍から言へば、女子は概して境遇狭く、經驗乏しく、教育の程度も低いから、欲望も男子の如く廣く且つ複雑でなく、又低級である。質の上から言へば男子の知的・權理的なるに反し、感覺的・感情的で、著物・飾物・見物などが好きである。之に反し廣大の欲望例へば衆生濟度とか人道のためにかいふやうな一般的抽象的なるは餘りに持たない。

女子は早く賓辭を見附けて結論に到達するから、結論と結論との争は多いが男子のやうに結論に到達する迄の争といふものは少ない。爲めに女子のは眞の意義における熟慮といふことには到達して居らぬ。尤も女子は些々たる事に心勞し苦慮する事の多いのは事實であるが、これ單に心勞憂慮に止まつて、痛烈深刻なる熟慮をなすことがない。従つて女子は決定した上でも何うしようか斯うしようかとて間誤間誤し、所謂煮え切らぬ態度を取るは自然の心理的特質である。併し選擇作用の長びくのは興味の

如何にもよる。例へば自己の利害に關係あるものは長びいて来る。自己の選擇作用が煩はしく困難と思へば、之を他の豪い人に任せるとの決定に待たうとする態度をとるが多いやうである。

女性の意志
力弱き所以

女性の意志は薄弱で鞏固でない。此れ (一) 女性の體質は男子の消費的、活動的なるに比し貯蓄的、靜止的で靜座に適し、活動に不適當であるに因る。(二) 意志の源は筋力であると言はれる程であつて、筋力の強弱は大に意志作用に關係がある。筋力薄弱なる女子が意志の發達を沮害せられることは當然である。(三) 何事かを爲し遂げんとするに際し、手段方法上の知識が貧弱であるから、自信なく、従つて思ひ切つた事が出来ぬ。(四) 頼他心強く、少し困難面倒な事が起れば、直に人に頼り、獨力事に當るを避くる風がある。爲めに他人を動かして自己の意志を遂行せんとする教唆、使喚などの所爲が多く、狡猾陰險の辭ある所以である。

さはいへ目的が非常に明確で、欲望強烈の時は案外持續性も強く、女の一念岩をも通すの譬に漏れぬ。寡婦が子女教育のため、操守多年苦節を守る

が如き、病夫を助け家業を勤むるが如き犠牲的の行爲は善き方向の見はれて、嫉妬復讐心等はこの惡しき側の見はれてある。以上の記述は下田次郎氏の「女子教育」の著に依據したる處が多かつたことを附言して置く。

之を要するに女子は感覺的事實に興味を有するから、精神の内容も男子よりは一層具體的である。大體の輪廓よりも個々の事實に注意を拂ふ。神經組織の特質より男子に比して、心身の刺激に反動することが強い。欲望の如きも理論的でなく、實際的、抽象的ではなく、具體的で、概念的ではなくて觀察的である。身體の構造の相違上、実行力に乏しくて、頼他心強く、又被暗示性に富んで居る。但し特別の場合には女子の意志は非常に強く、粘靱性を示すことがある。所謂女の一念といふものこれである。

三 處女の心理的特質

以上は男女間に於ける身體的、精神的差違の著しいものについて略述したのであるが、此等の事實は、また處女期に於ても多少趣を異にする點は存

擦の感

すれど、大體に於て、流通し遍在する所であるから、能く如上の事實を眼中に置いて、以下の叙述を味へんことを望むものである。

擦の感じは特に處女期に著しき見はれをするは、普く人の知る事實である。元來此の感は皮膚覺の特殊の變態とも見るべく、自分がなしては感じないのに外物又は他人が接觸する時に始めて此の感が起つて来る。故に餘程心理的要素の手傳つて居るものである事は明らかである。女子にありては特に乳房、下腹部、腋下、股間等、性慾に關係ある箇處に外物の觸れる時に起るのは甚だ深い意義の存するものと言ふべきである。蓋し女性には神經過敏といふ事の外、これによりて其の節操を守り此等の部分を陰蔽防禦せんとする自然の妙用に出づるのである。故に此の感覺に基く所の動作を生理的の羞恥心と稱するのであるが、老人になれば、何れも共に止んで仕舞ふ。併し此感覺は一方節操を守らしめる豫防となるものであるが、性慾と密接の關係あるがために、又性慾を誘惑する刺激ともなり、従つて此部面を擦らるれば快感を起し笑を禁ずることが出来ぬのである。斯くて妙齡

處女の嬌羞

の女子は、性慾の生ずる頃に至れば好んで擦られんことを求め之によりて快情を満足せしめようとするのである。茲に至ると發情期の女子の自然に伴ふ娛樂の一種たる觀がある。

幼少時代から男女の別はあれど、明瞭に女子との自覺はない。然るに處女期に入るや、第二次の性的相違が見はれ、生理上月經の初潮、乳房の膨大等、非常の驚愕と恐怖とを感ぜしめ、女性としての自覺と共に急に羞恥の念が見はれて来る。斯くてさしたる事もないのに、赤面して顔を背けたり、身體をかたくしたり、座に堪へぬ様をなす事が多い。モツンなどの實驗的研究によれば、斯様に赤面するのは感情によつて惹起された心臟の鼓動の充進に對し、血管運動神經が、其の瞬間麻痺し弛緩するに因るものであるといふ。又恐怖心、嫌忌心なども同様恐ろしさものに對する防禦的退嬰的態度で身體の一部又は全部を隠さんとするものである。羞恥の見はれとしては、今迄は平氣で頓狂聲を出して居たものが、急に小聲になり、垂頭、紅潮殊に異性の面前では烈しい。併しエリス女史の言の如く、此の女子の羞恥は

男子をして己に注意し、其の性慾を亢進せしめる一種の手練手管となるものである。

如上の表現と相待つて男性に注意し初め、愛憎の情が勃發する。男子の顔付き、目付き、頭髮齒並、態度、歩態、手付き、足付き、言語、音色、笑聲に至る迄悉く微に入り精を盡して批難又は賞讃の材料とならぬはなく、無意識の裡何とはなしに懐かし慕はし戀しの初戀が醗酵して来る。斯る處女の一瞥一笑が青年男子に對して如何に隱約の間勢力を逞しうするかは豫想外である。山本瀧之助氏によれば

女の髪を縛つた繩は大象を繋ぐとか女の足に引き掛けた駒下駄の音には鳴いて居る蟲も音を止めるといふ事を言ひますが、現に青年大會などの時に着流しは一切許さない。草鞋・脚絆で出て来るやうに斯う言ひますけれども、村の娘などが白足袋でゾロリして行く青年を好むやうな氣風があれば、そんな事を言つた處が中々行へるものでありません。七八年前に青年に頭髮の五分刈り流行といふ事をやつたのでございませぬ。今日でも未だ農村の青年に不似合な長い髪をして居る者があるのです。所が一日、或村に参りました此の五分刈の事を話しますと、其處の青年團の役員が申しますのに、「貴方がそんなに髪を短くせいと云ひなされるけれども、此村などでは長

うせんと娘が惚れて呉れませんか」と言葉の儘を申し上げると斯んな事があります。實際に二時間・三時間を押し通して精神修養の講話よりも隣りの娘の目一つの使ひ方口一つの利き様の方が青年を左右する力が遙に強いのである。云々。又同氏が石黒忠恵男爵の直話として紹介せられたる中に、「或時参りましたら、君達は體育獎勵といふ事を近頃頗りに言つて居るが、實に結構な事であるが、能く考へてやらないと相撲などを取つて居る青年よりは、それを懐手して見て居る青年を村の娘が好むやうな事では幾らやつても駄目だ。相撲を取る青年に娘が總て心を寄せるといふやうな風に一體を尋いて掛らなければ不可ないぞ」

と兩者とも當期男女の意中の機微を穿つた言で、到底洞察の明なき人の言ひえぬ所である。實に青年男子の競技の上に及ぼす處女の勢力は此の如く意想外なるものがある。即ち青年は無意識の裡、筋肉緊張し動脈は張り詰める。男子が婦人の前で勝つのは一段の光榮で、婦人の前で負けるのは一段の耻である。平素仕事に不真面目な小僧でも、自分の知れる小女の前を車を引いて過ぎる時だけ、目覺しい働き振りを見せるのも全く同一心理による。

斯く異性に對する意識が明かに胸裡に刻まれると、從來は何事にも隔意

なく親しき間柄の友達と語り合ひ、嘯々高聲に談笑し來つたものが今や深く秘密の鍵を胸中に藏めて容易くは人に許さないやうになる。自己の感情上身體上に關する事項については、知人に知らせて善い事悪い事極親密の友人二三にのみ打明けて善い事悪い事、但しは自分獨りの心中に秘して他に明さぬ事といふ風な見極めが明瞭につき、口數も少なくなり、態度も一層慎ましやかになる。

嗜好

次に當代女子の嗜好を調査するに、先づ不定にして複雑。しかも無限の變化性に富むといふを當れりとすべきであらう。食量も度數も出來心によりて變化常なく、口には好んでも餘り子供らしいと思へば、態と包んで食はうとしない。假令同一物でも色や形やによつて分量に甚しい増減を生ずるのは著しい點である。又人前にありては羞ぢらつて食はず、止むをえず食ふにしても態とらしい細い口をし、品を作つて僅に聖ばかりに濟ますが常である。

濃粧時代

鳥類以下の動物を見るに雌の方が雄より大きく力強く、螻蛄や蜘蛛など

の昆蟲に至つては、實に氣の毒な程みじめなものである。更に下等動物では雄が雌の身體に縋り付いて文字通りの寄生生活をなして居るものさへ少くない。然るに鳥類以上の動物になれば、概して雄の方が大きく強く雌を壓服し、加之雄は羽毛が綺麗であつたり、鳴いたり、角があつたり、鬘があつたりして雌を誘ふやうに出來て居る。人類に至れば、男子の方が矢張り身體も大きく力も強く出來て居るが、修飾の傾向は女子に遺傳し、殊に十三四歳から十八九歳頃の女子は盛んに容儀を整へて、異性の注意を惹かうとするに努めて居る。尤も此の年代の青年男子も人生中最も高襟又は鬢殼の時代であるが到底女子に及ぶべくもあらぬ。實に此期の女子は白粉の附け方、紅のさし、工合、髪のかき、手巾、風呂敷巾着、洋傘などの附屬品の好み、衣裳の着こなし、下駄の穿き様など、微細の點に至る迄、人知れぬ心遣ひをし、浮身をやつす有様は側に見る目も可笑しい位で、げにや化粧時代の名に背ぬのである。

女子の模倣本能は男子に比して一層強烈である。大方仲間か先輩の婦

移り氣多き時代

人かを目標としてこれに真似る。即ち特に自己の信ずる友人の一舉一動發音姿態趣味信仰等を皆自己の物として之に倣はんとして居る。次に好きな先生の舉動は無意識の間に感染し、その笑ひ方目付き傘のさし方口の動かし方手巾の使ひ方文字の書き振りなど著しく傳はり中には何れが真何れが偽かを辨知せしめぬ程度に至るのである。

感染性が強いから、絶えず甲から乙に向つて走りたがり、精神に落ち付きがなくソハ／＼して居る。爲めに善きにつけ悪しきにつけ絶えず意見が動搖し、堅實質朴の人は一概に舊式の頑固のを見括り、何事をも破壊して新らしがるが女子の特権であるといふ位に考へたがる。斯い、る、移、り、氣、の、多、い、た、め、其、の、言、行、は、矛、盾、撞、着、に、充、ち、二、重、三、重、の、複、重、人、格、者、た、る、觀、を、呈、す、る、場、合、が、あ、る。或女子の如きは一友に絶交を宣告して直に談話を交へ又再び絶交するといふ有様。一日中に二度も絶交したなどの實例は當代の女子に乏しからぬ。

十五六歳頃は非常に涙脆き時代で、一寸したる事にも直に涙が出る。さ

て其の理由はと言へば、なにが何やら自身さへも分らず何とはなしに涙さしぐまる、秋の夕暮の感がある。友、達、や、母、や、に、言、は、れ、た、何、で、も、な、い、事、が、癪、の、種、子、涙、の、種、子、と、な、り、口、惜、し、涙、に、一、夜、を、泣、き、明、す、な、ど、の、事、は、少、な、か、ら、ぬ。元來女性の涙は兩刀使の如く防禦用と攻撃用との二用途を具へて居るが、處女時代のは斯ゝる念の入つたものではなく、言はゞ俄雨に似たるもので、後はサツパリして衛生的のものである。故に此頃の處女の泣くのは赤兒の泣く程の意味に取つたならば大間違で、涙の價は男女によりて違ふことを知らねばならぬ。畢竟處女期の涙は一種の道樂に近いものと見れば善からうと思はれる。

涙の時代が経過すれば笑の時代に這入る。しかし時には前後して見はれる事もある。箸が轉び木の葉が動いたとは笑ふ。帯の結方リボンのつけ方が一寸變つても直ぐ笑ふ。一體日本人は西洋人から氣味の悪い笑方をするといつて嫌はれる。成程人を見てニタ／＼笑ふのも餘り感心した話してはないが、しかし人に遭つて笑顔をするといふ事は一種社交的の

外面如菩薩

意味の撻揆を交す所以である。冗長な千言萬語を費すよりも、一笑の中千萬無量の意味が籠り、勞少なくして効果は大である。釋尊の微笑拈華の昔も忍ばれる。とにかく談話の中に笑が挿入せねば、食味に砂糖分がないと同様社交上の圓滑を缺くであらう。殊に女子には、此の微笑が非常に大切で、これがなければ同性間は固より異性の注意を惹くことが出来ぬ。

女子は表面では如何にも納得し承認したかのやうな顔附をして居ても其の實なかく納得し承認せぬものである。表面上恐れて心服し得心したかの如くに見えても、却つて内心では怒り恨み豫想と正反對の感を起さしめる事が多い。此の意味に於て外面如菩薩内心夜叉の語は女子特性の一部を語つて居る。又試験前などにおける教師の一言一行は自己の生死の死命を制して居るかの如くに考へて縮み上るのである。ために試験前後の心配は言ふも愚かて、睡眠不足、食慾不振、病人の觀がある。

女學校の學藝會、音樂會等の催しの際参加の出来る生徒の喜は大したもので本人は大得意であるに反し、選に漏れたるものの失意の様と來ては見

るも慙れな程みじめなものがある。當れるものは無上の名譽として神經興奮し、前夜から眠られぬので精神を過勞する。斯く公衆の面前に其の位置を占め、衆人環視の間に立たんとする時などは、持前の虛榮心に驅られて女性の慎ましやかなる點も忘れ、競争に熱中する。又雜誌、新聞等にて寫眞を入れ、美貌とか才媛とか言つて煽て上げられると、夢中となつて慢心がさして來る。夫の實科女學校の名では外聞が悪いとて内容の如何は問はず、高等女學校の門に争うて集らうとするのは、よく此間における女性の心理を表示する好適例である。

嫉妬心の萌芽は幼少の時期にもあるが、此の期にありては人の氣に入らうとする競争が烈しい。絶えず己と朋友とを比較し、同年輩の一寸した美しき女などに出遇へば、見知らぬ人でも後を振り向いて頭から足の爪先迄鋭敏なる測定を始めるのである。妙齡期の女子は特に容貌才智、教育衣服等に於て優れた者を嫉視する。さる人の實話によれば、容貌も學業も何れ劣らぬ同年輩の二人の女學生があつて、常に競争をなして居た。然るに其

女に嫉妬心
強き所以

の一人が病死した。残りの一人は之を見て躍り上つて喜び或夜窃かに墓に詣で、「貴方は能く死んで呉れた」と言ふたとの事。斯る情の表現する所以は、(一)虚榮心強く優者勝者を陥れようとする。(二)女子の自我觀念は狭いから、とかく利己に傾いて居る。(三)論理的知識と正確な判断とを缺くがためである。(四)環境殊に母親の言行も大に與つて力がある。蓋し年頃の娘を持てる母親は知らず識らずの間彼等の競争心を誘起し、他の同年輩の娘の名譽を毀け、縁付く際などには悪し様に言つたりするからである。フキング氏曰く「嫉妬心は愛情の食鹽、又は胡椒である。之れを少し用ふれば、ピリ／＼として風味を増すも、多きに過ぐれば之を損するのである。故に嫉妬の道德的本分は他なく、注意と恐怖とを以て貞操と純潔とを保護監視し、愛情の發達に資するにある」と味ふべき言である。

異性相愛するは人生の自然であるが、時としては男子にして男子を愛し、女子にして女子を慕ふが如き變態の現象がある。所謂同性の愛なるものである。一種の顛倒性慾で尼僧女、女工、女生徒、女囚などの間に多い。これ異

處女に多き
同性の愛

性の共存同居がないため、色情の満足の出來ないのに起因する。

斯る同性の愛が何故女性に多いかといふに、若き女子は青年女子よりも親しみ易きこと、女子に對しては社會的制裁が嚴で異性と接近しがたきこと、世は仲善しとして無知に觀過すること等による。同性愛の兆候としては書面交換が頻繁になる。會合談話を樂しみ手を取り接吻抱擁する。相互不在の折は夢想に耽る。烈しい嫉妬心を起し愛情の獨占を欲する。情人の性質を稱揚する。書面帳面などに情人の名を書き列ねる。情人の性質才能には少しも嫉妬猜疑をせぬ。自他の區別を無視し、同一の衣服裝飾物品進んでは金錢をも共通にする。

此等が一步を進むれば不徳の行爲をなしたために顔色蒼白身體の虛弱を來すやうな場合に立ち到ることが少くない。

月經の初潮は人種氣候生活の状態等にもよつて異なるが、本邦の女子は通例十三歳乃至十六歳で、之を平均すれば十四歳七箇月である。而して田舎よりも都會貧民よりも富者に早い事は諸種の調査の立證する所である。

月経が順調に行はれると否とは處女の上には大なる影響を與ふるものである。特に此期にある間は比較的神經過敏となり、感情の興奮性が大となり、或は幽鬱となり、或は輕卒となり、被暗示性が強く、一寸した刺激にも動搖され易い。或學者は此期に於て女子は著しく自制心を減じ、最も犯罪に陥り易く、所謂出來心により窃盜罪萬引などが多く見はれるといふ事を示してゐる。これ等については更に次節に於て詳説しよう。

四 處女期月経時の心理

月経なるものは受胎すべき卵子を受容し且つ之を保護するがために、子宮腔内における定期的の準備作用をなす結果であることが出来る。月経は子宮卵巣兩者ともに關係して居るが中にも子宮周囲の膜は著しく充血して來るが故に、懷妊がない時には血管から子宮内に血液が流出し、かくて其血液は外部に漏れ出るに至るのである。普通月経は二十八日目毎に繰返して行はれる。此の二十八日の期間中、子宮の充血が四日經水間に

月経作用と
前兆

漏出が四日間、周囲の粘膜の恢復は七日間、其の他の十二日が休養期となつて居るといふ事である。斯様に考へて來ると、婦人の生殖的生活の大部分は月経のために費されて居るといふ事になる。故に婦女子のあらゆる行為や意見や罪惡的の傾向やも、此の月経と相連關して適當に評定することが必要となつて來る。月経作用が斯く相連關して行はれて居る限り、婦女子は繼續的の用意を必要とする風な義務や負擔やを履行することは彼等により頗る難事と言はねばならぬ。

月経の始まる前身體の様子は稍々變化し、脈博の數は多くなり、血壓も増すのであるが、月経が過ぎ去れば亦消え失せて仕舞ふ。これと相應じて甲状腺が大きくなり、乳房腺も膨れて柔かくなる。下眼瞼や乳嘴腺は黒味を帯び、刺激性の體臭が見はれる。音聲も質に於て變化し、反響が少なくなる。神經組織は多感となり、嫉妬猜疑や不機嫌やに傾き易い状態を示し、倦怠著しく、精神的の努力不能の如き様を呈し、意氣消沈し、不愉快の情調となる。時には漠然たる苦痛も伴ふらしく、食慾は減じ、睡眠は妨げられ、嘔吐、頭痛、心

臓の動悸、部分的の悪寒若しくはボツと赤くなるといふ風な徴候を呈するに至る場合もある。

此等の徴候は月經作用の終ると同時に消失し、婦人は恰も再生したらんが如く、生の喜悅に充ちまされ、女性之美はしさと能力の頂點とを示すのである。尤も以上の状態は何人にも常に存するといふではなく、少數の婦人に至りては經水の漏出がなかつたならば、殆んど無意識に過すといふ位極めて表示の乏しきものもある。

古來の謬見
の誘致した
る女性心理

月經期は植物界ならば花を開き實を結ぶ作用にも比ふべく、動物界ならば或種の生殖作用にも類して居る。而して此等は何れも誰れ怪しむものなく、寧ろ自然の妙機に觸れ、賞歎の情を惹き起さしめさへする位である。然るに人間界に於ては然らず、遠き昔より現時に至る迄、斯る見易き類同の事實も閑却せられ、女子は月經期に於て不潔である、此の期は定期的に身體の穢れを拂ふために存するといふ風な古風の見解に従ふ状況となり、月經は差すべき事、隠すべき事、乃至異性に拒斥せられる事柄といふ謬想を馴

致したのである。

婦人等は斯かる一般に流布せる謬見に従ひ、つとめて月經期の状況を陰蔽せんとし、時には性の健康に有害なる手段までも用ふるに至つたのであつた。此の種の陰蔽にして繰り返さるれば繰り返される程、婦人を導いて卒直眞實の風に遠ざかり、快活公明の心事を害するに至るは當然の事である。併し陰蔽のためにかく此の期間には家内に引きこもる事となり、休息の機會を得る結果となつたのは、また反面有利なる點でもあつた。

月經の初潮に際しては大様二種の見方はある。其の一は身體の一般的發達の單なる表徴として特別の豫兆もなく徐々に見はれ、しかも直に規則正しく順調に進行するものである。其の二は之と趣を異にし、神經性の表示、發熱、痛み乃至腰氣といふ風な豫兆あり、經水の漏れる時期も不規則で、二三箇月若しくはそれ以上の停滯を見、一箇年も経て漸次常調に向ふものである。

最初の月經は屢々無知の少女には激しき感動を與へるが常である。流

初潮の心身

血を見て色を失はんばかり且つは驚き且つは恐れ何處か傷害を受けて然るものと思ひ局部に冷きものを充て、流血を止めんと試みるものさへあるといふ。初潮後に於ける少女の気分はたしかに一變化を來すのである。即ち以後に於ては子供らしい遊戯を止め以前に比すれば平穩になり沈靜になる。ともすれば孤獨と迷想とを好み想像性被暗示性が強くなつて來る。愛情嫌好の變化著しく衣服や容貌やに注意を拂ふ事が多くなる外に何とはなしに異性に心を寄るのであるが羞耻の情も一入に外見は如何にも慎ましやかに包み其れと外には見はさぬ。わけて感動性が強くなり自己の全身に起れる變化について心配し、とかく深き思に沈み勝ちになる。普通此等の見はれは時を待つて消え失せるのであるが時には心身の病的兆候ではないかと思はしめる程劇しき状態を呈する事がある。個人の身體の状態に適應したる運動と休息とがそれ／＼調節をえたる時其處に健康が恢復せられて來る。

月經の初潮が神經組織の上に及ぶ影響は月經時が定まつてから以後に

於て與ふる影響に比ぶれば其の度合に著しい差違がある。即ち初潮期の障害は頗る強烈で或はヒステリー或は精神病をも惹起する。神經性の少女などは此の傾向が一層著しい。

若し初潮期に於て或種の著しい精神感動があれば多くはヒステリーの症状に陥るのである。又或原因から月經作用が沮止せられる事があればこれに隨伴する現象は以後に於て何れも大袈裟の形となつて見はれて來る。即ち或は危しい恐怖に襲はれ或は危険の病氣に罹れりと想像する類である。斯種ヒステリーの表示は何等の原因もなきに談笑し啼泣し更に癲癇性の失神的發作を起し叫んで地上に倒れ輕微の筋肉の痙攣を起しなどする。又腦髓と生殖器管との間には非常に密接なる關係の存するがために月經の阻止或は過度といふ風な狀況は精神の障害性慾の昂進憂鬱幻想狂的衝動等を惹起し易からしめる。

豫備的知識のない少女に取りては上述せるが如く神經性に及ぶ影響は最も著しいのであるが特に心臟や肺やの病氣を有するものにおいては一

層である。之に反して、月經作用が見はれ初めると、以前に存したる神経性の症状例へば、舞踏病又は或種の精神病などが、餘程緩和せられて快癒に赴くといふ場合もあるといふ事である。

此の如く月經作用なるものは生殖のあらゆる器管即ち子宮、卵巢、甲状腺、乳腺さては流血等の總ての方面に連關せるを思へば、最初の見はれが無經驗の少女に激しい驚愕を惹起したために、神経性の疾患を誘發し、以後の各期々々に之を反覆するに至るといふのは寧ろ怪しむに足らざる事である。故に春機發動期に近き少女等は、彼等の免るることの出来ぬ生理上の變化に對して豫め待ち構へ、以後順調の経過を履みうるやう教へらるべきは當然の事と言はねばならぬ。更に進んで出来うべくんば、最初の場合には特に其の母たる人か若しくは最も思慮あり同情ある年長の婦人かによりて看護助勢を得るが望ましいのである。

處女が多少月經なるものに對し豫備的の知識を有するにしても、猶初潮後は大に警戒を怠つてはならぬ。性的の生活に於ては各月中の四日若し

くはより以上の日數流血を見、それに伴つて意氣沈み、身體倦怠を覺え、精神の感受性高まつて來るのであるが、此の際彼等は自己に取り最も適切なる救濟法を採用すべきである。此等の或ものは教へられもするが、寧ろ各人の體質當時の狀況等によりて個人的に宜しきを制するやう自ら處理すべきである。

月經は耻づべきものであるとの考は何人の頭よりも一掃せねばならぬ。寧ろ各四週間中數日間は安靜休養をなすべきを警告する重要事として之を待ち常態に復する迄は重視すべき性質のものと見ねばならぬ。殊に最初の時期に於ては出血の全く止む迄床中であらしむべきである。少くとも三日間は臥床し、之に次ぐ二日間位は休みたり起きたりして室内にあらしむるがよい。食物は淡泊にして刺激性なきものを選び、植物性のものを多くして動物性のものを減じ、水分を多量ならしむるやう注意すべきである。わけて腹部の正常なる活動を大切とするから、斯かるがため必要に應じては稀薄な食鹽水を用ふるがよい。尻骨盤に痛みを覺ゆるが如き場合

には外部から温き物を充てると効果はあるが決して専門醫の許しなきに、勝手に鎮痛劑などを服するが如き事あつてはならぬ。

斯くて、身體上のみならず、精神上にも全く心配や悲愁といふことを離れて安靜を主とし、餘り刺激性のなき適度の讀物、面白き遊び乃至疲勞のない仕事などは、差支へないが、さりとて複雑なる小説を讀ましめるとか精緻を要する針仕事などをなさしめるとか、いふ風に精神を過勞せしむるは慎むべきである。月經期が生憎遠足とか運動會とかに際會する場合があるにしても、處女側から出席の要求強烈であるにせよ、斷じて完全の休養を要する日時を其のために短縮するが如きことあつてはならぬ。

最初の一二箇年を通じ、平時と雖も成るべく食物は實質的で淡泊なるものを用ひ、茶や珈琲の類は避けしむべきである。常に注意深く腸が正常なる活動をなしつゝあるか否かを檢し、運動も適宜に且つ規則正しく、且つ出來うる丈け戶外にあらしむべきである。睡眠は時を違へず、靜かなる別室に於て長く深き眠を取らしめたい。固い帶長くて重く緊着せる襪衣、高い

踵の靴等は避けしめるやうにし、衣服は輕くて温かて心持ちの善いものが望ましい。禁條としては、過度の勉強、夜深しの遊興、刺激性の遊戲や讀物、男性と接近するが如き遊び事等である。

月經の機能が定まつて茲に整つて來た時は、思慮ある婦人ならば、自己の經驗によりて月經期の注意如何は自己の健康に至大なる關係ある事や、並に自己といふ場合にのみ適用の出來る特種の手當法、用意などにつき一通りの理解が出來てくる。斯うなれば全く當人の爲す所に任せて差支へはない。

最後に、妙齡期の處女を持てる人々乃至指導の任に當る人々の特に注意を促すべき事がある。他なく、月經なるものは處女の心身の健全を保つが上に、何れから言つても、正常に且つ順調に行はれしめねばならぬものである事を強く深く印象するにある。

第十四章 青年指導者の資格

人生に於ける墮落か向上かの堺目に立てる青年を指導して正常の方向を取らしむるは、容易の業ではない。従つてこれが教養の任に當るは何人を以てするも可なりといふ譯のものではなく、少くとも左記數項の資格を必要とする。

一 一定の人生觀を有すべし

青年は希望の眼に輝けるも、其の反面當期ほど寂寞を感じ煩悶に苦しむ時期はない。殊に一旦希望の夢が破れて現實に目覺める時に於て然りである。青年の煩悶は種々の形に於て見れるのであるが之を大別すれば慾望と意志の衝突現實と理想の衝突潜在意識と顯在意識の衝突に歸するこゝとが出来てあらう。何れも意志の強からざる思想の動搖定らざる事が此の直接原因をなして居る。夫の醫師が個人の症狀を熟知して投藥する

が如く、青年指導の重任に當るものは、能く這般煩悶の因りて來る所を究め、其の精神上的の創痕に對して飽くまで同情と理解とを有し、彼等の求むる所を充してやらなければならぬ。これ人生觀の確立せる人を持ちて始めて期待しうる所である。

若し一定の人生觀もなくして漫然、青年指導の任に當らんとするが如きあらば、恰も櫂なくして船を行き、燈なくして暗夜を行くに似て、大膽無謀の擧と言はねばならぬ。かくて假令良好の結果を收めえたりとしても、寧ろ偶然の紛れ當りと見るべきものであらう。一定といふのは一時的の間に合せや、猫眼の如く屢々變更して纏らぬ風の考を除外したるものの謂である。反言すれば、少くとも自己一身上につきては人生は此くあるべし、此の如くならざるべからずとの強き信念を有し、是が自己を推進する動力となり、根本原理を體得せる人を指すのである。これ當座々々の御都合主義や風向を見て暮す日和見主義者の能くする所でもなく、又長い内的經驗を経ず、絶えざる内的の反省と修練とを積みぬ人には、求むべからざる事である。

苟くも青年の精神に交渉し指導を與へんとする人にして此の種一定の人生觀を缺如したならば、何時かは辻褄の合はぬ事が出來して前後矛盾の破綻を生じ、青年の思想を攪亂し、彼等の眞面目なる考を滅却せしむるに至るであらう。之に反し、人生に對し解釋を有する人は青年の急所を衝くに妙をえ、彼等の煩悶に對し、過失に對し、不心得の心事行爲に對して、徹底せる指導と感化とを與へうるのである。

正しい人生觀を培養し、絶えず新時代の歸趣を把握しようとするには、何よりも先づ哲學的倫理的の修養を怠らぬやうにしたい。ウェーバーは其の著教師の人格中に於て、教師に哲學的の頭腦の必要なる所以を切言して居るのであるが、是やがて移して以て青年指導者に充つべき警策と思はれる。しかし氏の言ふ心は單に學問として哲學倫理學の研究に没頭せよとの意味ではない。哲學者必しも哲人でなく、倫理學者又必しも道德家とは限らぬのである。之を學び之を研究するも、吾人の人格の血とし肉とならねば甲斐がない。所謂論語讀みの論語知らずに終るであらう。即ち人格

的要素の中に編み込み、自から哲學的倫理的の人格を創造する人ならねばならぬ。若し左様でなければ言行はすべて上滑りて根柢淺く、到抵生命あり、充實せる生活をなす事が出來ぬ。此の如くして青年の人格に觸れ之を動かさんことは思ひもよらざる所である。

吾人は新時代の思潮の餌となりて、昨是今非甚しきは、目的と手段とを間違へるやうな輕浮な人にも、賛しがたいが、さりとて日に月に進歩する新時代の産める哲學や倫理學をば、常に新らしい時代精神を以て玩味し批判しようとはせぬやうな墨守的態度にも與しがたい。かゝる人士は共に青年の主觀性に觸れて之れを動かす所以ではない。指導者は須らく時代思潮の趨勢を冷靜に看取して、其の時弊を見、其の短所を指摘しうるだけの識見を要する。これには、何うしても確乎たる人生觀と新らしい知見とが、其の基調として要求せらるのである。現代思潮はすべて健全であるとして無批判的に其のまゝ受容せらるべきものはない。其の中には危険分子、畸形分子、不淨分子が交錯して居るから、此等を濾過して清醇透徹せる流れと